KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

洋学文庫
文庫8
E102

京都帝国大学附属図書館

窮理小解序

今譯定スル所ノ坎ノ小冊子ハ其本文章面ノ論理精明故ニ予カ常ニ甚タ愛スル所ノ者也然ルニ我邦中邦語ヲ以テ著セル人身究理ノ書未タ曾テ坎ノ如ク善本アルヲ見ス是レ予カ翻譯ノ為メニ時日ヲ費スヿヲ企テシ所以ナリ且ツ坎書ヤ唯醫家ノ為メノミナラス亦タ常人ノ為メニ著述セル者ニメ殊ニ常人ハ本論ヲ解シ得サル者多シ故ニ予自ラ其淺陋ヲ省ミス篇中一二ノ部分ニ於テ廣ク諸書ヲ纂集ノ註解ヲ加フ而メ又譯文ハ皆勉メテ「シーケンヘー」キ」ハ

V 43 2451

綴辭法ニ從テ次ヲ綴ルト雖モ亦何ソ能ク予ノ
謬誤無キヿヲ得ム ヤ願クハ學者宜ク能ク此
ヲ校正改革メ吾本ナラシメハ予カ大幸亦タ何
ソ此ニ過キン予今亦別ニ英創書譯述ノ需ノ辭
ヘ可カラサル者有テ甚タ忙閑ナルヵ故ニ一ヶ
此書ノ謬誤ヲ校正スルノ暇タ得ス

譯者　エイプマ書

人身究理學小解

ホーグドイツ　ローセ著
エープマ　譯註
和蘭
備中　緒方章公裁　譯

題言

人身究理ノ學タル各人ノ見ニ從テ各々其端ヲ
異ニスト雖モ是ヲ總フルニ唯是レ止活セル人
身ノ自然ヲ明ラカニスルノミ羅甸ニ是ヲ「ペ
ーシセアントロポロギー」ト云「ペーシセ」ハ自然
ノ義也「アントロポロギー」ハ人身學ノ義也以テ
此ノ學ノ眞意ヲ加ルベシ是故ニ此學ハ人身ノ

自然ヲ知テ疾病ヲ療セントスル徒ノ軍ク知立
サルベカラサル最モ人緊要ノモノタリ
○夫レ人身ハ本ト是レ天地間萬物中ノ一物ニ
シテ動物ノ部類ニ屬シ更体質分子一種固有ノカ
ヲ備フ
○凡ソ萬物中生活ヲ具有スルモノ必ラス機体ト
云機体トハ其体諸種ノ器械ヨリ合成シ其器各
々一個ノ機動ヲ備ヘ其機動相合一メ以テ其全
体ヲ生成保維スルモノナリ
(註)凡ソ機体ハ其質不円ノモノヨリ合成シ不
機体ハ其質円種ノモノヨリ合成ス譬ハ今「マル

メロ」ヲ取テ必ラ破碎スルニ更碎大小形状
各々相違フト雖モ其質ニ至テハ一モ相異ナ
ルモノ無シ機体ハ是ヲ部割スルニ分々相異
シカラス又々機体ハ内部ヨリ生養シ不機体
ハ外部ヨリ増育ス是レ機不機体ニ別ノ大キ
ルモノナリ
○是故ニ機体ノ性ハ一個ノカヨリ生ス其カ
タル体質中一分モ離ル可ラサルモノニシテ一
モ必ラ離レハ機体ハ機体タルヲ得ス而メ其カノ用
タル機体ノ全質ヲメ常ニ不断ノ変動ヲ発セシ
ムル即是レ所謂「生活カナル者也

凡ソ生活体（即チ核体）ニ二種ノ別アリ其一ヲ動物ト云其一ヲ植物ト云大レ萬物ニ感動シ隨意ニ挙動シ口脣ヲ以テ自在ニ其体質ヲ栄養シ不変ノ陰具（植物ノ陰具ハ即花蕊也故ニ一ヲ有四時常ニアラス）チ清氣ヲ吸入スル（植物ハ炭気ヲ噴出ス）ハ是レ動物ノ植物ト異ナル所以ノ徴候也

（註）夫レ人ト植物トハ其別固ヨリ著大也ト雖モ可リ一ベーラン（如チ植物性ノ動物原名ブラント）シレント植物ノ別ニ至テ其限界甚タ定メ難シ而レモ細カニ其各々固有ノ性ヲ以テ坎ヲ考レハ其別自ラ照々久リ今其体ヲ合成スル原質ヲ以テ比較スルニ其原質ノ数動物ニ於テハ植物ヨリ多ク（其原質少キモ酸水炭ノ二質ヲ以テ成リ動物必スト「リセラン」ト曰ク）植物ハ窒ノ四質ヲ含ニナリ凝流ニ体ヲ以テ比較スルニ動物ニ於テハ其凝体ノ量植物ヨリ少ク（体ハ「リセラン」ト曰リ人身ニ於ケル凝体ハ其全体ノ十分一ヲ成シ樹木ニ於ケルモノハ全体ノ四分一ヲ成ス）且ツ植物ニ於テハ其合成原質ノ数少ナシト雖モ動物ニ比スルニ其揮発少ナシ是レ動物体ニ於テハ気状ノ窒質其多分ニ居リ植物体ニ於テハ固性ノ炭質其基礎ヲナセハナリ而レモ其動植二物体ノ界限ヲ定ム可キ最大較著ノ徴候ハ凡百ノ動物上ニ

人ヨリ下モ植物性ノ動物ニ至迄テ有セサルモノ無キ所ノ一個ノ空洞（スルテ）即腸胃也其空洞内ニハ飲食消化ノ機能有テ其内面ニ吸収ノ機能ヲ備フ其吸収ノ力故シ体ノ外面ニ於ケル力ニ比スル二最モ強ク其機能ヨリ全体ノ栄養ヲナス植物ニ在テハ故ノ機能ヲ体ノ外面ニ備フ而メ故ノ空洞ハ其感触最モ強キモノニメ全躰ノ死メ既ニ心臓ノ鼓動ノ絶ユル后ナモ尚ヲ丈蠕動機ヲ保續ス

○人ハ是レ動物ニ属シ而メ動物中ノ最モ十全体トスヿヲグデーレンニ属ス

○人身窮理ノ学ニ二種ノ別アリ其一ヲ普通ノ学ト云ヒ其一ヲ各區ノ学ト云フ夫レ人ノ体タル凝流ニ負ヨリ合成スルモノニメ其各部ノ運化機能スル故ヲ普通ノ学ト云ヒ各部ノ機能ヲ考究スル故ヲ各区ノ学ト云フ

第一編

普通篇

第一章

夫レ人ハ他ノ乳養ノ動物ト其類ヲ同スト雖モ其他ニ殊ナル所以ハ固ヨリ其能ク義理ヲ辨シ言語ヲナスニ在リ加之尚ヲ丈較著ノ別丈ナ

カラス譬ヘハ全体製造ノ精密ニメ柔脆ナルト
身体外面ノ滑沢ニメ軟弱ナルト頭蓋骨ノ大ナ
ルト甚タ顔面及ヒ齦齒器ノ比ニ過クルト顔面
ノ平坦ナルト鼻ノ隆起セルト脳ノ大サ此ヲ神
経ニ比スルニ稍大ナルト後脳ニ比スルニ前脳
ノ過度ニ大ナルト腸胃ノ製造内食蔬食共ニ相
適當セルト盂(眼窩ノ底)ハツケン即小膜平滑ニメ短
矮腸胃互ニ相聞ケテ恥骨合縫ノ短キト女子ニ
在テ其陰具ノ製造及極能他ニ異ナルト即子宮
横膜処女膜海綿
月経ノ来ル男子ニ在テハ夢中ニ遺精ヲナスト
男女共ニ媾合ノ時ヲ定メサルト其他品ヲ両手

ノ挙動自在ナルト立行スルヿヲ得ルノ差是レ
ナリ

## 第二章

或人云人ハ四足ヲ以テ歩マサルカ故ニ其歩行
健固ナラス且ツ竪立スルニ由
テ発人ノ病ニ罹リ易シ故ニ四足行ハ乳養動(胴)
物ノ本生也ト而シテ人身ノ製造タル一種別種
ナルカ為メニ能ク其不足ヲ給補ス其較著ナル
モノハ即チ頭頸接ノ仰ト脊椎ノ製造ト下肢ノ
長大ニメ又肋骨敷帯上肢ヨリ強固ナルト肘膝
ノ内ニ撓ムト胸腔ノ狭短ニメ並ニ張レルト盂

出ヲ平滑ナルト尾骶骨ノ内部ニ曲レルト全
身重心ノ両股骨頭ノ中間ニ正ク向フト諸関節
ノ製造ト胸腔及腹腔ノ内蔵ノ状ト皆ヨク竪立
スルヿニ適當ス唯々其竪立ノ身体ニ変ヲナス
モノハ次仕ノ徒ニ於テ全身ノ長毎朝ニ晩ヨリ
大ナルヿヲ得ルモノヽミ

(註) 其体長ノ変ハ殊ニ脊骨ノ毎椎ヲ相接續セ
ル軟骨伸長屈縮ニ由ルモノナリ

第三章

大ヒ人身ノ製造ハ人々各相異シト雖モ亦々是
レニ三種ノ別アリ其一年齢ニ由ルモノ是レナ
リ其初ノ二種ニ於テハ予將ニ後ニ詳カニ此ヲ
詳説セントス故ニ今此ニ贅セス其居地ニ由テ
形状色澤ノ異ナルヲ以テ人ノ種族ヲ定メント
スルトキハ謬誤ヲナスヿナカラス何トナレハ
其地産地ニ非スト雖モ其居ルヿ久シケレハ終
ニヨク相移変スルモノナレハナリ

第四章

人身ノ原質タル要ヲ分析術ニ由テ考窮スルニ
数種アリ曰ク石灰土曰ク鉄曰ク酸質曰ク硫石質

掛ニ是レ即窒素ノ一名 是也此諸原質ハ体中各部ノ異ナルニ従テ其結合亦タ千差万端ナリ

(註) 窒素ハ一名酒砂(ゾモニンドストラ)原基羅(アンモニアクリート)甸名ノ人体中ニ於テ遍分ヲナスフ(スチクストラリユフト)ハ予既ニ題言中ニ於テ此ヲ説ケリ温質モ亦動物体中ニ於テ缺ク可ラサル緊要ノ原質ナリ

第五章

身体ノ部分此ヲ大別メ二トス曰ク凝体曰ク流体

第六章

流体ハ即人身中諸液ノ総名ニシテ此ニ三種ノ別アリ一ヲ血液ト云ヒ一ヲ未塾液(未タ血液トナラサル者)ト云ヒ一ヲ分離液ト云フ既ニ血中ヨリ分離セルモノ凡ソ人身中ニ在テハ流体最モ其多分ヲ成スモノナリ按ニ此セクシト曰百二十斤ノ屍ヲ取テ竈中ニ乾固セシムルトキハ十七日計ニシテ其重サ減メ十二斤トナルヲ以テ流体ノ夏キヲ知ル可

第七章

凝体ハ是レ其繊維質(ヘリビルストフレーム)膠質(ワーテル)水液及揮発香質(アイユツテヘリーケンテスフ)ヨリ合成ス

註 流体ハ其成分即是レ其質ヲ合成スル分種トニフノ義ト皆凝体ト相違フヿナリ唯々其合是ニ倣ヘ成ノ状ノ互ニ相遠フノミ凡リ凝流ニ体ノ別ハ其質ノ剛柔ヲ以テハ成シ難シトス諭ヘハ腎ノ脂肪ノ如キハ其質脳ニ比スルニ甚タ硬固也然ル誰カ能ク脳ヲ流体トメ脂肪ヲ凝体トスル者アラン故ニ予ハ人身ヲ分テ既ニ骸(ゲヲルゲーセ)体(セールテ)凝体ト水骸体(フンゲフルガニセーリデ)ト是レ流体ハ未タ十分ノ骸械タルヿヲ得サレハナリ

第八章

凡リ動物体及ヒ植ヲ骸体ノ基形ヲナスモノハ纖維ナリ其纖維互ニ相排列メ一平面ヲナスモノヲ小板ト云フ原名プラーチス

註 動物体ノ成分相合シテ凝体トナスヤ其混合カト引カトヲ以テ互ニ相連接シ以テ一種ノ定形ヲナスヿ猶ヲ金属資始ノ如シ骸ニ金属ハ原名ゴルテラーレン金成ヲ資ルヤ各々定形アルヿ水精ノ類ノ如シ其定形ハ即纖維也矣故ニ諸骸体ノ基礎也

第九章

其小板活物膠原名ジーラルレーキニ由テ互ニ接着

合併シ以テ蜂巣状組織ヲナス故須ハ全身各部ニ在テ一種ノ液ヲ其中ニ含蓄シ其状恰モ隠要蜂巣ノ状ノ如シ故ニ故名ヲ得ル

## 第十章

蜂巣状組織ハ実ニ是レ全身ノ基礎ヲナスモノニシテ体中各部ノ織維ミナ是レニ由ラサルナシ

## 第十一章

其蜂巣状組織ハ人ニ於テ他ノ乳類動物ニ比スルニ最モ華軟柔弱ナリ而シテ其疏密強弱ハ各人各部ノ異ナルニ従テ相同シカラス

## 第十二章

全身ノ蜂巣状組織ハミナ倶ニ一個ノ張力（原名パンクトラ）ヲ以テ備フ故カハ死後ニ於テモ仍ヲ見ルヿヲ得ルカ故ニ亦タ故ヲ死カニ属ス（換ニ原名ドレッテ）カラクト是死体活体倶ニ有スル漁柄

栄養ノ為メニ較著ノ運動ヲ為スヿ死体ニ於ケルカ如キノ比ニアラス故ニ又タ故ヲ生活体ノ収縮力ト名ク

## 第十三章

蜂巣状組織ハ全身中何レノ部ニ在テモ必ス液ヲ

其中ニ含蓄スル而ノ麦リハ諸部ニ在テ水様ノ蓋
氣若クハ脂肪ヲ以テ充盈シ骨中ニ在テハ髓液
ヲ含ミ眼内ニ在テハ硝子液ヲ蓄フ

## 第十四章

凡ソ蜂巣状組織ハ流体ノ変ノ凝体トナル其始
メナルモノニノ其成分ノ結合混和相異ナル二
従テ以テ各々相異ナル諸機体ノ基礎トナル即
チ皮革（カーナース）脈管（ベーテン）剛骨（ベーテンカラノベーテン）軟骨（ベーテンカラノベーテン）靭帯（バンデン）筋（スヒーン）腱（ヘーセン）神経（ヘーセンヒーニエン）及ビ蔵機（イングヴンデンキリーン）
等ミナ是ヲ基礎トシテ各自ニ適当ノ組織ヲ調
以テ外膜ニ被包セラル

## 第十五章

凡ソ全身諸機械ミナ各自ヲ運動メ以テ生活ヲ
成ス其原一個ノカヨリ生ス其カ坎ヲ生活カト
云フ

## 第十六章

大レ生活カハ是普通ノ自然カト全ク異ナル一
種ノカナル子（仲ニ普通自然カハ原名「アルゲメー子ナチュルカラクト」是レ高物ミナ
共ニ具有セサルヿナキノカナリ）或ハ其原ヲ坎ノ自然カニ資
テ機質（ヲルガニセストフ即機体ヲ合成スル実質）ノ混合形成ノ仕ニ由テ変メ
一種ノカトナリ発スル者乎或ハ一種ノ生活力

原基ナル者有ル乎其原基ハ是レ陰負乎神識乎
神全乎未タ定説アルヿナシ

註 予カ生活力畧説アリ今記ノ其ニ贅ス○大
レ生活基源ナルモノハ是レ侍負(ユーゲンアールチ)同有(オルメンギング)ノ混合
ニ由テ以テ発入ル所ノ核(ラルガニセチー)ニ関係スルモノ
ノ須臾モ其中ニ離ルヿ可ラサルモノ也故ニ生
活力ハ是レ其須臾(スクラ)ニノ即又タ核(オルガニセチー)ノ性也由テ以
テ知ルヘシ諸侍生活ノ起因ハ是レテールス
トフ混合ノ中ニ発スルモノナルヿヲ核ニテルス
トフハ是レ生活侍ノ始テ其原ヲ資ルモノニ
メ即チ動物ニ於テハ精液ナルモノ是也

而ルニ其混合ハ又タ父母ノ生活ヨリ発スルモ
ノニメ父母ノ生活ハ亦タ其先祖ヨリ伝来ス是
故ニ生活ノ原ニ泝テ其本ヲ極メントスル片ハ
唯々妖ラ造物者ニ帰スルノ外他ナシ○且ツ生
活ハ必ス其核ノ度ニ従テ相加ル、モノ也故ニ
其核愈々具足スレハ其生活亦愈々具足ス譬ヘ
バ阿レイペンノ如キ其核草木ニ比スルニ稍々
具足セルカ故ニ其生活モ亦タ草木ヨリ具足セ
リ人身ハ其核ノ最モ大ニ具足セルモノ也故ニ
其生活ノ大ニ具足セルヿ敢テ他物ノ比スヘキ

ニアラス

第十七章

凡ソ生活ノ徴ノ最モ普通ナルモノハ外物ノ抵觸ニ感應スルノ性ナルモノ是レ也矢性之レヲ発動性ト名ク（原名カップヱッキバール）

（註）按スルニ矢発動性ナルモノハ即是レ觸覚性ト原名ゲフーリ（原名ヘード）相合致スルモノニメ実ニ矢ラ去ルノ外敢テ別ニ発動性トス可キ者ナシ即活板体ニナ能ク外物ノ抵觸ヲ感覚シ其抵觸ノ度ニ應メ矢レニ抗抵（原名テリユフエルキング）スルヿヲ

得ルモ觸覚性也又能ク其栄養ニ適當スル物質ヲ資テ以テ自ラ生成化育スルヿヲ得ルモ觸覚性也〇矢ノ觸覚性ナルモノハ各々板体実質ノ異ナルニ従テ各々相同シカラス即或ハ常ニ外物ノ抵觸ヲ唯々其抵觸スル部分ニノミ感覚スルノ体アリ或ハ其抵觸物ノ性ト抵觸セサルト部分ノ性ト従テ或氏ハ唯其一部ニ感覚シ或時ハ其感動ヲ全体ニ及ボスノ体アリ矢設ニ矢ノ觸覚性ヲ二種ニ分テ一ヲ隠的ノ觸覚性（ヲーカルパーセプシヨン）ト云ヒ一ヲ顕的ノ觸覚性ト

三ノ隠的ノ觸覚性ハ諸器官ハモ単オモミナ故ヲ固有ヌサルモノナシ顕的ノモノハ唯々其抵觸ヲ知覚スル高キ一個ノ中点（ミッテルピュンクト）ヲ備フルノ器官ニノミ固有ノモノトスル而メ其中点ト名クル所ノモノハ即所謂ル頭脳ナルモノニメ偶々女レナキ動物ニ於テハ必スモ之レニ代ルノ器械アルモノナリ

## 第十八章

夫レ体中ノ諸液モ亦タ是レ器体ナルモノニメ血液亦タ生活力ヲ備具スルモノ歟将タ生活力ハ唯々凝体ニノミ固有ノモノニメ且ツ十分其足ル処動物体ニホルユーメンステジーレンニ於テハ唯神全質ノミヨリ発スルモノ乎

（註）今生活力ハ器体ヨリ発スルト云フ説本トメ考ル氏ハ其液ニ生活力ナキ自ラ照シ乎タリ然レ氏今夫レ時見ヲ見ル二其始メ唯是レ一個ノ液ノミ故ニ由テ故レヲ見レハ液モ亦タ生活力ヲ有スル者乎憶フニ夫レテールスト氏ノ説ニ男子ニ在テモ女子ニ在テモ唯是レ一個ノ液ナレハ固ヨリ生活力ノ有ル可

キニ非スト雖モ其男精ト女精（是ハ卵巣ノ小胞中ニ在リ）ノ和合ニ由テ直ニ一個ノ核ヲ発スルヿハ実ニ海塩ノ酸蒸気ト硫酸揮発気ノ互ニ合和ノ直ニ一個ノ活匡砂（即是硫酸）ヲナスカ如キモノナラン受胎ノ初日ニ於テハ其胎ノ状殆ト唯々一個ノ断液ノ如シト雖モ既ニ已ニ其核ノ発生セルヿ其中ニ較乎タル動点ノ見ルヽヲ以テ知ルヽシ

## 第十九章

生活力ノ現象ハ其力ノ発動スル核械ノ異ナルト其力ヲノ発動セシムル抵觸ノ不同ナルニ従テ種々一般ナラス

## 第二十章

凡ソ生活力ノ諸器械ニ発現スルヤ其器械ノ異ナルニ応ノ千状萬態各々相差フモノハ矢ヲ總ルニ其器械合有スル所ノ実質ニ交錯セル不核質（即生活ヲ具有セサルノ実質也）多次アルニヨル而メ其不核質ノ交錯愈々大キ氏ハ其核動必ス益々敏鋭ナルモノ也○其器械製造ノ異ナルニ応メ相差フ所ノ生活力核動ニ較劣ナルモノニ種アリ其一

纖維ノヨク外物ノ抵觸ニ応メ直ニ奇縮スルカ
ニメハルヒ名カ発明スル所ノ觸動性也是レ
唯々筋纖維固有ノカナルカ故ニ吹ヲ筋觸動性
ト名ク其一ハ外感ニ応メ変動シ以テ思慮分別
ヲ神識中ニ発セシムルノカニメ古人ノ漫ニ感
覚性ト名ケシモノ也是レ唯神至ニ固有ノカ
ナルカ故ニ吹ヲ神至觸動性ト名ク其他身体各
部ニ於ケル生活力核動吹ノ両性ヲ以テ解渇シ
難キモノ多シ吹等ハ又各部固有ノ生活力現象
トセサルヿヲ渇スヿブリュメンバック名人曾テ人身資

生ノ生活力核動ヲ作メ一種ノ形成カトセリヨ
リ臆断免ルヽト云可シ而シ尼其稜泉状組織固
有ノ觸動性及ヒ起張カラップズフルレンデ等ヲ漫
ニ取用スルカ如キハ切要ノヿニアラス

第二十一章

吾倚経験ニ由テ以テ考フルニ抵觸ハ実ニ是レ
生活力核動ノ起因ヲナスモノニメ其核動ヲ発
起スルノ多吹ハ常ニ又抵觸ノ度ノ多少ニ応ス
ルモノ也故ニ又抵觸スルヿ亟且ナレハ能ク生
活力ノ核動ヲメ強カラシメノ又抵觸スルヿ亟度

十ニハ却テ其カヲ集フ又タ身体各部互ニ相感
応スルノ所有テ一部ノ抵触ヨリ又部ノ極動ヲ
発セシムルノトナラス猶其極動ヲ他部ニ発セ
シム或ハ両部同時ニ異種ノ抵触ヲ受フ極動ヲ
同時ニ発スルヿナリ一部ノ極動ノ十分ニ発ス
ル後ニ至テ始テ他ノ一部ニ次ヲ発スル者アリ
次ノ互ニ感應スルノ件ヲ合致件ト云亦分異性
ト曰フ

## 第二十二章

其抵触ノ生活体中ニ働クト其体ノ次レニ抗衝
スルヿヨリメ体中結構ノ極能ナルモノ生

## 第二十三章

古人曾テ次ノ身体極能ヲ分テ四種トセリ曰ク
動物性極能（神識原名）感覚肢節ノ挙動是ニ属ス曰
生活極能（血液ノ循環原名）是レニ属ス曰ク自然極能
生殖化育ノ極動是レスルリフチング
ナチユルフルリフチング
男女交媾ニ関ル極能是ニ属ス原名曰ク分種極能
ゲフラフトフルリフチング
ヒ今次ヲ考フルニ其区別ニ於テモ其目名ニ於
テモ共ニ穏當ナラス今時ハ人身ノ極能ヲ統テ
唯二種ニ分チ一ヲ極能ト云

ニ一ヲ動物作タラシムルノ機能ト云

## 第二十四章

凡ソ体中諸機能モ善ク易カニメ間断ナク次シモ滞スルヿ無キモノ之ヲ真ノ健康ト名ク

## 第二十五章

夫レ人ノ体タル地トメ任ムヿヲ得サルノ所ナリ食トメ食フヿヲ得サルノ物ナレ是其体ヨク故ニ能ルトモノニ應ジ適宜ニ更機ヲ変スルノ性ヲ有スルニ由ル其変スルノ時ニ當テ中全ク十分健康ノ状ヨリ離レサルニアラスト雖モ諸

諸機能ノ衡平ニ至テハ敢テ差異スルヿナシ是故ニ唯々健康ト名クルモノハ其意味甚タ廣シ即チ全身活器ノ機能ヨク互ニ相合致メ過不及ナキ者ハ之名ヲ取ルヿヲ得ル唯々諸機能衡平ノ齟齬スルモノノミ之ヲ疾病ト名ク

## 第二十六章

是故ニ各人各身ニ相異ナル固有ノ健康アリ其年齢男女習慣等ナルニ従フモノハ固ヨリ全ノ健康ヲ離レサルニ非スト雖モ而レモ故々取テ疾病ノ名ヲ冠ス可キ者ニアラス

## 第二十七章

諸器ノ張力（スプアンカラクト 第十二章ニ出ツ）発動性（オップアッキバールヘード）オ
ナ十七章ニ出ツ及ヒ諸液ノ性状人々相差フ此稟
質（テンペラメント）ト名ク古人曽テ此稟質ヲ分テ四種
トス其名当ラストイヘ圧其別実験ニ出ツ故ニ今
仍ヲ此ヲ取用ス即チ其一ヲ多血質ト云其二ヲ
胆液質ト云其三ヲ粘液質ト其四ヲ黒胆液質ト
云フ（按ニコヽニスブリユク名人病理論ニ曰多血質ノ人ハ其発動性ノ度高リメ力柔弱繊維軟薄ニメ液質區多血行遅速也胆液質ノ人ハ発動性ノ度高ク力強烈繊維堅硬ニメ胆液ノ厚質區多也粘液質ノ人ハ発動性微ニメ其力弱ク纖維弛弱ニメ水液區多十リ黒胆液質ノ人発動性微ニツ）

其力強ク流体重稠密抗又久抵触ニ於ケル受性
衝力緩徐ニメカアリ
（ハットバールヘード）及ヒ此ニ応スル抗衡性人々相
差フモノ此ヲ稟性ト名ク（イシオシンカラシーン）

（註）四質ハ唯是稟質大概ノ区別ナルノミ実ニ
純粋ノ多血質及ヒ純粋ノ膽液質等ト名ク可
キモノハ敢テ此レ有ルコトナシ若シ精詳ニ区
別セントスル圧ハ其差別無数不定ナラサル
ヲ得ス

第二編各個編

## 論使人身為動物体之機能第一

第二十八章

夫レ人身ハ則チ動物ニシテ其機能ハ二種ニ成ル即チ識覚（原名ラントワールト）ト拳動（原名ベヲリ）グト是ナリ

第一回　識覚總論

第二十九章

夫レ神識ト体質ト互ニ相関應スルヿシ猶ル其媒ヲナスモノハ神至質ナルモノニメ此質ヤ一種ノカヲ有ス其カタルヨリ外物ノ抵觸ニ応メ其質中ニ変化ヲ起シ以テ神識ニ識覚（カントワールルチング）ヲ発セシ此カヲ神至ノ觸動性ト名（原名セーニュプリッケル バールヘード）ク人此ヲ感覚性（ゲフーリスヘード）ト名クル者アリト雖モ未タ當レリトセス

第三十章

神至質トハ其レ何ヲカ謂フ頭脳脊髄神至ノ總稱也

第三十一章

頭脳ハ頭蓋骨内ノ腔間ニ在リ頭蓋骨ハ其外面通被ヲ以テスルノ外被皮（併ニ通被ハ是レ表皮ノ總稱）牧膜ノ漿膜（腱膜）ト骨膜トヲ以テ被ハル其質ハ個ノ骨ヨリ合成

又八個ノ骨トハ其一並頭骨其二両個ノ頂骨及
三後頭骨其四鑿骨其五両個ノ顳顬骨其六節ノ膜
ニメ後ナ漸ク剛固ト ナリ已ニ産ヲスルノ時ニ
至ハ殆ント皆剛骨ト ナリ其残ル所唯僅クニ存ス
ルノミ皮面骨ノ五ニ合着スルヤ最密ニメ如シ
モ動揺ス可ラス又ハ縫合状ニ相接合シ其骨
度各部ニ許多ノ孔有テ神経及血脉如ニ通ス

## 第三十二章

頭蓋骨内面ハ剛脳膜ヲ以テ被フル如膜ハ強剛
ニメ血脉布蔓セル二襲ノ膜ニ成ル其外膜ハ
血脉ト蜂巣状質ニ由テ固ク頭蓋骨内面ニ接着
シ其内膜ハ処々ニ於テ外膜ト相離レ延ビテ以
テ鎌状(セイッセンホルムヒヘフルレヒッセル)挺ト後脳前ノ空隙(ハウリ)ト脳間ノ洞竇(ブーヒムス)トヲ形
成ス○次剛脳膜ハ在テ被フ所ノ膜ハ如ヲ蜘
蛛網(アラクノイデ)様膜ト名ク如膜ハ固ヨリ能ク脳ヲ被包ス
ト雖モ脳ノ皺襞間ニ入ルヿナリ其度神経ナク
亦又血脉ナシ○其脳ニ最モ密通ス外面ノ凹凸
ニ従ヒ所ノ被ハルヿ血キノ膜ハ如ヲ軟脳
膜ト名ク或ハ脉絡膜(コロイド)ト名ク脳膜(ブレイン)ハ薄其度影多
ノ血脉布蔓シ以テ血ヲ脳ニ送輸セシムルヿヲ

ナス

## 第三十三章

脳ニ両個ノ別アリ一ヲ大脳(Cerebrum)即チ或ハ脳髄(Brain)トシ一ヲ小脳(Cerebellum)トス大脳ハ後ト之ヲ左右両脳共ニ二種ノ実質ヨリナシ曰灰白質曰白質是也又タ其大脳ノ後部ト小脳トニ於テハ其両質ノ間ニ黄色帯ノ実質アリ凡ソ左右両脳ハ共ニ半バヨリ分テ左右両部トナルモノニメ其両間大脳ニ在テハ脳体(Corpus callosum)ヲ以テ左ヲ繋持シ小脳ニ在テハ其内部ニ由テ自ラ合昔セリ大脳ト小脳トノ間ニハ一ツテントリユウム(Tentorium)トイフ

クモノ有テ左ヲ隔ク其両脳ノ表面ニハ種々ノ皺襞アリテ凹凸ヲナシ内部ノ空隙間ニハ水様ノ蓋気充盈シ其中ニ許多ノ部分整列又多ノ部分ハ即紬條体視神経(松子茨里見尻羅丸等)ナリ尚ヲ解剖書ニ就テ其部分ノ主用ハ古来未タ左ヲ見ヨ左ヲ詳カニスルモノナシ

## 第三十四章

脳ノ下面大脳ノ後部小脳ノ前部其両脳ノ白質頂互ニ相接スル所ノ処々輪様隆起ナルモノト脊髄ノ始原トアリ左脊髄ノ始原トヲ延髄ト名

ク

第三十五章

諸動物中ニ於テ人ハ其脳神全ニ比スルニ最モ大ニシテ且ツ其大脳ト小脳ヨリ大ナル丁他ノ動物ニ比スルニ最モ甚シ

第三十六章

脳ハ頸動脉ト脊椎動脉トヨリ全身血液ノ十分一許ヲ受ケ其還流ノ血ハ洞竇即是脳中ノ静血脉ナリ由テ内頸静脉ト脊椎静脉トニ帰ル○又タ脳中ニ於テモ許多ノ吸収管譯者曰凡ノ此書ニ吸収管トリシ云フモノハ即チ水脉也猶ヲ詳ニ后ニ出ス見ヨ

アルヿヲ見ル

第三十七章

脳ニ二種ノ運動アリ其一ハ動脉ノ搏動ヨリ発スルモノニシテ其動微ク其一ハ呼吸ニ関係スル者ニシテ著ク上下ニ動揺ス脉ニブリュメンバックヨリ上下ニ至ル呼気ニハ上騰シ吸気

第三十八章

脊髓ハ延髓ノ延長セルモノニシテ後頸骨ノ大孔ヨリ出テ脊骨内ノ空間ニ充塡シ其質白髓質ト灰白質トヨリ成リ此髓ニ在テハ灰白質内部ニ

在テ白髓質外部ニ位置シ其外面ニハ脳ノ軟膜
ニ等キ膜ヲ以テ被包シ其実体腰部ノ才一二椎
間ニ終リ此部ヨリ下モハ唯神経ノ會束セルモ
ノニメ馬尾状ヲナス

## 第三十九章

神経ハ脳ト脊髓トヨリ出ルモノニメ白色柔軟
ノ線條也凡ソ体中單質ノ蜂巣状組織（按ニ是レ神経ノ如脈）
（リ交錯セサルハ者ヲ云フ）表被軟骨々骨膜骨髓腱鞘帯剛脳膜
蜘蛛絲様膜胸腹ノ通膜吸収管胞衣等ヲ除クノ
外諸部ヲナスヲ以テ備ヘサルナシ而レモ其枝
数及ト大小トニ至テハ各部ノ異ナルニ従テ
同シカラス

## 第四十章

神経ノ脳ト脊髓トヨリ出ルヤ両々相對シ其始
メ白髓質ノ微細ナル線條許及相聚テ會束シ外
面ニ軟脳膜ヨリ展延セル莢膜ヲ被リ其頭蓋骨
下面及ヒ脊骨椎間ノ孔ヨリ出ル所ノ処々ニ於
テハ剛脳膜ノ展延セル希ヨリ莢膜ヲ得ル（神経ノ障カ）
カ最モ多ク此〇凡ソ神経ノ原始ト末端ハ古来
ノ莢膜ニ由ル（神経ノ障）
種々ノ異論アリト雖モ実ニ如何ノ状ヲナスヤ

亦又確乎又證徴ナシ

第四十一章

神孑表面ニハスピラールスニーセノ横紋布テビルメンバック曰神孑ノ外面ニハ許多ノ皺襞アッテ其從理横リ恰モ其狀気管ニ於ケルガ如シ

血絡布蔓ス具血脉ノ布蔓スルヤ網狀ヲナシテ其末梢ハ〻ナ神孑ノ実質ヲナセス線條間ニ洛ル

第四十二章

凡ソ神孑ノ布蔓スルヤ幹ヨリ分テ枝トナリ枝復々分テ枝トナル〻恰モ草木ノ狀ノ如シ而ル

ニ其枝分スルヤ実ニ其枝ヲナスニアラスメ其幹ハ唯々枝ノ會束メ蜂巣狀組織ニ申テ互ニ相洛着セサルヽモノヽ如シ

第四十三章

神孑ノ循行スルヤ身体各部ニ於テ数條相聚合メ洛着シ以テ神孑叢ヲ成ス神孑叢原名「セールフレグ」ト「ゼルメンバワク」曰ク細状ニ相聚洛セル○神孑節原名「セニュールフノール」プ撰ニビュルメン帶江灰白其用詳カナラスト○英書始メニハ神孑叢ノ形成ヲ論セス又ニ是レ一ノ物両名トセル物ヲ云フスハ古来亦ハ

ヲ各部ニ於ケル小脳セトシ其用不隨意ノ諸器
ニ備ル神全ヲメ神識ニ係ラサラシムルヿヲ主
トスルモノセトスト雖モ憶フニ然ラス何トナレ
ハ意識ニ從フ諸筋モ神全節ヨリ出ル神全ヲ備
フルモノアレハ也或ハ又タ是レ諸種ノ神全ヲ
合体メ一種ノ用ヲ為サシムルヿヲ主ルモノ也
トスフノ説アリト雖モ是唯諸種ノ神全ヨリ成
ルモノニノミ云フ可クメ單種ノ神全節ニ於テ
ハ云フ可ラス是レ單種ノ神全節ハ唯一個ノ神
全ヨリ成ルモノナレバナリ

第四十四章

天レ体ハ神識トノ合和ハ固ヨリ神全復ノ在ル
有テ由テ論ナシ其故ニ由ルヤ神全ヨリ諸筋
ニ擘動ヲ発セシムルノミナラス猶ヲ外感ニ由
神全ノ中ニ発スル所ノ変動ヲ知覚スルヿヲ得
ル

第四十五章

凡ソ人ノ思慮分別ヲナスヿ其即神識体ニ器械
ノ極力ヨリ資始スル有千或ハ別ニ一個神識ナ
ル有テ唯生活ノ間更器械ト結合セルモノ乎

未タ人身罷理ノ学ヲ以テ判断スルヿニ渉ス

第四十六章

吾倚今脳ヲ以テ軟ヲ神至質中ノ中点トシ軟ヲ外来諸感ノ會渉スル所トシ神識諸動ノ発生スル所トシ以テ軟ヲ總統ノ識具ト名ツクル原名アルゲメ（ヲオントワールゲルエルキング）ス

第四十七章

脳中ニ於テ神識ノ舎ル処ハ古来或ハ軟レヲ特脳倚セトシ或ハ粘液或里見セトシ或ハ「シケイデワンド」セトシ或ハ輪様隆起セトシ或ハ死後ニ脳ノ空隙間ニ見ル所ノ液ナリトスト雖モ未タ脳中諸部ノ機能ノ詳ナラサルカ故ニ確乎タル明説ノ證スヘキナシ

第四十八章

識覚ト発動トハ共ニ固ヨリ神至質ヨリ発スル力故ニ亦タ識覚スル毎ニ神至質ノ抗衡ニ由テ直ニ相応スルノ運動ナルモノ起ル神至ノ分與性出テ来ハ即軟ニ由ルモノナリ

第四十九章

神至ノ機動ハ或ハ軟ヲ其質ノ顫動ニ由ルトシ

或ハ其頂ノ挙縮ニ由ルトシ或ハ脳中ニ分離サレテ其頂中ニ充盈セル液ニ由ルトスル説世ニ行ハルドトハ及ビ「リッテル」氏ガカル人ノ試験ニ由テ発明スル所ノ新論ニ由ルニ其液ニ在ルヿ疑ナキニ似タリ

## 第廿十章

夫レ識覚ト挙動トハ共ニ是レ神全ノ機用タリト雖トモ偶々一個ノ機用識覚若クハ挙動ヲ欠フヿ有ルモ仍ラ他ノ機用挙動若クハ識覚ニ変ヲ生セサルヿ有ルカ故ニ或ハ識覚ノ神全ト挙動ノ神全ト全ク異ナルモノニシテ或ハ識覚ハ神全ノ随頂ヨリ生シ挙動ハ其莢膜ヨリ生スト云フ両説共ニ実拠アルニアラス

(註) 夫レ神全ノ莢膜ハ原ト是レ胞膜ノ展延セル者ナレハ其頂固ヨリ強硬何ソ能ク意識ノ感動ヲシテ全身各部ニ達セシムルノ如キ迅速精微ノ機用ヲナスヿ得ン唯其用脳ト神全トノ防禦ヲナスニ足ルノミ○憶フニ意識ノ感動ヲシテ全身各部ニ達セシムルハ是其液ノ機用ニシテ外部ノ感覚ヲ脳ニ達セシムルハ是

其癲負（神経中ノ纖條ハ即髓ノ復セザル四十章ニ比較セヨ）幸編ノ勢ニ由ル者ナラン

## 第五十一章

神経ノ筋ニ運動ヲ発セシムルノ力ハ唯々脳ニ関係スルノミナラズ亦ヲ又神経ニ絡ヘル血管ノ温度ナルニ由ル故ニ体質製造ノ十分具足セザル生類ニ於テハ其力愈強クメ人ハ其力最モ弱シ

（註）億万ニ夫レ脳ノ扶助ナリ筋ニ運動ヲ発起スルノ神経カハ即チ是ネ隨意ノ運動ヲンヘケ

ウリヘベークラナスモノニノ実ニ隨意ノ運ヨギング動ハ原各ウイルレケウリ脳ノ扶助有ルニニ非レフベーウギング発スルヿ能ハサルモノ也

## 第五十二章

神経ノ動性ハ体中部分ノ種々相異ナルニ隨テ種々異円アリ其種々ニ見ワルヽ者坎ヲ外蔵ト云其外蔵ニ関ル各個ノ器具即眼耳鼻ハ能ク神経ヲ各個ノ知覚ヲナサシムルヿヲ湯ルノミナラズ能ク動物ヲメ他ノ萬物ト殊ナル所以ノ性質ヲ得ル故ニ外識ハ唯々五神原各八子シ視聴嗅

味知覺ノ為ニ此ルトス

第五十三章

其外感ノ最モ普通ニシテ全身ニ徧満セル者ハ知覺ナリ知覺ハ固ヨリ神至ノヲク外物ニ感応シ変ラ其中ニ起シ以テ神感ニ外物ノ性情ヲ造成スルノ機動タリト雖モ猶ホ諸神至ノ觸覺性ニナヨリ劣ルヲ得ル者ニ非ス唯皮ヨリ其神至ヲシテ其機動ヲ発セシムヲ得ル故ニ知覺ノ器械ハ皮ナリ而シテ其指頭ニ於ケルモノハ殊ニ優レリ

註 夫レ知覺ハ廣ク全身ニ布満シテ及ハサル所ナキヲ故ニ身体保護ノ用ニ於テル諸外感中ニ於テ最モ卓絶セルモノニシテ実ニ是諸般外感ノ原基タルモノ也何ソヤ其レ眼耳鼻口舌各々其発動性ニ於テ相違フト雖モ定視聽顯味ヲナスニ至テ原ト唯是レ一個ノ知覺ナルモノニシテ其器械製造ノ各自ニ相違フヨリシテ其現ワルヽ所ノ用ノ互ニ相異ナルノミナレハナリ

第五十四章

皮ハ身体ノ全表ヲ被覆セルモノニシテ其質三襲

ヨリ成ル其一ヲ表皮ト云ヒ其二ヲ「マルピギア
ーセスレーム」ト云ヒ其三ヲ革ト云フ（原名ヘル
皮原名セーニュホイド）（原名神経）

第五十五章

表皮ハ身体ノ最尤外表ニ在テ大気ニ暴露シ又
頗薄ク粉々透明ニシテ血絡神経共ニ欠シ有ル無
ク其内面無数ノ細線條アッテ「マルピギアーン
セ粘液」ト共ニ固着セリ故ノモノヤ胎児ニ於テ
欠レヲ見ルニ既ニ娠後三月ノ時ヨリ形成スル
モノニシテ其ツ動物植物共ニ欠ヲ有セサルモノ
ナシ其用タル殊ニ其下ニ在ルトコロノ革ニ保
護ヲ與フルニ在リ

（註）憶フニ表被ハ殆ント是レ極体ノ中ニ列シ
組キモノ也何ソヤ女物ナル血絡ナク神経ナ
ク唯是「マルピギアーンセ」粘液ノ吸収管ニ由
テ乾固セラレタル者ヨリ他無ケレハ也

第五十六章

「マルピギアーンセ」粘液ハ一ト欠ヲ「マルピギア
ノ細膜」ト名ケ其質半ハ流行ニ屬スルモノニシテ
甚タ水ニ溶解シ易ク表被ノ裏面ト革ノ表面ト

ノ間ニ位置ス

(註)憶フニ此粘液モ亦タ表被ト同シク極体ニ
属シ難キモノニメ唯是レ革ヨリ分泌セラル
ヽモノメリ

第五十七章

此粘液ハ即是レ皮膚ノ色ノ在ル所ナリ夫レ草
ハ人々共ニ一様ナル白色ノモノニメ表被ノ色
ハ即此ノ粘液ノナス所ナルヿヲ憶フニ皮膚ノ
色ノ種々ナル其違因ハ気候ノ寒暖ト年齢ノ老
弱ト摂生ト禀賦ト疾病トニ在ルモノニノ其近

因ハ「プリニメンバック」ノ説ニ従フニ譬ヘハ皮膚黒
色ノ人ノ如キハ其皮膚ヨリ分泌サレタル炭質
ト水質ト「アトモスペリセリユフト」ニ押壓サレ
テ「マルピギアーンセ」粘液ト結合スルニ在ルモ
ノナラン

第五十八章

憶フニ此「マルピギアーンセ」粘液ハ草中一種ノ
器械ヲ以テ此ヲ分泌スルモノ乎又タ憶フニ表
皮ハ唯此粘液ノ凝聚ニ因凝スルモノナル乎

第五十九章

即皮

皮ハ靭韌ノ膜ニメ其質緻密ナル蜂巣状組織ヨリ成リ厚薄一様ナラス内部ハ髄疏ニノ海綿様ヲナシ以テ脂膜ニ終ル其質中血脈ノ錯綜入ル了甚々多クメ其動脈末梢ハ表面ニ於テ汗管ト十リ又々無数ノ吸収管有テ其管口表面ニ列布シ殊多シク小核里児在テ皮脂ヲ分泌ス皮脂ハ油様ノ液ニメ偏ク皮質ヲ滋潤ス其質ニ漏曼セル神経ハ最尺匝多ニシテ其末梢ハ身体彼此ノ部分ニ於テ甚々著明ニ血脈ト結合シ以テ微少ノ乳頭ノ状原色テ一ペルチリス ペヲ形成ス

第六十章

凡リ人身ノ外被ハ眼瞼手掌足蹠ヲ除クノ外偏ク毛髪ノ生ヒ此ル了点ニ他ノ異類ニ殊ナル了ナシ○毛髪ハ纖細柔軟ナリト雖モ其性靭強容易ニ切断シ難ク其質血管神経共ニ有ル了ナク了イジオ卍レキテリス也按了イジオ卍レキテリスハ其質中自ラナ分ノ卍レキテルヲ含ムヲ以テ了卍レ其長短強弱伸縮ノ度色ノ濃淡生状ノ正斜ニ於テハ唯々各人各自ニ異フノミナラス亦各部各々相異シカラス其根ハ皮ノ峰巣状質中ニ在ル微細ノ小球ヨリ生

シ細キ管ヲ以テ回流セラルヽ其管司ルピキア
ーンセ粘液ヲ貫テ微シク外表ニ出ヅシ表皮ニ
被包セラル而メ其管中ニハ一種ノ液ヲ含ミ外
面ニ沖猴ノ液ヲ備フ凡ソモ髪ノ用ハ外觸ノ防
護ト形容ノ美飾トヲ成スヿヲ主ル者也
〔注〕仁リ身体ヲメ「五」ムキテ此気ヲ得ルヿ屈度
ナラシムモノハ即モ髪ノ為ス所ナリ

第六十一章

皮ハ其質中神経及ヒ其乳頭伏ヲ或ノ最モ鋭敏
ナルカ故回ヨリ知覚ヲ以テ其機用ト入ル「論

ナシト雖モ其機用最モ鋭敏ナル処ハ手掌也手
掌ニ於テモ殊ニ指頭ヲ勝レリトス是レ手掌及
ビ指頭ハ其皮膚理紋最モ多クメ神経乳頭殊ニ
鋭敏ナレハ也又タ其指頭ノ背ニハ爪甲有テ以
テ摸捉ニ便スル爪ハ其質角状ニメ表皮ト相近似
シ唯表被ニ比スレハ堅硬ナルノミ

第六十二章

凡ソ知覚ノ用ハヨク人ヲメ物体ノ寒温軟硬軽
重固形流動乾滑粘形状及ヒ距離等ヲ矢知セシ
ムルニ在リ

第六十三章

舌ハ口腔ノ器具ニシテ其作用ハ根ヒ丹ノ後部ニ着キ其前部即舌頭ハ舌下鞍帯ヲ以テ下顎ニ繫ク鞍麦ノ神経乳頭ハト細小ノ粘液腺里見ヲ布満セル膜ヲ被リ其内ハノ実作ハ許麦ノ筋ヨリ成リ以テ著大ノ運轉ヲナスヿヲ得ル其神経乳頭ハ第十二第十三対神経ヨリ成ル其他ノ各ニ循レル神経ハ第九対神経ヨリ成ル第五ト第八対ノ一枝トニシテ皆其実作ノ筋ニ循ヲ以テ鞍骨ノ運轉ヲ成サシムルヿヲ主サトル

註 味識ト知覚トハ甚タヨク相合致スル者ニシテ唯其器具製造ノ違フ所ハ舌ニ於ケル神経膜（他ニ在テハ即粘液様体即ケヿマルビギア）是レナリ

ンセスヽムル也表皮ハ共ニ全身ニ在ルモノヨリ柔軟弛緩ニシテ薄ク神経血管相絡フヿヲ殊ニ麦ク不所津唾ト粘液トヲ以テ滋潤セリ其粘液ハ古質中ノ義田見ヨリ分泌ス

○憶フニ第八対及第九対ノ神経何レモヨク味識ニ関フサルヿ有ンヒニ古下ニ於テハ其神経一二ノ枝柄ノ乳頭ノ状ヲ形成セルヿ著明ナリ

## 第六十四章

古昔ハ其神経乳頭状ノ有ルニ由テヨク有味的作塩即ヲ感覚スル有固ノ受性ヲ有スト雖ヨク知覚ナスヿヲ渇故ニ塩或ハ特リ之ヲ衝動シ或ハモシ其ヲ他頁ト混ノメ之ヲ衝動ス動揺擾スルヿアルトハ乳頭状内一種ノ変化ヲ起発ノ以テ味ノ感覚ヲ生ス故変化ハ塩分子晶形ノ種々ナルニ由テ「メカニス」ニ発起セラルトヽ云フノ説有ト雖モ未タ信ズスルニ足ラス憶フニ此味ノ感受ハ固シヽ性ノモノナル可シ○亦タ其外面ニ分泌スル所ノ粘液ハ能ク有味的作ノ依用ヲ高冥ナラシムルヿヲ主ル

## 第六十五章

舌ノ外市ヲ口内ノ諸膜モ亦タ能ク微々味ヒノ感覚ヲ成スヿヲ得ル者ナリ

## 第六十六章

凡リ一種ノ味ヒノ作恵ハ各人共ニ大抵一様ニ感覚スト雖モ亦タ各人固有ノ神経頁ト孫ニ古頁ノ発動性ヒテト其習慣ト想像ノ各自不同ナルカ為メニ其味ニ於ケル微細ノ分別ニ至テハ甚タ定メ難シ

第六十七章

味蕾ノ主用ハ唯々飲食ノ味ノ良悪ヲ識ルカ為メノミナラス亦ラ能ク其利害ヲ矢スルニ在リ

第六十八章

鼻ハ嗅覚ノ器具ニメロ上ニ位置シ其質骨ト軟骨トヲ以テ成ル子骨子軟骨鼻発ヲ以テ其中ヲ隔テ以テ両個ノ孔ヲ形成ス其両孔ノ面ニ見ル〻所ヲ就鼻孔ト云其両孔深ク後部ニ至テ上顎骨後端ヨリ口内ニ通スル所ノ処ヲ後鼻孔ト云次孔内裏面ニハ普ク海綿様ニメ血脈神経才一対及

ヒ才五対及ヒ粘液腺里鼻甚疑ヲ布満セル一種ノ膜ヲ被ル此膜ヲ嗅膜ト云嗅膜ハ滋潤液ト如シヨリ分泌サレテ以テ鼻孔内ヲ滋潤緩和シ能ク外傷ヲ防禦ス其嗅膜ノ鼻中隔ト海綿様骨ヲ被フノ処ハ才一対神経ノ最モ多布蔓セル所ニメ即是レ固有ノ嗅覚器ヨリ又ク如ニ循ル所ノ才五対神経枝ハ唯々他ノ神経質ノ感通ヲ為メテドサレドムヘイヲ成サシムルヲ主ルノミ

舌ハ才五対神経枝ノ鼻孔ニ循レルモノ嗅覚ニ関ヲサルハ何ノ理ノ憶フニ是レ如神経ハ

其質硬固ニシテ粘膜表面ニ布蔓セズ空ニ暴露
セザル故ナル可シ方一対神子ハ甚タ柔軟ニ
シテ其末梢粘膜ノ窠中隔又ハ海綿様ヲ被フ所
ノ表面ニ終リテ髓様ノ乳頭狀ヲ形成シ粘液
帝ニ其面ニ塗布シ以テ温度ノ抵觸ヲ防禦ス

## 第六十九章

此具ニ由テ感覚スル所ノモノハ即諸体固有ノ
香気アルモノニシテ是レ気狀ノ揮発ナル物質也
ブラントハ
レストフ
其此ヲ感覚スルヤ吸息ニ由テ引テ粘膜ニ觸レ
シメ以テ其神経ノ内ニ一種ノ極動ヲ発セシム
其極動ノ狀ニ至テハ未タ分明ナラサルヿ猶ヲ
他ノ神具ニ於ケルカ如シ只香気ニ二種ノ別有
リ一ハ能人ヲシテ快カラシメ一ハ人ヲシテ不快ナ
ラシム其快カラシムルモノ此ヲ薫ト名ケ不快
ナラシムルモノ此ヲ臭ト名ク凡テ強烈ノ香気
ハ人ヲシテ不快ナラシムル者也

## 第七十章

偶々獸類ノ臭ヲ感スルヿ人ニ勝ルヽモノ
也又タ人ニ在テモ其国土ノ殊ナルニ応シテ獸ノ

ノ採用ノ大ナル者有リ是レニハ其嚢孔裏面
ノ大ナルニ由リ一ニハ鼻神経ノ弱ナルニ由ル
又小児ニ於テハ鼻ノ機用最モ後ニ発ス

第七十一章

鼻ノ主用ハ呼吸スル大気ノ性ヲ飲食スル流
物ノ性トヲ矢用スルニ在リ

（註）嗅識ノ全神経負（即脳脊髄流ニ基ク神経ヲ云フ）ニ基ク大ノ感動
ヲナスハ凡テ神経ノ力弛弱ノ疾病（譬ハ脳力
卒中眩暈等或ハ神経ノ力不和ノ疾病諸〻ハ悩
幣頭痛ノ症ニ斉寛鋭烈ノ嗅ヲ鼻入ノ偉動

ニ得ルヲ以テ知ル可シ

第七十二章

耳ハ聴識ノ器具ニシテ頭ノ両側顳顬骨ノ右骨部
ノ内ニ位置シ二部ノ別アリ即外耳中耳内耳是
レ十リ外耳ハ動揺スル可クシテ凹凸アル扁薄ノ軟
骨ヨリ成リ延テ内部ニ入リ一個ノ空洞ヲナス此
レヲ聴道トスノ矢部ハ軟骨ト骨トヲ以テ成リ
外部ニ於ケル力如キ皮ヲ以テ被リ許多ノ脂腺
里兒此ニ布蔓ノ耵聹ヲ分泌シ出シ其聴道ノ内
端ニハ一個ノ膜有ラ周張シ以テ外耳ト鼓室間

耳ノ異ツナス処膜ヲ鼓膜ト名ク

## 才七十三章

鼓室ハ耳ノ中部ニ在リ其室中ニ聽骨互ニ微小ノ筋ヲ以テ相連接ス三聽骨ハ即鎚骨攪骨鐙骨ニシテ其鎚骨ハ鼓膜ニ接着シ鐙骨ハ其大サ小部ヲ以テ卵円窓ヲ掩ム卵円窓ハ此室ニ口ヲ開テ其口迷路（後ニ七ツ）ニ通ス其他此室中ニ圓窓（一名三角窓）アリ又其孔蝸牛殼円ニ達シ且ウスタキアーンセ管ハ其負骨ト軟骨トヲ以テ成リ膜ヲ以テ開張サシ管ロナルモノアリ圓窓ハ薄キタキアーンセ管ハ其負骨ト軟骨トヲ以テ成リ

鼓室ノ最部ヨリ口内ニ通ズル鼓膜ノ辰史セルモノヲ以テ被ワル

## 才七十四章

迷路（ドールオフ）ハ即円耳ニシテ前庭（原名オリルホフ猶ニ三ツニ如ク此名ツリルチ三半規管蝸牛殼ノ三部ヨリ成リ其前庭ニハ渠溝アリテ其渠中ニハ二個ノ膜嚢其内ニ水ヲ充ツルモノヲ含ミ其五個ノ口ハ前庭ニ並ヒ開ク蝸牛殼ハ其上部柯ルタール二口ヲ開キ一部ハ圓窓ニ終テ其口ヲ鼓室ニ開ク凡ソ此迷路ハ全質中ミナ透亮ノ水液ヲ含ム其液ハ此

部ニ循行セル動脈ヨリ蓋発スル所ノ者ニノ再
ヒ改収管ニ吸収シ去ラル

第七十五章

固有ノ聽神経ハ石骨ノ後面ニ於ケル溝渠中ノ
二孔ヨリ内耳ニ入リ分レテオルメール山ト三半
規管ト蝸牛殼トノ内ニ布蔓シ顔面神経ハ各アリ
シフトセニリュハ石骨ノ溝渠ニ入テ内耳ヲ通貫シ
殼内ニ至リ其部ノ木神経繊維原ケレリ子セニュヱヘーゼル
ト聽骨筋ニ次シノ繊維ヲ分與シ其餘枝ハミナ
顔面ニ循行ス

註 聽神経ハ諸神経中ノ最モ柔軟ナルモノニ
シテ其状チ綱ノ如ク聽極ヲ主ル諸部ニ布蔓ス
ルモノ也

第七十六章

聽神経ノ送路ノ内ニ布蔓セルモノハ皆音響ニ
感應スル所ノ一種固有ノ解動作ヲ有スル音響
ハ彈力体中微分子ノ顫動ヨリ発スルモノニメ
其耳内ニ感スルヤ媒ニ由テ触ルヽモノアリ媒
無ク直ニ触ルヽ者アリ（例ヲ挙ケテ耳鳴ノ如キハ即チ起ルモノナリ是等ヲ無媒直触ノモノトスル子）
其媒ヲ介スモノハ（例ヲ挙ケテ耳内ニ循レル脈動ヨリ）

即大気ニメ中微分子ノ顫動ヨリ聽神全周ノ
動ヲ起サシム

第七十七章

外耳ハ無数競未スル響線ヲ受ケ自回ノ彈力ト
鼓筋ノ力ニ由テ此ヲ聽道ニ輻入シ鼓膜ニ達セ
シムルヿヲ主リ聽道ノ所聯ハ祐々音響ノ度ヲ
節シ微虫ノ入ルヲ防クヿヲ主リ鼓膜ハ顫動ヲ
受ケテ鼓室内ノ気ニ此ヘテ直チニ圓窗ヨリ迷
路内ノ水液ニ此フルト一ニハ聽肩細而アリテ響度ニ
應シ縮張スルヿヲ渇ル卵圓窗トニ由テ迷路内ノ水液ニ此

フルヿヲ主ル故液ヨリ此動ヲ聽神全ニ此ヘテ
以テ其神全中ニ一種ノ極動ヲ起シテ神識ニ音
響ノ感覚ヲ生サシムル又亦其鼓室内ニ封閉サ
ルヽ所ノ気ハ正ウスタキアーシセ管ニ由テヨ
リ新陳代謝スルモ此気ナキ片ハ鼓膜ヨリ外気
ノ壓迫ニ堪ユルヿ能ワサルベシ○或云此正ウ
スタキアーンセ管ハ気ヲ交代セシムルノ外尚
ヲ響派ヲ口内ヨリ鼓室内ニ導キ入ルヽヿヲ主ル
ト或云響線ノ迅度ヲ導キ去ルヿヲ主ルト両説共
ニ未タ確當セトシ難シ

註 此鼓膜ニハ尚ヲ別ニ一二ノ筋纖維アリテ
ヨク張弛シ至微ノ音響ヲ神経ニ告ルヿヲ得
ル

## 第七十八章

音響ニ快ト不快ノ別アリ是レ或ハ其響ノ高下
ニ由リ或ハ其断續ノ長短ニ由リ或ハ数声ノ同
時ニ発スル片聽クヿノ易難ニ由リ或ハ音響ニ
由テ発スル所ノ意中ノ思想ニ由ルモノニメ亦
各人ノ稟賦ト常習トニ関係ス是故ニ一種ノ音
響ハ常ニ一人ニハ同種ノ感覚ヲ成スト雖モ各
人ニハ亦タ各自ノ感覚シ成スモノナリ

## 第七十九章

聽ノ用ハ甚タ大ナリトス即是レ唯々人ヲメヨ
ク快美ノ感覚ヲナサシメ且ツ種々ノ音響ヲ兵
別ナラシムルノミナラスメ尚ヲ日常ノ交話ミ
ナ是レカ為メニ成スヿヲ得ル

## 第八十章

眼目ハ視識ノ具ニシテ顔面ノ中部額下ノ眼窩内
ニ位置シ其前面ニ眼瞼覆ワル眼瞼ハ上下トモ
ニ其縁ニ歯骨在テ健モ失ニ連生シ固有ノ筋有

ヲ能ク開闔ノ動ヲナシ其内面ニ許多ノ脂腺里
見並列スルヲ「メボーム」氏腺里見トイフ此腺
里見ハ油様ノ液ヲ分泌シ以テ眼瞼ノ内面ヲ潤
澤ニスルヲ主ル又タ此内面ノ膜ハ延テ眼球
ヲ囲包スルヲ結膜トイフ○眉毛ハ上瞼上ニ位
置シ黄頭ヨリ流下スル汗ノ眼ニ入ルモノヲ拒
防シ且ツ傷ヲ過度ノ光線ヲ遮ルヲ主ル○内
眥内ニハ結膜重襞ノ半月様ノ皺襞ヲ成シ此ニ
支シノ隆起スルモノ在リ是ヲ涙堆トイフ其主
用ハ「メボーム」氏腺里見ト相類似ス○涙ハ鹹

味ノ水様液ニシテ眼ノ前部ヲ滋潤シ且ツ汚物ヲ
除スルヲ主ル者也此涙腺里見眼窩上隅黄部ニヨリ分泌サレ亦微シク結膜ニ於テル
動脈神ヨリ益発シ内眥ノ涙丘ヨリ涙管中ニ吸
収サレ涙囊ニ入テ鼻孔内ニ流出ス若シ涙ノ分
泌過度ニシテ吸収ノ度ニ過ルトキハ剩餘ノ溢液下
瞼ヨリ頬ニ流下スル啼哭ニ於ケルカ如キ是ナリ

## 第八十一章

眼球ハ諸種ノ膜ヨリ成テ其内諸種ノ液ヲ含ム
其膜ノ最モ外囲ニ在テ後部ノ多分ヲ被包スル

モノ故ヲ白膜ト云（俗ニ郎他書ニ云フ所ノ卵膜ナリ）故膜前部ニ在テ、後部ヲ浸分ス被更木ルモノ圓孔ヲ成メ
透明角膜故ニ接着ス白膜ノ内面ニ密接スル所
ノ膜ハ故ヲ脈絡膜ト云故膜ハ内面ニ褐色ノ粘
液ヲ塗布シ前部ニ於テハ白膜ニ剥離シテ角膜
ニ密着セス即白膜ノ前端内面ニ在ル所ノ白色
輪（俗ニ郎モ）ヨリ内部ニ離レ向テ硝子液前面ヲ
被ヒ許多ノ皺襞ヲナス此ヲモ様勒帯ト云故ノ
毛様勒帯ト角膜トノ間ニ脈絡彩多ノ一膜アリ
故ノ虹彩ト名ク故ノ膜ノ前面ハ其色各人各自

ニ相異ニシテ其裏面ハ脈絡膜裏面ニ於ルカ如ク
黒色ノ粘液ヲ塗布ス故部故ヲ蒲桃膜ト名ク而
シテ其中心ニ一孔ヲ穿ツ故ヲ瞳孔ト云フ脈絡膜
裏面ニ在ル所ノ膜ハ故ヲ神経膜ト名ク亦タ細
膜ト名ク是レ即視神経ト白膜ト脈絡膜トヲ貫キ入ル髓質ノ展延
セルモノニシテ許多ノ脈絡布蔓ス蓋シ此膜ノ細
微ハ故脈絡ヨリ成ル又タ故膜ノ中心眼軸（俗ニ角膜
ノ中心ヨリ瞳孔ヲ貫テ正直ニ細膜ニ達スルノ全線ノ眼軸ト云）當ル所ノ処
ハ黄色ニシテ甚タ柔脆ナル小雛襞アリ

此語膜充盈セル所ノ液ハ三種アリ其一ヲ硝子
様体トスヒ其二ヲ水晶体トスヒ其三ヲ水様液
トスフ硝子様体ハ其質甚タ軟薄ナル蜂巣狀組
織ヨリ成ルモノニシテ眼球内後部ノ多分ヲ充塡
シ前面ハ毛様靭帯ヲ以テ被ハレ少シノ凹処ア
リテ水晶体此ニ位置ス水晶体ハ亦タ自ヒノ嚢
ヲ以テ被包セラル
水様液ハ眼球内ノ前後部虹彩ニ由テ前後両室ト
ナレル所ノ空隙ヲ充塡ス

## 第八十三章

神経膜即細膜ハ光影ヲ受クヘキ一種固有ノ受性
ヲ有スル物体ヨリ発メ眼ニ入リ来ル光
線ハ角膜上面ヲ経テ眼ノ軸ニ循テ屈折シ水様
液内ニ於テハ再ヒ如シク柄々開キ以テ瞳孔内
ニ入リ水晶体ニ於テハ復タ著シク屈折シテ益
々軸ニ近寄シ硝子様体ニ入ル、ニ當テ再ヒ如
シク開キ分レ神経膜上面ニ合聚シ来テ以テ如
ニ外物ノ影ヲ映寫又固ヨリ其神経中固有ノ変動
ヲ起シ以テ神経ニ視ル力ノ感覚ヲ発ス

## 第八十四章

視神経中ニ一個ノ動脈アリ如ヲ中心動脈ト名

ク此脈ノ神経膜ニ入リ来ル処ノ所此ヲ盲点ト
名クル凡ソ此膜ハ此点ヲ除クノ外所トメ外影ヲ
感スルノ件ヲ有セル丁無シト雖其最モヨク
極メテ精微ニ映寫スル所ノ処ハ唯眼軸ノ一点
ニ在リ是故ニ眼動所ノ大旋ヨク常ニ運動シ見
ント欲スルノ外物ニ其軸ヲ向ワシム

第八十五章

凡ソ外影ノ網膜ニ映スルヤシナ倒写スルニ
人ヨク其正影ヲ視ルモノハ是レ神感ニ別ニ一
個ノ眼目アツテ其影ヲ視ニ非スメ且ツ其影上
下左右ニ十一様ニ倒写スルニ由ル

第八十六章

人ヨク両個ノ眼目ヲ以テ物ヲ見ルモ其単ヘナ
ルヿヲ得ル者ハ是レ光線ノ感入両眼共ニヨク
相合一スルニ由リ而且ツ億ヲ視神経ノ互ニ相
合着スル所有ルニ由ルヘシ

第八十七章

凡ソ眼目ヨク遠近ノ光線ヲ受容スル者ハ虹彩
ヨク遠近ノ運動ヲナスニ由ル其運動ハ即若シ
光線ノ網膜ニ射来スルヿ強クメ近キナレハ瞳

孔ヲ縮小シ弱リメ不足ナレハヨリ矢ヲ開張ス
擦スルニ依運動ハ虹彩ノ血管ニ関係スルナル
ヘシ（訳者曰此説未タ其理ヲ解カサルヿヲ得ス）

第八十八章

脈絡膜裏面ノ黒粘液ハ眼内ニ入来ル光線ノ反
照ヲ拒防スルヿヲ主ル

第八十九章

凡ソ眼ノ物ヲ見ル中其物ヲ距ル遠近ヲ定スル
度ニ応スルニ非サレハ其明亮ヲ盡サス何トナ
レハ若シ其距離近キニ過ル時ハ光線市ヲ網膜面
ニ合聚シ難リ遠キニ過ル者光線未タ網膜ニ至
ラスシテ早リ合聚スレハナリ而シテ眼目ニハ固
有ノ諸動有テ精々ヨリ其遠近ノ度ニ適スルヿ
ヲ得ル○而ルニ若シ角膜及ヒ水晶体ノ表面凸
起過度ナル者ハ近視眼トナリ若シ其面平坦ニ
過クル者ハ遠視眼トナル

第九十章

凡ソ眼目ノ用ハ外物ノ色ヲ弁別スルニ在リト
雖モ而シモ習慣ニ由テ亦タヨク其物ノ大小遠
近形状動静等ヲ明カニ決定スルヿヲ得ル

第九十一章

視覺ノ主用ハヨリ離隔セル至遠ノ物ヲ遠カニ矣別スルト諸想像カヲ補助スルトヨク人ヲメ倦倖ノ危害ヲ云フムルトニ在リ

第三回　論神識（レールフモーゲン人シス）

第九十二章

神識ハ外識ニ由テ思慮（オリルスラルリング）ヲ得ルモノニメ生レナガラ分別ヲ有スル者ニアラス而レ尼能ク思考アイインクスニヲ形成スルハ神識固有ノ性ナリ

第九十三章

神識ニ二個ノ別アリ一ヲ知力（ケンフルモーゲン）ト云フ一ヲ意識心（イト云フ）

第九十四章

知力ハ即是レ神識ノ思慮（オリルスラルリング）ヲ得テ以テ其ヲ運用スルノ受性（ハットバールド）ナリ其ヨリ神識ヲメ外感ヲ受ケテ思慮ヲ起サシムルニ至ルヲ即知力（ケンフルモーゲン）ト云ヒ思慮ヲ起メ以テ分別スルヲ高知力（オリルスラルケンフルモーゲン）ト云思慮ノ本タ

不明ニシテ固證シ難キドンケルエンリンヲ問フ感トルゲワールオト云ヒ其明亮ニシテ既ニ固證スルヿヲ得ルベーエストセーキエンメットヲ識ケントヒ識ニ思考トアイングスコウ分別ツベプグリトヤリ両ラ共ニ思念アイシダフトヨリセツ想像カハ即目前ニ在ラサル事件ヲ思考スルノカニシテ其外ノ心意上ニ生テサルモノヲ同ンタシ」蘭名インゲンベレールト云ヒ既ニ心意上ニ発スル者ヲ記憶ゲヘウト云フ者ハ神識ノ変件ヲ分別ノ外ニテ自ラ変ヲ発スルモノ也」エ夫ラヽルデールハ各個ノ変件ヲ一般ノ変件スカラフトト

点ニ考成スルノカ也」オフフルニハ一般ノ変ヲ各個ノ変件ニ祇要シ考フルノカナリ

## 第九十五章

意識ハ神全ノヨリ善美ナルモノハ此ヲ好欲シ醜悪ナルモノハ之ヲ忌憚スルヿヲ得ルノカナリ其好欲ノ度ノ最モ劇甚ニシテ義理ダテノヨク此ヲ制伏スルヿヲ得ス由テ以テ終ニ体中不隨意ノ運動ヲ発スル二至ルモノハ此情ハルット蘭名インエンゲヘアンゲリト名ク内部好欲カフトベゲールヲ羅名インスチンクト按ニ「コンスゲリュリ病理論曰インスチンクト」ハ心ニ思慮分別スルヿナリ唯其身体ニ害アル

モノハ自然ニ如ヲ忘レ利アルモノハ目然ニ
コトヲ好欲スル処ノ動物特固有ノカナリ其カ
久ル其智慧愈々大ナラシハ愈々明カナルモノ
ニメ獣類野外ノ人小児狂人木ニ於テハ殆ニ明
カナリ

八人ニ於テハ他ノ動物ニ於ルカ如ク較著ナラ
ス

## 第四回　論挙動力（アルバーエギンゲスフルモーゲン）

### 第九十六章

挙動力機械ハ筋也筋ハ柔軟赤色ニメ稍々弾力
ヲ有シ其繊維ハ蜂巣状組織ニ由テ種々ニ相會
集シ以テ「ヒユーデルス」ヲナス（按ニ此ヒユーデ
ルスハ復タ相會集シテ筋ノ全質ヲナス）論筋ヲ
前ニ固有シ腹中ニハ血脈吸収管神経叢ニ錯
綜シ両端腱ニ終ル腱ハ滑沃其負動ニ比スルニ
甚タ強固ニメ弾力強ク血脈神経共ニ微ニメ固
有ノ解動力（エリゲ子プリツケルバール）ナシ或ハ云
腱ハ筋ノ蜂巣状莢膜ヨリナルモノ也ト憶フニ
亦タ臆説ナラサルニ似タリ

（註）挙動器械ニ動之ト所動ト二種アリ動之ノ
器ハ即筋ニメ所動ノ器ハ骨ナリ筋ノ赤色ハ
人身ニナニ様ナリト雖モ是レ腹中固有ノ色

ニアラス唯其中ニ錯綜スル血脈ニ関係ニスル
モノナリ故ニ是ヲ咬ムトキハ其色全ク消散
ス○筋ノ質ハ極微細小ノ纖維ヨリナルモノ
ニシテ其纖維ノ互ニ相合着スルヤ活物膠ジレ
リキレニ由ルカ活物油ニ由ルカヲ知ラスト
雖モ其合着大ニ生活力ノ補助ヲ得ルモノヒ
何トナレハ今死体ノ筋ヲ取テ火ヲ扶熱スル
ニ甚タ易シト雖モ其力ヲ以テ活ノ筋ニ解
ルヽニ次シノ変ヲナサヽレハ○憶フニ其極
纖維ハ各々蜂巣状ノ莫ヲ以テ被包サレ蜂巣
状組織ヲ以テ許多相會束合束メ「ビユンデル」
チリスト成リ再ヒ相會束メ大「ビユンデル」ス
トナリ其「ビユンデル」ハ復タ相聚テ終ニ一個
ノ筋ヲ形成ス其「ビユンデル」チリスト向ニハ脂
肪アル「ナシト雖モ大「ビユンデル」ス向ニハ
偶々脂アルヲ見ル其脂肪筋ノ外周ニ於テハ
甚タ疎多ニ莫ヲ用包シ以テ近傍ノ諸器ト合
着スル「ラ防ク○全質ノ蜂巣状質中ニハ水
蒸気充盈セル故ニ筋ヨク柔軟ナル「ラ得テ
且ツ運動ニ便ナル「ラ得ル

## 第九十七章

骨ハ体中ニ於テ最モ堅剛ナル部分ニシテ諸凝体ノ柱礎タルヿヲ主ルモノニシテ其質中磷酸竝ノ石灰土ヲ含ムヿ他部ニ比スルニ最モ夥シク蜂巣状組織ヲ有スルヿハ他部ニ違フヿナシ血脈吸収管次ニ其中ニ復リ神経ハ唯脈管ノ質中ニ在ルモノヽ外別ニ少ニ循ルモノナク色ハ白色ニシテ微紅色ヲ帯ヒ其色黄疸病ニ於テハ黄色トナリ茜草ヲメーカラプ食フノ后ハ紅色トナル諸色ノ形状捉起凹陥等ハミナ人々各相定レモノニシテ菌ヲ除クノ外其外面皆骨膜ノ被ワレサル者ナシ内空ニハ骨髄充塡ス骨髄ハ脂肪状ノ流質ニシテ能ク骨ヲ軟和シ且ツ此ヲシテ軟カシムルヿヲ主ル

## 第九十八章

凡百ノ諸骨其始メニ於テハ皆軟骨也軟骨ハ滑澤ニシテ白色微透明甚タ弾力強ク柔撓ス可シ諸軟骨漸次ニ変シテ骨トナルト雖ヒ亦タ生涯軟骨ニ止ルモノアリ即チ是固有ノ軟骨ナリ（柄ニ喉頸外耳諸関節ニ而シテ此ヲ外面ニ於ケル者是ナリ）

膜アリ此ラ軟骨膜ハ之ヲ被膜其軟骨ノ骨ニ接着
スル所ニ於テハ骨膜ト連テ一面ノ膜トナル○
凡ソ軟骨ノ変メ骨トナル中其始メ其質中ニ動
脈末梢ヨリ分出スル所ノ骨質分子漸ク凝固ノ
骨核（ルベリンゲナル子ン）モノヲ形成シ此骨核漸ク増長
メ終ニ全骨ヲ成スルニ至ル

## 第九十九章

凡ソ関節ノ運動ハ其骨端ヲ被フ所ノ関節軟骨
（ゲレートカラト）（クベーチン）ト関節液トニ由テ軟易ナルヿヲ
得ル

## 第百章

諸筋ハミナ一種固有ノ発動性アツテ刺戟セラ
ルヽモノハ直チニ収縮スルノカヲ有ス此カヲ
筋力ト名ケ或ハ肉力ト名ク其力タル固ヨリ単
一ノ単力ト違ヒ又タ神経解動性トモ違フ而シ
テ此レ神経解動性トハ全ク幸戻スルモノニ非
ス

（註）筋織進ノ運動ニ於テハ血液ノ運行亦タ缺
リ可ラサルノ用ヲ成ス此故ニ血脈ヲ切断ス
ルトキハ其筋直チニ運動廃絶スルヿ猶ヲ神経

ヲ切斷スルカ如シ

## 才百一章

諸筋ヲ牽縮スルヤ其負ヲ発スル形ノ変化ノ性如何乎吾輩未タ知ルヿヲ得スト雖ヒ其筋收時ニ當テ敢テ膨脹スルモノニアラス

（註）按ニ「リセラン」ト欧説ニ曰ク筋ノ運動タル其牽縮ヲスルモノヒト今筋ノ運動ノ性ニ由テ考フルニ其説実ニ當レリ何トナレハ是レ纖維ノ牽縮ヨリナルモノニノ其纖維ヲ合着セシムル蜂巣状組織此レカ為メニ壓縮サレ由テ以テ強固硬堅固スレハ也

## 才百二章

凡ソ動物体中ニ於ケル百般ノ運動妥クハミナ筋ノ牽縮ニ係ラサル者ナシ論ハ拘筋ニ由テハ諸筋ニ由テハ諸口妥ク囲繞サレ諸孔隙ヲ囲繞スル筋ニ由テハ其孔隙能ク狹窄サレ諸筋ノ長ニ循ヒ或ハ次ヲ輪状ニ囲繞スル筋ニ由テハ其管或ハ延長サレ或ハ短縮サレ或ハ寛ケシレ或ハ窄セラレ両端各異ノ部ニ固着スル筋ニ由テハ其両部互ニ動揺サルヽ等ノ如キ是ナリ

故ニ横動スルモノニ於テハ其一方動揺シ易キノ部分又他ノ一方ニ牽動セラルヽモノ也

## 第百三章

諸筋ノ運動スル其力其速疾ニ甚タ大也固ヨリ此ヲ輔助スルモノ種々在トハ呉尺其自ラ有スル所ノモノ亦タ甚タ多シ何トナレハ諸筋骨即サルヽ而ヽニ着ク十麦ハ夏ノ器ハ（起原各「エーンアルミ」ヲ「ボーム」桜ニヘヘヘヘ）ヲ加リ山ハ佑ニ云萬カ也エ、シアルムハ一聲ナ即倚倚セル萬カト云フ意今盾當ノ證ヲ知ラス假リニ双起器ト設スノ伏ヲナス器械術ニ申テ故ラ見ル二當テカノ感スル可キ也而ルニ其力ヨリ對待セル筋力ニ勝テ数量ノ重ヲ轉動スルヿヲ得レハナリ

## 第百四章

諸筋ヲメ運動ヲ発起セシヤルノ抵解（プリツケルリング）ハ其筋ニ解ルヽ所ノ物ニ由テナルモノ有リ或ハ唯神全ノ其筋中ニ運用スルニ由ルモノ有リ其運動ヨリ神感ノ意ト合一スル者ハ故ヲ隨意運動ト名ケ然ラサル者ハ故ヲ不隨意運動ト名ク凡ソ作ル諸運動麦ク故而動ノ間ニ在リ

## 第百五章

神經ノ觸動性（セーニュープリヴケル ハットバール イード）諸器ノ異ナルニ応メ各々相異ナルカ如ク筋ノ觸動性（スピールプリヴケル バール）モ亦タ諸器ノ異ナルニ応メ各相異ナリ

## 第百六章

或云フ蜂巣組織ニモ亦タ同ジ觸動性ヲ有スト云フ義カニナリ（ガ発明スル觸動性有ト）章ニ比較スベシ而シテ未タ較乎タル徴證ヲ得ス

## 第百七章

諸筋運動ノ身体保護ヲ利用ヲナスヤ媒無ク直チニ及ボスモノアリ（カンミュニケル バール）媒ヲ以テ及ボス

モノアリ（ミュテル バール）

## 第百八章 論睡眠（スリープ）

神経度ヨリ神識ニ感覚ヲナサシメ諸筋ニ随意ノ運動ヲ起サシムル間ヲ興寐トシ其感覚ト随意ノ運動トハ共ニ停止スル間ヲ睡眠ト云ヒ而常ニ互ニ相交代ス

## 第百九章

睡眠ノ近因ハ即唯神経度ノ停止スルモノニメ其遠因ハ種々アリ即チ挙動後ノ虚脱衰弱抵觸

ニ由テ発動性ノ貧乏スルモノ及ヒ脳質固有ノ
運用ヲ妨クル諸病等是ナリ
(註)或人僻説ヲ立テ曰睡眠ハ血液ノ脳ニ送輸
スルヿ多キヨリ発スルモノナリト而レ𪜈今
実験ニ由テ之ヲ見ルニ凡テ血液ヲ脳ニ送輸
スルヿ多キ病ハ常ニ睡眠ヲ妨クルモノニ
メ且ツ睡中ハ毎ニ脳質萎縮スル者也○憶フ
ニ睡眠ノ近因ハ脳中血液ノ減退ニ由ルモノ
ナラン何トナレハ今親ク実験スルニ脚浴刺
絡下肢寒ノ石及ヒ飲食ノ後等凡テ血行他
部ニ増進スルヿミナ嗜眠ヲ発スレハナリ然
レ𪜈又タ卒中凡頭蓋骨傷及ヒ頭蓋骨ト脳ト
ノ間ニ血液ノ溢々スル者等ニ由テ発スル鼾
睡ハ次ノ比ニアラス

第百十章

睡眠ノ将ニ生セントスルヤ又タ疲倦ノ症ヲ発
スル者十リ

第百十一章

不適意ノ語逗動ハ睡中猶保續スト雖𪜈落覚ノ
時ニ比スルニ桁々寛保セ○睡眠ニ由テ神経質

復ヒ整復スルヿヲ湯ル者ハ僅微ノ抵觸ニ由テ
モ驚覺スルヿヲ得ルモノニメ妖時必ス欠伸ヲ
発ス

(註)睡中ハ隨意ノ活運動ヲ停止シ上神ヲ十
其常慣ノ抵觸ヲ感覚セス眼目閉闔スルニ至
ル耳ハ其機用ヲ保續スルヿ最モ長シト雖モ終
ニハ全ク感覚ヲ失フ而シテ飲食消化乳糜吸
収及ヒ諸吸収ノ機能ハ却テ増長
シ血行ハ寛後トナリ○睡ノ覚
ム人者ニ至テハ久伸ヲ好ムモノハ憶フニ妖

ニ由テ以テ其部(按ニ即ち肺臓)ノ血行ヲ迫メ神至流
ノ流通易カラシメンカ為メナルヘシ

## 第百十二章

睡眠全ク熟セスメ内臓ノ機動全ク停止スルトキ
ハ夢ヲ生ス夢ニ由テハ偶々隨意ノ運動ヲ起シ
或ハ所謂夢遊(原名ナットワンデルン按ニ是シ夢中遊ヒメ寤テ後自ラ知ラサル
モノナリ)

論使人身為機作之機能 第百十三章

人身ヲメ機作メラシムルノ機能ニ屬スルモノ

ハ化テヨリ身体ヲメ各個ノ諸部ヲ保固セシメ
且ツヨリ快ヲメノ生成化育ヲ成サシムル者ミナ
是レナリ

## 第一回　論血液循環

### 第百十四章

人身中ノ血液ハ赤色温煖ノ液ニメ心臓ト脈管
トノ中ニ含マレ循環流利メ已ムヿナリ流液中
ノ最大緊要ナルモノ也化ノ体中諸液中熟ナル
モノハ皆ナ快ニ送入サレ分離セル者ハ皆ナ快
レヨリ生テ凝体亦タミナ快レヲ以テ栄養セラ
ル

### 第百十五章

血液ハ健康ノ体中ニ於テハ一種ノ純液ノ如シ
ト雖モ快ヲ体外ニ出スヿハ自ラ相分析メ其始
メ水様ノ蒸気ヲ発スルノ外ニ種ノ近成分ナリ
スベスタンドデーレン（原名）トナル其一血、水、ブルードワーテル（他書ニ汎テ是レ）ナリ
ハーレンヘイト（名人）ノ験温管百五十度ノ熱気ヲ
以テ凝固セシムルヿヲモノ也其二繊維質（ヘーベルストフ）
射出セル血液ヲノ直チニ凝固セシムル所ノモ
ノ也其三紅部（ロー）（デルル）其質至微ノ小球ヨリ成ル

此三種ノモノハ相分泒スルヤ其始メ漸次ニ凝固ヌ血水ト血塊ブルード（ブラック）トニ分ル其血塊ヲ取テ洗滌スルトキハ紅部自ラ滌除サレテ纖維質ヲ殘ス○血液ノ遠成分アフゲーテ子ベスタンヒドデーレン）ハ亦既ニ第四章ニ於テ畧說セル所ノモノ是也而シテ唯々此紅部ハ侍中他ノ部分ニ比スルニ纖分子ヲ含ムヿ最モ居多也

第百十六章

血液ノ紅色ハ固ヨリ紅部固有ノ合和（フルメンギング）ニ関係スト雖トモ憶フニ亦タ血液ノ生氣（レーベンスクラフト）ニ關ル丶所ノ鐵分子ノ酸度ト結合スルニ由テ增進スルナルヘシ

第百十七章

生活侍ニ於ケル血液循環ハ心臟ヨリ動脈ニ出テ動脈ヨリ靜脈ニ移リ靜脈ヨリ復タヒ心臟ニ歸入スル者也而ルニ從古ハルヘーヒ各人ノ時ニ於テハ世人皆所為ラク血液運行ハ唯靜脈ヲ以テ進退スルモノ也ト今其循環ノ狀ヲ知ラシト欲セハ且ロシリ試ニ侍ノ一部ヲ涼束スヿ可シ動脈ハ必ス其涼束ト心臟トノ間膨脹シ靜脈ハ涼

末ト末梢即動脈末梢ヨリ起ル所ノ静脈根也トノ間膨脹ス以テ静脈血ハ帰流スル者ニメ動脈血ハ輸行スルモノナルヿヲ知ルヘシ其他静脈内ニ於ケル障膜ノ製造死後脈内ニ注入セル水液ノ状及ヒ血液溢ヤ常ニ爰ノハ動脈末梢ヨリ発スル等皆以テ此ヲ證スルニ足ル

## 方百十八章

心臓ハ血液ノ循環ニ於ケル最要ノ器ニメ胸腔内ニ位置スル内空失形ノ筋負也其外囲ハ心嚢ニ被包セラレ心嚢ヨリ分泌スル液ニ由テ心ノ外面滑澤ヲ滑以テ摩傷ト愈着ノ害ヲ免ル矣端ハ下方ニ向テ左側ニ偏ス○其製造ニ個ノ心室即左ハルトカーメルス室ト二個ノ附室原名ヲリヘンカーメルスト名ブリセロ即両静脈ノ心ニ接着セル所ノ濶大ナル部ニメ内外面共ニ一種ノ膜ヲ以テ覆フル其外面膜ハ即チ心嚢ノ諸脈幹ニ接着スル所ヨリ展延シ未ルモノニメ内面膜ハ諸脈管ノ内面膜ヨリ展延又○両個ノ心室ハ其間内状ノ中隔有テ以テ相分タル其中隔両面ハ心室内ニ於ケル他ノ内面ト等ク深乱セル較著ノ肉條有テ或ハ乳頭ノ状ヲ成シ或ハ木根ノ状ヲナス而メ其両室一

ハ坎ヲ前室（即右ト云ヒ一ハ坎ヲ後室ト云歸左前室ハ其内空柿々短クメ濶ク其周薄ク後室ハ其周柿厚シ坎両室ハ各々二個ノ口アリ其一ヲ静脈ノ口ト云ヒ一ヲ動脈口ト云ヒ一ヲ肺動脈口ト云フ静脈口ハ前室ノ静脈ト云フ一ヲ肺静脈口ト云フ静脈口ハ前室ノ静脈ト接スル所ノ処ニメ其緑白色ノ輪周繞シ内面膜畳重メ三尖瓣ヲ形成シ動脈口ハ後室ノ動脈ニ接スル所ニメ其緑膜状ノ輪アリテ限ヲ成シ三個ノ半月様瓣是レニ懸リ其毎瓣各々中部ニ於テ微少ノ粘ヲ備フ肺動脈口ハ前室ニ開テ殆ント動脈口ト其状ヲ同シ肺静脈口ハ後室ニ在テ三尖弁様瓣ヲ備フ

（註）心藏ハ左ノ胸室内ニ在テ心嚢ニ被包セラル心嚢ノ用ハ心藏ヲ固持メ動揺過度ナラサラシムルニアリ故ニ能ク横隔膜ト結着ス

## 第百十九章

附属ハ心耳（即附属ノ展テ空洞ヲナスモノ）ト共ニ短メ濶ク其周薄ク心藏ノ内外面膜ノ重襲ヨリナリ其膜周ニハ筋纖維ノ網様ナル内條位置シ其室中隔布テ両部（即右ト左ト）ニ分タル其中隔ハ亦タ心藏

外面膜ノ重襲セル者ニメ其膜間筋纖維アリ未
生ノ胎児ニ在テハ此中隔ニ卵圓孔ナルモノ有
テ膜此ニ懸リ其障膜生後漸ク其緣ニ愈着シ
終ニ唯瘢痕ノミヲ残ス○両附室ハ各々其接ス
ル所ノ心室内ニ口ラ開キ以テ静脈(幹)間ノ血ヲ受
テ次ヲ心室内ニ納ル即右室ニ在テハ静脈大幹
ノ血ヲ受ケ後室ニ在テハ肺静脈幹ノ血ヲ受ク
○又大下幹静脈ノ附室ニ接スル処ニハ卍ウス
タキアーンセ弁ト名クル障膜懸ケリ○心蔵ヲ
栄養セシカ為メニハ固有ノ血脈ト神経トアル

ヿ帝ヲ他ノ諸部ニ於ケルカ如シ
(註)心蔵ニ循行セル神経ハ其原ヲ蔓延神経ト
助間葡神経トニ資ルモノニメ其負担多カ
ク其数大シ

第百二十章

心蔵ヨリ起ル所ノ諸血脈種々アリ皆木ノ枝極
ヲ以テ全身諸部ニ布蔓スル如
脈ノ種類ハ其中ニ循行スル血液ノ向方ニ従テ
之ヲ分ツ又即チ心蔵ヨリ以テ血液ヲ各部ニ輸
スルモノハ次ヲ動脈トシテ体中各部ヨリ血液

ヲ心臓ニ帰流セシムル者ハ此ヲ静脈ト云フ

第百二十一章

動脈ハ膜質ノ管ニシテ其原ヲ心臓ニ取リ各部ニ
曼延シ枝分スル毎ニ漸ク狹窄トナル其質三襲
ノ膜ヨリ成リ其一回有膜ロイゲン ロック 是レ身体
各部ニ於テ其部ノ蜂巣状組織ヨリ市ヲ外膜ヲ
得ル其二外膜フレーク ロックス 其三内面膜是ナリ此諸
膜亦タ各々其栄養ノ為メニ自己ノ動脈ヲ備フ

第百二十二章

而動脈ハミナ必ス其原ヲ動脈大幹ニ取ルモノ
ニシテ其管内静脈ヨリ狹ク其膜ハ稍々厚クシテ
弾力強ク其枝分スルヤ木ノ枝ヲ生シ極ヲ分ツ
カ如ク漸次ニ分レテ細微ノ條溝トナル化ソ動
脈枝ハ角ニ復タ合同スルヿナキモノヿ也ト雖モ
唯々体中一二ノ部分ニ於テハ動脈大枝ノ互ニ
相接合スル者アリ如此ク縷分スル其終端一分
ハ静脈ノ微末梢ニ終リ一分ハ既ニ血液ヲ通
セサルノ細管ニ終ル此細管ハ即チ所謂ル毛気
管栄養管分泌管ナル者是ナリ

第百二十三章

動脈ハ其質唯々固有膜ト内面膜トノ二襲ヨリ成ル希ニメ筋纖維ハ唯々其大幹ノ心臓ニ近ク処ニ在ルノミ其他ニ於テハ是レ在ルヿヲ見ス其内面膜ハ各部ニ於テ較著ノ皺襞ヲナシ以テ障膜ヲ形成ス○凡リ女脈ハ動脈ニ比スルニ其管内寛ク其蔓衍支数定リナリ其膜軟ニメ薄ク弾力少ク其原ヲ動脈ノ至微末枝ヨリ取リ極ヨリ枝トナリ幹トナリテ終ニ両個ノ静脈大幹(即上下幹)トナリ以テ血液ヲ女序ニ隨テ心臓ニ帰入セシム

註 凡ソ動脈ハ其蔓衍常ニ静脈ヨリ深シ故ニヨク其外傷ヲ防禦スルヿヲ得○静脈ノ蔓衍スルヤ互ニ相接々スルヿ各部ニ於テ甚タ夏シ故ニ其岐分ノ本枝ヲ成スヿ動脈ノ如ク相類似ス

## 第百二十四章

心室ト附室トハ相番替ノ縮張ス故ニ静脈血ノ前附室ニ入リ肺静脈血ノ後附室ニ入ル間ハ両附室共ニ寛張シテ両心室共ニ縮衰シ其血ノ後附室ヨリ後心室ニ入リ前附室ヨリ前心室

ニ入ル間ハ両所室共ニ縮窄メ両心室共ニ寛張シ黄心室ノ血肺動脈ニ出テ後心室ノ血動脈大幹ニ出ル間ハ両心室縮窄メ両所室再ビ寛張ス次ノ瞬張ノ諸動ニ由テ静脈大幹ノ血液黄室ニ入テ肺ニ至リ肺ヨリ後室ニ帰テ再ビ動脈大幹ニ出テ以テ全身ニ普達スルヲ得○心室内面ノ内係出テ或ハ多ク心室ノ縮窄ヲ助ケテ以テヨク血液ヲ噴出セシメ脈管ノ口ニ懸ル所ノ瓣膜出テ或ハヨク血液ヲ入ノ度ヲ節ニシ且ツ其逆流ヲ防クヿヲ主ル

第百二十五章

心ノ尖端ハ心室ノ縮窄スル毎ニ左胸ノ内面ニ向テ撥リ其動ヲ外ニ顕セシム即チ心悸動ナルモノ是レナリ而シテ其動ハ常ニ動脈ノ傳動ト相合致スル由ヲ以テ知ルヘシ心室ト動脈ト其縮張互ニ相反スルモノナルヿヲ推ニ動脈ハ寛張ニ由テ外ニ顕スレハナリ○脈動ハ大抵大人ニ在テ一分時間七十動許ナルモノニシテ其数小児ニ在テハ甚タ多ク老人ニ於テハ大ニ少ナリ亦久佟ノ長短稟賦ノ強弱各時ノ依業等ニ由テ其遅速強弱各人各種ナ

ルモノナリ

第百二十六章

心室ノ縮窄スル其力ハ甚タ強烈ナルモノニメ殊ニ後室ハ最モ勝レリ

第百二十七章

死ニ臨テ心室縮窄ノ運絶スルヤ後室必ス前室ニ先タツ是レ前室ハ尚ラ歸流ノ血ニ由テ刺戟セラルヽ稍々長ケレハナリ

第百二十八章

今「ハルレル」氏ハ発明ニ従テ血液ノ刺戟ヲ後室ニ成サシムル氏ハヨク後室ニメ死ニ後ルヽヿヲ渇セシム因テ以テ証スヘシ心室ノ防室ト相番脅スル縮張ノ動ハ全ク是レ血液ノ刺戟ニ起因スル者ナレハナリ

第百二十九章

心臓ノ運動ハ不隨意ノモノニメ其觸動性プリケルバリルヘリドルハ尚ヲ他ノ諸動ニ於ケルカ如ク其神経ニ関係スル然レ共其觸動性ノ核動ハ神経ノ率縮ニ関係スルニアラス唯々神経負感動ノ劇甚ナルニ於テハ大ニ由テ変ヲ生スルヿアルノミ

## 弁百三十章

動脈中血液運行ノ勢ハ心藏ノカト動脈固有ノ
緒力トニ関係スト雖モ其固有膜内
面膜ニ在ル斜ノ動纖維ヨリ発スル布ナリ其心
藏ノ力ニ由テハ其脈寛張シ固有ノ緒力ニ由テ
ハ緒窄スルヤ常ニ固有ノ寛度ヲ過リ若シ之ノ緒窄固有
ノ寛度ニ復スルトキハ唯々心藏ト動脈
弾力ニ由ルトヲ可ナルベシ
ト雖ハ其緒張ニ相反スル者ニメ其脈動ノ起因
ハ亦々心藏ニ於ケルト同シク脈ニ血液刺戟スル
亦々其動ハ不隨意ナリ而シテ亦々神経負核動

ノ増長ニ由テハ其動ニ変ヲ生スルヿアリ

## 弁百三十一章

静脈中ニ於ケル血液ノ運行ハ甚緩徐ニシテ其脈
大幹ノ心藏ニ近接セル部ノ外敢テ搏動アルヿ
ナシ其血液ハ唯々心藏ノカト動脈ノカト静脈
固有ノ弾力ト其脈ノ蔓衍セル部ノ近傍ニ於ケル
動ノ緒張ト近傍ニ於ケル動脈ノ搏動トニ由テ
運輸セラル其近傍ニ於ケルモノト壓迫ニ由ル
カ如キハ其カ甚々微ナリト雖モ管内ニ於ケル厚膜
以テヨリ心藏ニ向フヿヲ得セシメ亦々血液ノ

ノ
重カモ欠シク其運行ヲ助クル丁有リス其心胞
ニ近キ処ハ心室ノ吸入サルカラヨリ其運行ヲ
進ムル丁ラ得ル○其他ノ脈ノ枝数ト管内ノ寛
キト接合ノ処ノ多キトミナヨク其血ヲメ流利
シ易カラシムルニ足ル

## 第百三十二章

血液循環ノ機動ハ諸機能中ノ最要ナルモノ也
血液ヨクコレカ為メニ凝停ヲ深報シ諸液ヲ分
房シ申テ以テ全体生活カノ保護ヲナスヿヲ得
尚ヲ且ツ自ラヨク快合メ流離シヨク腐敗ヲ免
レヨク全身ニ普達シ傍ラ欠シノ体温ヲ発スル
ヿヲ得

## 第二回　論呼吸（アーデハーリング）

## 第百三十三章

呼吸ハ甚タヨク血液循環ニ相関係スルモノニ
メ其器ハ即チ肺胞也肺ハ気管ト相續メ胸腔ニ
位置ス

## 第百三十四章

胸腔ハ其周囲骨椎骨ボルストウト（骨部ト）助骨（肋骨部）
ヤヤリ胸骨トヲ以テ柱礎トシ助間助其助骨ノ

間ニ位置シ下底ニハ横隔膜其筋ニ腱條部ナル
帯有テ以テ腹腔ト異隔シ周囲ノ内面ハ肋膜ヲ
以テ覆ハル肋膜ハ二個ノ嚢狀ヲナスモノニメ
其両嚢相接セザル部有テ以テ次シノ空隙ヲナ
ス

## 第百三十五章

次膜ノ肋膜両個ノ嚢内ニハ肺胞アッテ次ヲ充
塡シ水様液其間ニ発泄メ互ノ密着ヲナサシ
メズ○横隔膜ヨリ両肺ノ間ニ向ヒ肋膜ノ重複
セルモノヨリ至ル次ヲ肺靱帯トミル次靱帯再ヒ
展テ両肺ノ外膜ト十ル○肺ノ実質ハ微小ノ嚢(ブドウ)
裂ヨリ十ル其嚢裂ハ再ヒ無数至微十ル蜂巣狀
質ヲ以テ成リ其蜂巣狀質ハ肺ノ動静脈ノ枝梢
纏絡シ気管ノ至微末梢其内ニ口ヲ開ク○肺中
又タ別ニ其質リ栄養ヲ主ル所ノ一種ノ血脈ア
リ

(註)肺臓ハ較著ノ嚢裂アッテ相分タレ右肺ハ
三葉ト十リ左ノ肺ハ二葉ト十ル而メ左肺ハ
心臓ノ其部在ルカ故ニ其形大ニ右肺ヨリ小
十リ

気管ハ下モ肺臓ニ連續シ上モ口内ニ出テ孔ヲ
坎ニ開ク坎部ヲ喉頭ト云フ其位置頸ノ前部中
央ニ在リ○喉頭ハ諸種ノ軟骨相囲繞ノ成ル其
軟骨一ヲ環形軟骨ト云ヒ一ヲ甲状軟骨ト云ヒ一
ヲ披裂軟骨（其数二箇）ト云其破裂軟骨ノ前面ヨリ甲
状軟骨ノ裏面ニ向テ連ナル二對ノ靭帯アリ其
下部ノ一對ハ坎ヲ喉隙靭帯ト名ク即是喉ノ孔
際ヲノ狹窄ナラシムル所ノモノ也○會厭軟
骨ハ薄片ノ一軟骨ニシテ舌根ニ接シ喉頭面ニ位
置ス而シテ喉頭ニハ諸種ノ靭アリテ以テ諸

軟骨ニ十隨意ニ運動スルヿヲ得其内面ニハ
内ノ表膜ヨリ展延シ来ル一種ノ膜覆ハレ其膜
ニハ無数ノ神経ト粘液腺里児トヲ布置シ喉頭
内靭帯ノ間ニ於テハ其膜一對ノ小嚢ヲ形成ス

## 第百三十七章

甲状軟骨ノ前面左右ノ下方ニ偏スル処ニ一処
ノ腺里児アリ其須中血液甚タ多ク故壮ノ人ニ
於テハ黄色ノ液汁充盈ス坎ヲ甲状腺里児（シルドキヤルリート）ト名ク

## 第百三十八章

気管ハ喉頭下端ヨリ始ッテ下方ニ行シモノニ
メ其頂十七個ノ軟骨相重ツテ成リ其各個ノ軟
骨ハミナ輪状ニ離開セリ後部其内面固有ノ膜是レ即チ喉頭内膜ノ延セル者
ニ被フレ其各輪ノ互ニ接スル処及ビ後部ノ離
開スル処ハ筋繊維アッテヨリ故ヲ結着スル故
管胞腔内ニ於テ分レテ二個ノ枝トナリ両肺ニ
下リ其肺巣頂内ニ終ル

註 気管ノ古枝ハ通例左枝ニ比スルニ稍々短
メ寛シ

第百三十九章

凡リ大気ノ呼吸ニ要用ヲナス所以ノ者ハ唯々
其中清気即酸素ノ気ナリ在ルニ有ルニ由ル然レ𪜈其中
可吸ノ者アリテムバール不可吸ノ者ニートアリテムバールトノ相混合スルニ由テ以テ人ヨク其性命ヲ保
續スルヿヲ得ル者也而メ其成分合和ハ大概酸
素百分ノ一二ニ居リ〇人ノ呼吸スルヤ気ノ酸
素ヲ奪テコレニ代ルニ炭酸気ヲ呼セス故ニ一
タビ呼々スル処ノ気ハ再ヒ呼吸ニ用ヲナサス

註 人ノ呼吸スルヤ気中酸素大キモ百分二十
アルヿヲ要スト雖モ其ヲ失ヒ減メ百分ノ七

或ハハニモ至テハシヽルヿ得ス時ニ至テハ呼吸殆ト絶シ全ク窒塞スル二至ルモノナリ

## 第百四十章

吸息ハ即チ大気ヲ肺中ニ引クノ機動ニシテ横隔膜ヲ低下シ肋間内外筋内外其動ヲ異ニセスト雖モ深キ吸息ニ於テハ尚ホ其他胸腔内ヘアル由テ諸筋ミナ是レカ為メニ運動ス

胸腔ノ張開スルヨリ起ル其張闊スルニ由ルヤ外部ノ気ト内部ノ気ト平均セシカ為メニ弾力ヲ以テ気管ヨリ肺ノ蜂巣状負囊ニ壓入シ柳ニ索箭ノ如ク引入スルニ非スト雖モ実ニ引入スルニ至ルカ故ニ柳原ノ外気ト平均セシメントメ壓入スルモノナリ由テ蜂巣負ノ膨張スルカ為メニ坎レニ洛ヘル血脈近長メ其由拡延ヒ血行流行甚タ容易ナルヿヲ得

## 第百四十一章

呼息ハ其機動一分ハ横隔膜ノ弛緩メ本位ニ復ル二即チ上部ニ由リ一分ハ肋間筋ノ運動体止又張スル力為メニ肋骨ノ自固ノ弾力ヲ以テ本位ニ復スルニ由リ亦タ気管枝及ヒ蜂巣負ノ弾力ト腹筋ノ運動トニ由ルモノニシテ甚タ強キ呼息ニ

於テハ亦タ筋肉ノ運動ニ由ル○凡リ呼息ニ声
テハ肺中ノ気ヲ排出シ盡スヿ能ハス故
ニ既ニ一タヒ呼吸スル所ノ人ノ肺ハ水中ニ投
入ル二必ス浮ヒ未生ノ兒ニ於ケル者ハ必ス沈
ム而シテ尼其排出スル所ノ量甚タ多シ故ニ血管
聚繞ノ由折シ由テ以テ心ノ後室ニ帰流スル処
ノ血行進ムヿヲシ心ノ前室ヨリ来ル処ノ血行妨
ケラル

第百四十二章

呼吸ノ用ノ最大緊要ニ缺ク可ラサルヿハ其機
動ヨリ意ニ隨フト雖尼唯々吸シ唯々呼スルヿ
ノ成シ難キヲ以テ著明也シ尼其機動亦タ意
ニ隨ハスメナルヿヲ得ル為メニ十分著明ニ
其理ヲ了解スルヿ難シ憶フニ恐ラクハ肺ノ運
動ト呼吸ト原表固有ノ各致ヲ有スル者ナラシ

第百四十三章

呼吸ノ主用ハ血液ヲメ肺中ニ於テ生気ト合セ
シメ其中含ム所ノ炭質ヲ排セシムルニ在リ由
テ以テ血液其色ヲ増スヿヲ得ル

註 呼吸ハ一ノ主用ハ活体ノ温度ヲ発セシム

ルニ在ルモノ也

第百四十四章

初生児ノ始メテ吸息スルヤ其体中ニ感スル所ノ非常ノ刺戟（浴気ノ刺戟ヲ云フ）ニ於ル對抗テリユフウエルキングヨリメ胸腔ノ闊張スルニ由テ発起スルモノ也

第百四十五章

呼吸ノ劇甚ナル仮種々アリ即チ大息（シユフテン）ト云欠気（ジーウエン）ト云「キユヘン」ト云咳嗽ト云嚏（ニユーテン）ト云嗟（ウアーテン）ト云フ是レナリ

第百四十六章

呼吸ノ用タル既ニ百四十三章ニ説キ示セル所ノモノハ外布ヲ種々アリ其一布ヨリ蓋気ヲ發達セシメ其二中膜（按ニ中膜ハ横隔膜ル布ハ）ナスヲ布アリ膜筋ホトハ雖ト腹腔内ニ於ケル血液及ヒ乳糜ナリ運動ヲ進メ大便ノ排泄ヲ助ケ其三吸息ニ由テ吸飲及ヒ嚥具ヲナサシメ其四吸息ニ由テ声音ヲ発セシハル等是レナリ

第百四十七章

声音ハ大気ノ喉孔隙間ヲ通テ喉隙歛帯ニ觸ル

ハヨリ発スル響ニメ其発スルヤ唯ク喉孔隙ノ
寛窄ニモ由ラハ亦タ特ニ其靱帯ノ弛張モ由ラ
ズ唯々両器ノ動ノ相合和スルモノナリ而メ其
極動タル喉頭所有ノ諸筋ニ由テ隨意ニ発スル
モノニメ其声音ノ強弱ハ喉頭ニ觸ルヽ気ノ強
弱ニ関係ス〇唱ハンゲザ或入歌ヲ島ノ鶯声ニ比
スルモノ有ト雖トモ大ニ差アルモノニメ是レ頗
次型列ニ相交換スル響音ヨリ発スル者也〇甲
状瓦里兒ハ市他ノ喉頭及ヒ気管ニ於ケル諸茂
里兒ト同シク其部ノ内面ヲ滑澤ナラシムルヿ

ヲ主ル

第百四十八章

言語ハ声音ノ諦運動ニ由テ文字ノ形成フ渉ル
モノニメ思慮ヲ外ニ発スルノ要媒也言語ヨリ
形成スル文字ノ音ニ三種ノ別アリ一ヲ單音セル
フキリト云ヒ一ヲ半音ハルフキトニヒ一ヲ複
ンケル　音メーデキトニフ
ンケル　リ

第三冊　論諦流分離

第百四十九章

人身ヲメ骸体タシケルノ骸能ノ最モ賢妙ナ

ル部ノ類ハ飲食消化ト栄養ト諸液分離ノ機能
ナリ今々特サニ諸液分離ヨリ以テ次ヲ説カン

第百五十章

血液ヨリ分離セラルル所ノ諸液其種甚ダ多シ
ト雖ドモ総テ次レヲ二種ニ分チ一ヲ単純液エーホ
ッジヘ又ハ一ヲ混合液ゲメシングデ
ホフト ホフト ト云フ

第百五十一章

分離ノ器械ハ分離液ノ種々多キカ如ク其種甚
タ多シト雖ドモ次ヲ流ブル二四種也其一動脈ノ
主細末梢直ニ分泌ヲ成ス者其二卑炎星児其三

擁簇炎星児ハ是レ許多ノ小粒炎星児ノ相擁簇
セルモノニシテ其小粒炎星児ハ微細ノ血管ト分
泌管ト泄出管トヨリ織成シ其小粒毎々ノ泄出
管互ニ相合シテ終ニ一管ヲナス其四分離ヲ主ル
ノ内蔵原名アフシケリデン是具裂造炎星児ノ
ライシゲワンデン
如ク血管ト分泌管トヨリ織成シ微細ノ泄出管
相合シテ終ニ大管ヲ成スヿ亦々猶ヲ炎星児ニ於
ケルカ如シ

第百五十二章

凡ソ分離液ハ之ヲ其原因ヨリ血中ニ含蓄セル

モノナリト雖モ直ニ其形状ホルヲ以テ血中ニ
在ルモノニアラス

## 第百五十三章

凡ソ分離ノ機動ハ各々其分離器固有ノ合織
ト固有ノ働動性トニ関係スルモノニメ而モ亦
各種液固有ノ分析術様ナル交カト各部ヨリ血
中ニ帰流セル分離器ト各部其分離器ニ近通セ
ル脉管中ノ血質別種ナル物ニ門脉血ノ胆汁ヲ
始他ノ血質トトシテ分離セシカ為メニ其
異ナル類ヨリ分離ノ機能ヲ助ク

四 栄養總論
五 飲食消化
六 乳糜吸収諸吸収之機動
七 血液製造
八 凝体之栄養
九 動物之温暖
十 皮表蒸発気
十一 脂膜分離
十二 小便分離排泄
十三 分種機能

十四男子之分種核能
十五女子之分種核能
十六受胎及妊娠
十七分娩
十八乳汁分離
十九人之生涯
畢

第四　栄養論（アージンゾハイン　ニュアトリチヒン）

才百五十四章

凡ソ身体ハ生活ニ由テ漸リ其実質ト精力トヲ脱失スルモノナリ是故ニヨリ此ヲ整復センカ為メニ栄養物ノ嗜欲ナルモノ起ル栄養物ハ即チ食物ト飲液ト是レナリ

才百五十五章

夫レ飢渇ハ共ニ其感覚不快ニメ美味ヲ得ルト飢渇ヲ免ルヽトハ共ニ其感覚慣（ユ）快（ヨロコバ）ナルガ故ニ人々自ラ栄養物ノ嗜欲ヲ発スルヿヲ得

第百五十六章

人ノ体々ル天賦ヨリ植物ヲ以テモ栄養スベク亦々動物ヲ以テモ栄養スヘキ丁其歯ノ形状ト腸胃ノ製造トヨリ以テ明ムベク亦全世界内何レノ地ニモ住ム丁ヲ得ルヲ以テ知ルベシ

第百五十七章

凡ソ飲食スル所ノモノハ種々百端ナリト雖モ体中ニ入テ消化サルトモノハ皆変メ同性同質ノモノトナル丁ソ得

第五回　論飲食消化（フルテーリング）

第百五十八章

飲食消化ノ極動々ル其器具甚々多シ其極動先ツ其始メヲ口ヨリ取ル

第百五十九章

口ハ上下ノ顎骨ヲ以テ基礎トシ歯部ノ孔ハ唇ヲ以テ囲（マヽ）流シ両側ノ壁ハ内面ニ筋ヲ洛ヘル両頰ヲ以テ成リ下部ニハ訐（マヽ）麦ノ筋膜ヲ置キ後部ハ嚢孔ト通スル所ヲ以テ咽ニ終ル○歯ハ齦肉中ノ歯窠（タンバル）ニ埋マルモノニメ毎歯各々六ヲ冠ト頸ト根トニ分ケ亦其種ヲ三分メ切

齒ト云牙ト云齦齦ト云而メ其齒各々皆共ニ屬
スル処ノ血管ト神経トアリ

第百六十章

上顎ハ鼻孔ト口トノ分隔ヲナスモノニメ其後
端ニ重襲セル懸壁共ヲ軟口蓋サフテフルヽメルテ
ト云ヒ其部筋有テヨク上下左右ニ牽張セラル
其中間垂下スルモノ共ヲ懸壁ト云是レ粘液及
里児聚リ成ルモノニメ亦タ自固ノ筋布ヲヨ
リ短縮スル且杏核ハ共両側ニ位置スルモノニ
メ是レ亦タ粘液及里児ノ腺窠状組織ニ由テ造

合セルモノ也

第百六十一章

古ハ其頂許爰ノ筋ノ合成スルモノニメ其根古
器ニ着キ其倚殆ントミナロ内ニ挺セリ

第百六十二章

津唾ヲ分泌スル及里児三種アリ其一耳及里児
是レロノ両側ニ在テ其出管咬筋ノ間ヨリ出
テ上部ノ第一齒ノ傍ラ頰ノ裏面ニロヲ開ク其
其三舌下及里児其排出管下顎及里児ノ排出管
ノ傍ラ若クハ其管内ニロヲ開ク

註 舌下腺里児ハ細微ノ泄出管許多ノ口ヲ舌下ニ開ノモノニシテ其他市ヲ程々ノ腺里児類及ビ唇ノ内面ニ位置シ皆津唾ヲ分泌スルヿヲ主ル

第百六十三章

咽ノ食道ニ接ル其始メヲ食道頸ト云ヒ根及喉頭ノ後ニシテ漏斗ノ状ヲナシ其周布膜ハ疑似ノ粘液腺里児ヲ備ヘ其内面薄膜ヲ以テ被ハレ外面内膜包ス

第百六十四章

食道ハ咽頭ヨリ胸膜ノ後部ヲ下ツテ横隔膜ヲ貫キ腹腔ニ出テ胃ニ終ル膜管ナリ其膜ハ食道頸ト殊ナルヿナク其膜中ニ於ケル筋織維ハ輪状ニ周繞スルモノト竪ニ向フモノトナリ

註 食道ノ位置ハ次シク気管ノ左側ニ偏スルモノ也外科者流宜ク此ニ注意セサル可ラス

第百六十五章

食ノ口ニ入ルヤ咀嚼ニ由テ変化セラル咀嚼ハ上下顎適宜ノ運動ナルモノニシテ其運動ハ咬動強ク下顎ノ周着スルニ由テ下顎ノ上顎ニ向ヒ動ク也

切齒ヨク食物ヲ尼切シ牙ヨク硬固ノモノヲ碎キ齒ヨク坎ヲ搗末シ舌ト頰トヨク坎ヲ補助ス齒ハ其製狀ニ固ク且ツ関節ニ近爾スルカ故ニ硬固ノモノヲ咀嚼スルノカ最モ強シ

第百六十六章

咀嚼ノ間津液涕ヲ食物ニ混ス是レ一ニハ食物ノ唾液早晩ヲ剤敷スルニ由リ一ニハ咬筋ノ運動其反里児ト池ヲ管トヲ壓迫咬突スルニ由テ津唾ノ分離排泄自ラ促サルヽモノナリ津唾清澄無臭ニメ土負ト塩負トヲ含メル水様ノ液ニメヨク食物ヲ軟和溶融セシメテ以テ一ニハ味ヲ生セシメ一ニハ消化ヲ十シ易ラシムル又タ咀嚼セサルノ間ハ坎液嚥下セラシ以テ胃中ノ消化ヲ助ク

第百六十七章

咀嚼ハ津唾ノ混合ト顎ノ作用ニ由テ食物糜爛セル後嚥下サルヽ其核動メル先ツ両頰ノ動ヨク坎ヲ舌上ニ聚メ舌負ノ動舌ヲ強固ナラシメテ舌根ノ方ニ牽引シ舟形トナレル面ヲ以テ上顎ニ向ヒ狡テ食物ヲ咽ニ送ル坎時軟上顎出テ

固有ノ筋ニ由テ牽羊セラレ以テ嚢孔ノ後口ヲ閉チ容易リ食物ヲ通過セシメ其通過スルヤ直ニ下方ニ垂レ張テ食物ノ逆行ヲ癒ル而メ其食物ノ食道ニ来ルヤ其刺戟ニ由テ其部ノ筋纖維牽縮シ以テ次ヲ食道ニ交寅シ送リ食道亦又其刺戟ニ由テ次レヲ交寅シ以テ胃中ニ送下ス

## 第百六十八章

且ツ杏桜懸壅食道頸及ヒ食道等ニ於ケル流動里見ヨリ分泌スル処ノ粘液ハミナヨク食物嚥下ヲメ容易ナラシハル門ヲ主ル

## 第百六十九章

胃ハ腰腔ノ上際腰膜ノ内ニ在ル一個ノ膜嚢ニメ即腸管（原名ハカナリ此ハ咽ヨリ肛ニ至ル一條膜管ノ称総ナリ）ノ最モ活大ナル部分也其前面ト後面トノ間小凹処（即上面）ト大凹處（即下面）トアリ其大凹処ハ胃虚シケレハ常ニ下ニ向ヒ胃充満スレハ前ニ向フ○胃ノ実質ハ四襲ノ膜ヨリ成ル其一固有膜ノ裏面ニ在ル脆軟ノ薄膜ニメ細状ノ皺裂アリ其三筋膜是レ固有膜ノ表面ニ在ルモノニメ筋纖維ヨリナレルニ至薄膜ノ重襲セルモノ

ナリ其四外表膜膜ヨリ展延シ永ルモノニメ其
原ハ食道ノ胃ニ終ル処ト脾胃相連接スル所ノ
処トヨリ資ル

註 胃ノ形状タスル飲食ノ満虚ニ由テ大ニ相変
化スル者ナリ故ニ胃中若シ空虚ナル者ハ上
口柄々狹マリ膜ノ皺襞延テ大ハクナリ外表
膜ノ血絡大ニ幸延セラレテ張潤シ以テ血液
ヲ此ニ輸送セシメ由テ以テ胃液ノ分泌ヲ催
進ス○胃ノ筋纖維ハ次ヲ分ツニ容易ク三襲
トナルモノニメ其條理相違フ其最モ外表ニ
在ル者ハ條理胃ノ長ニ従ヒ其次ニ在ル者ハ胃
ノ下面ヨリ右口即下ニ向ヒ最裏ニ在ルモノハ
輪状ニ其圍ヲ繞ル此筋纖維ノ條理互ニ相違フ
カ為メニ其各自ノ運動相交テ所謂ル蠕動機ヲ
起ス

第百七十章

胃ニ両口アリ共ニ其上部ニ在テ其左ノ口ハ即
食道ノ終ル処也故ニ胃ハ食道ノ漸ク濶レルモ
ノトスル而メ其左ヨリ右ノ部位ハ総テ之レヲ
胃底ト名ク○右口ハ胃ノ漸ク狹窄トナツテ十

二指腸ニ移ルノ界ニメ其同有膜ト内膜ト共ニ展テ輪状ノ較著ナル積襞ヲナス此ヲ胃関ト云ポキルテール八其積襞中亦タ筋識進ノ在ル有ル力為メニ拍約ノ用ヲナス

## 第百七十一章

胃液八其膜ニ絡フ処ノ影多ノ動脈未稍ヨリ分泌サレ胃粘液八胃ノ粘液腺ヨリ生ス胃粘液八内膜面ニ在ル所ノ粘液腺ヨリ生ス其渠下口ノ辺ニ於テ殊ニ著シ分泌セラル○又タ胃八神経ノ亦蔓シ絡フ最モ多シ故ニ感覚最モ甚クメ他部ト相感動スルヿ亦タ較著也

## 第百七十二章

胃中ニ於ケル食物消化八津唾ト性ヲ同スル所ノ胃液ト其蠕動拡ト ニ由ル処ルニ人ニ在テハ此ノ蠕動拡食物糜爛ノ用ヲナスモノニ非ス唯々ヨリ津唾ト胃液トヲメ食物ト混和融合セシムルト坎ヲメ腸ニ進輸セシムルヿヲ主ル○胃関出前ハ食物進輸ノ急行ヲ節シ胃粘液ハ酷厉ナル飲食ノ刺戟ヲ禦クヿヲ主ル

(註)胃ノ右口即下口ハ飲食ノ胃中ニ於テ胃液ト能ク相融和スルノ始メハ自ラ収閉メ暫リ此ヲ相蓄積シ稍々融和スルニ至テ粘液原名スレリムヲ

按ニ食物ノ糜爛スル者自ラ道ヲ求テ胃関ヲ通リナニ指腸ニ出ツ○飲食ノ胃中ニ停ル其時間ハ詳ニ此ヲ定メ難シト雖モ大氐二時ヨリ四時ノ間ニ在リ○胃ノ空虚ナル時殊ニ空虚ナル了又シテシハ其中少許ノ胆汁アルヲ見ル憶フニ是レ胃ヲ刺戟ノ以テ其運動ヲ催起スルヿヲ主リ且ツ其空虚ナル者饑ヲ感セシムルヿヲ主ルモノナラン其例曾テ一人胆管口ノ胃中ニ在テ貪喰非常ナリシ者有リ又タ一鳥食ヲ貪ルモノアリ此ヲ解剖スルニ胆管口ナニ指腸上端胃ノ右ノ口ニ近迫セリ又タ非常ニ饑ヲ苦ム所ノ患者吐剤ヲ以テ多量ノ胆汁ヲ吐シ以テ世間共若ヲ免ルト者ハ屢々コレアルヲ見ル

第百七十三章

又タ横隔膜ノ運動ト胃中ノ温暖ト倶ニヨク胃中ニ於ケル消化ヲ助クルモノナリ

第百七十四章

胃中ニ於テ食物ヨリ発生スル所ノ气及ヒ蒸入スル処ノ气共ニヨク消化ノ技ヲ助クト云ノ説アリト雖モ必ス然ルモノニ非ス何トナレハ強健ノ胃ニ在テハ气ヲ発スルモノニアラスシテ且

ツ偶々嗅入モノモ直チニ腋気ニ由テ排出スレハナリ

第百七十五章

糜汁（原名ヂーストセルブレ近今穏当ノ字ヲ知ラス故ニ假リニ此ノ如ク訳ス）胃ノ蠕動機ニ由テ十二指腸ニ進輸セラルヽ者ハ膵液ト胆汁トノ混和ニ由テ大ニ変化ヲ受ク

註 世人尋常胃ヲ以テ飲食消化ノ主器トスル者アリト雖モ全ク然ルモノニ非ス唯々是レ真ノ消化ヲナスノ預備器ナルノミ実ニ此預備器アルニ非ンハ真ノ消化ヲナスヲ難カラン

第百七十六章

膵液ハ膵ヨリ分泌サルヽ者ニシテ膵ハ長形扁平ノ腺里児ナリ其組織製造殆ント口ノ唾腺里児ト同ク其負中ノ小稜腺里児ニ於ケル細小池出管ハ各々相合一シ一個ノ池出管トナリ其長ニ従テ出テ胆管ト合メ或ハ然ラス唯々特リ十二指腸ニ入ル十二指腸ノ膜間ヲ斜メニ貫キ其内面ニ口ヲ開リ

第百七十七章

膵液ハ口内ニ於ケル津唾ト其性ヲ同フシ其分離泄出ハ飽満セル胃ノ壁迫糜汁ノ池出管口ヲ刺戟スルトニ催進セラルヽ者ニシテ其用タル能

飲食ヲ融解消化スルヿヲ主ル○古人曾テ此液ニ酸味有リト謂ル者アリト雖モ全ク證拠アルニ非ス

第百七十八章

胆液ハ肝ニ於テ分泌セラルヽ者也肝ハ腹内ニ於ケル最モ大ノ臓ニシテ其位置腹腔ノ上際右側ニ偏シ腹腔内ニ在リ其腹膜ト接スル処ニハ靭帯有テ其靭帯展延メ以テ其外膜ヲナス肝ノ体タル其部位ヲ分テ凸面部トスヒ平面部トスヒ凹面部トスフ凹面部ハ即チ許多ノ浅深凹凸有テ甚タ不平ナルノ処也其実質褐色ノ処ハ無数血管ノ蜂窠状但微ニ由テ相結成セル者ニシテ唯々固有ノ肝動脈ノミナラス尚ヲ亦タ血ヲ門脈ヨリ受ケ門脈ハ一種ノ静脈ニシテ其枝極腹内ノ諸臓ヨリ帰流スル血ヲ受ケ其幹亦タ肝中ニ入テ再ヒ岐分シ弥蔓スルヿ殆ント動脈ノ状ノ如シ又タ肝ヨリ帰流スルノ血ハ静脈下幹ニ入ルモノ也○胆液管ハ肝ノ全質中ヨリ出テ處々ニ於テ枝極互ニ相合接シ漸ク相聚テ終ニ肝管トナル○肝ノ神主ハ甚タ夥多ニシテ亦タ甚タ微細ナリ

第百七十九章

胆ハ肝ノ下面渠裂ノ間ニ在テ肝ト其外膜ヲ共ニスル一個ノ膜嚢也其一端大リ一端ハ漸リ尖テ狹窄トナリ以テ胆腐管ヲ形成シ再ヒ肝管ト合メ以テ総管トナリ以テ十二指腸ニ入ルヤ斜メニ其膜ヲ貫テ口ヲ其裏面ニ開リ也

胆腐ト其管トハ共ニ固有膜トノ二嚢ヨリナルモノニメ固有膜ハ其表面筋様ノ繊維絡ヒ内膜ハ其裏面許ヲノ皺襞アリ

第百八十章

肝中ニ入ル所ノ血液ニ於テ其胆液分離ノ用ヲ成ス者ハ特ニ門脈血也門脈血ハ諸臓中ニ於テ既ニ其用ヲ施レニ供スルニ至ル而レ氏肝動脈モ亦タ少シリ此液分離ノ用ヲ助ケサルニアラス

註 門脈ヨリ肝ニ輸スル所ノ血液ハ腹腔諸臓ヨリ帰流スルノ血ニメ殆ント餘ス所ナキカ故ニ其量甚タ多シ而レ氏亦タ肝ニ於テ胆液製造ニ費ユル所甚タ少カラサルカ為メニ残餘ノ血液ノ其量大ニ減ス故ニ肝動脈ノ血ト共ニ肝静脈ヨリ静脈下幹ニ帰流スルヿヲ得

○胆液分離ニ由テハヨリ血中ノ炭質ト水質トヲ脱スルカ故ニ肝ハ唯々分離器トスルノ

ミナラス尚ヲ亦タ血液浄潔ノ器タルヿ肺ニ等シトス

## 第百八十一章

胆液肝中ニ分泌セラレテ肝管中ニ渓流スル所ノ胆液ハ再ヒ總管ニ湊ル而メ飲食消化ノ時間ハ十二指腸内ニ於ケル其管口開キ且ツ糜汁ノ攻ヲ刺戟スル力為メニコノ總管其液ヲ腸内ニ泄出シ飲食消化セサルノ間ハ十二指腸膜ト總管口ト共ニ萎縮シ且ツ糜汁ノ刺戟ナキカ故ニ其胆液再ヒ攻總管ヨリ胆嚢管ニ由テ胆嚢内ニ入リ此ニ蓄積セラレテ漸ク其水分ヲ吸取サレ以テ稠厚強烈トナル而メ再ヒ消化ノ時ニ当テ腸ノ蠕動ニ壓迫セラルヽト總管ノ刺戟ニ由テ発スル胆嚢ノ運動トニ由テ液ノ腸内ニ溢出スルヿヲ得

## 第百八十二章

凡ソ胆液ハ稠厚ニメ黄色苦味自箇臭アリ其近成分ハ水液列印巴パレイン発爾斯様負ヨリ成リ其遠成分ゴロンドストフハ石灰土ト坑灰塩ミラリルアルカリトヒ少シノ酸負ト窒気ト硫ト炭負ト水負トセ

## 第百八十三章

胆液ノ主用ハ古人ノ臆説ノ如ク糜汁ノ油様部
トヲメヨリ混合セシムルヿ石硯ノ如シト云フ
ノ類ニアラス唯々延レヨリ乳糜ト尿負トヲ分
離セシメテ且ツ其刺戟ニ由テ腸ノ蠕動搖ヲ催
起スルヿヲ主ルモノニメ亦タ其肝中ニ於ケル
分泌ニ由テ腹腔ヨリ帰流スル血中ノ炭負ヲ脱
セシムルヿヲ主ル者也又タ未生胎児ニ於テハ
尚ヲ肝ニ一種ノ用アリ后ノ妊娠蒔未ニ百七十
三章ニ詳明スルヲ見ヨ

百八十四章

脾(ミルト)ハ肝ヨリ小ニメ腹腔内左側ノ上辺腹膜内ニ
位置ヲ繫固サレ其外膜ハ即チ此ノ展延セル腹
膜ト固有ノ膜トヲ以テナリ其内負ハ鞏靭ノ血
脉錆錄セル弛緩ノ蜂巣状組織ニメ帯微青赤色
ナリ血ヲ著大ノ動脉ヨリ受テ門脉ニ輸ス吸収
脉ト神経ト共ニアリト雖モ未タ少シノ泄出管
モコレアルヲ見ス

百八十五章

脾ノ主用古来諸説紛々定ラスト雖モ其中此ヲ
以テ胆液分離ニ隔膜(ミッテル)バール ノ用ヲ成ス者ト
スルノ諸説庶幾キニ似タリ何トナレハ唯是レ
肝ニ輸スル所ノ門脉血ヲメ其量ヲ増スヿヲ主

ル者ナレハナリ

## 百八十六章

腹膜ハ蜂巣状組織ヨリナル者ニメ腹内諸藏ヲ總被ス是レ唯々其質中ニ於ケル動脈末梢ヨリ発スル蒸気（此ヲ腹膜トヲ）ニ由テ内藏ノ外面ヲ滑沢ニメ愈看セサラシムルヿト其展延重襲シ成ル所ノ靭帯ニ由テ内藏ノ位置ヲ繫固スルト（按ニ即チ肝胆等ノ各條ニ就テ見ヨ）（按ニ此考ヘスベシ）其膜内ニ於ケル内藏（子宮直腸ノ屬尚）一分ノ外膜ヲ成スヿヲ主ルノミナラス尚ヲ亦タ腸間膜ヲ形成ス

## 百八十七章

網膜ハ扁平ナル膜嚢ニメ腹膜ノ胃肝脾結腸ニ於ケル外膜ヲ成スモノヨリ形成ス血脈網状ニ蔓延纏絡シ一種ノ蒸気ヲ其中ニ発泄シ栄養強キ体ニ在テハ脂肪ヲ其膜間ニ蓄フ○網膜ニ大網小網ノ別アリ大網ハ胃脾結腸ノ外膜ヨリナルモノニメ小腸ノ前ニ懸垂シ小網ハ胃ト肝トノ外膜ヨリナル○網膜ノ主用ハ脂肪ノ府庫トナリテ以テ腸ノ外面ヲ滑沢シ以ヲメ互ニ愈看セシメテ亦タ腹膜ト愈看セシメス傍ラ温煖ヲ保持スルヿヲ主ル

## 百八十八章

腸ハ其上部下部ト其狹闊大ニ差フ其狹窄ナル
ノ部ハ此ヲ小腸ト云フ寛闊ナル部ヲ大腸ト云
フ其両部ヲ相合スル總長ハ通例全身ノ長ノ五
六倍アルモノナリ

## 第百八十九章

小腸ハ其負胃ノ如ク四襲ノ膜ヨリ成ル即チ其
一外膜是レ腹膜ヨリ展延シ成ル其二肉膜是レ
長ニ縱フ筋纖維ト輪狀ノ筋纖維トヨリ成ル其
三ハ固有膜其四ハ内膜也内膜ハ血絡ノ至微末
梢ヲ以テ成レル小把子（原名フロッキー又訳名ノヨウ可キモノヲ知テス直訳メ小把子ト訳後考ヲ俟ツ）有テ其中ニ乳糜管口開ケリ而メ
此内膜ハ粥糜ノ微ナル皺襞ヲナセルカ故ニ此
ヲ延長スル中ハ必ス固有膜ヨリ長ナリ○其膜
負中復ル所ノ動脈ハ甚タ粥糜其末梢ヨリ腸液
ヲ分泌シ亦タ粥ノ形液狀里兒有テ常ニ形液ヲ
裏面ニ塗布シ神至又タ粥糜ニメヨリ其神至鰌
動性ヲ逞フス

## 第百九十章

小腸ノ始メ胃ニ接スル所ノ小部膵液ト胆液ノ
其中ニ入ル処ヲ十二指腸ト名ク其餘皆總テ此
ヲ回腸ト名ケ再ヒ此ヲ分テ其回腸ノ上部稍々
赤色ヲ帯フルノ処ヲ真ノ回腸ト云フ而メ其末

端ハ右ノ腸骨内ニ於テ旨腸ニ終リ孔ヲ結腸ノ障膜間ニ閉ク

## 第百九十一章

十二指腸右腎靱帯ト肝靱帯ト（俱ニ腹膜ヨリ展延シ成ル）ノ展延セルモノヽ此ヲ被包スルニ由テ其位置ヲ定メラレ回腸ハ腸間膜ニ由テ其位置ヲ定メラル○腸間膜ハ腹膜ヨリ展延セル重襲ノ膜ニメ腸ノ全長ニ従テ此ヲ展襞被包シ所謂ル腸間膜或里児ナル者其間ニ位置ス

## 第百九十二章

糜汁ノ胃ヨリ小腸ニ入ルヤ唯々膵液胆液ノ混和ニ由テ変メ体中固有ノ液ノ如キ性ヲ得其合有スル所ノ粮液（即乳糜ノ）遂ニ胆液ノ力ニ由テ分析セラレ小把子（出テ前）中在ル所ノ乳糜管ヨリ吸収セラル○蠕動機ハ糜乳汁ノ刺戟ニ由リ殊ニ胆液ト混セル其残滓ノ刺戟ニ由テ膜質内ノ筋織維ヨリ発起スルモノニメ其用タル糜汁ヲメヨク腸液ト融和セシメ乳糜ノ乳糜管中ニ入ル運動ヲ催進シ殊ニ糜汁ノ残滓ヲメ腸ヨリ大腸ニ進輸セシムル事ヲ主ル○小腸裏面ニ滲出スル粥糸ノ粘液ハ知和ニ由テ其性ヲ変スルノミナラス亦タ其全裏面ヨリ分泌スル腸液ノ混和ニ由テ変メ体中固有ノ液ノ如キ性ヲ得其合有スル所ノ粮液（即乳糜ノ）遂ニ胆液ノ力ニ由テ分析セラレ小把子（出テ前）中在ル所ノ乳糜管ヨリ吸収セラル○蠕動機ハ糜乳汁ノ刺戟ニ由リ殊ニ胆液ト混セル其残滓ノ刺戟ニ由テ膜質内ノ筋織維ヨリ発起スルモノニメ其用タル糜汁ヲメヨク腸液ト融和セシメ乳糜ノ乳糜管中ニ入ル運動ヲ催進シ殊ニ糜汁ノ残滓ヲメ腸ヨリ大腸ニ進輸セシムル事ヲ主ル○小腸裏面ニ滲出スル粥糸ノ粘液ハ知

寛脆敏ナル腸ノ裏面ヲメノ糜汁内ニ混スル酷厉物ノ刺戟ヲ免レシメ且ツ其進輸ヲメ軽易ナラシム○内膜ノ皺襞ハ自ラ延ヒテ其囲ヲ寛クシ以テ糜汁進輸ノ迅速ニ過クルヲ節ス○凡ソ糜汁ノ小腸ヲ通ルヤ其乳糜ヲ矢フノ度ニ従テ漸ク其褐色ニメ臭気アル物トナリ終ニ変メ屎トナルニ至ル

## 第百九十三章

大腸ニ二個ノ部分アリ一ヲ結腸ト云一ヲ直腸ト云其結腸ノ上端小腸ノ終ル所ノ処ニ於テ一個ノ盲嚢ヲナス処アリ此ヲ盲腸（盲忘脱干）ト云其盲腸ニ一個ノ懸垂スル者アリ此ヲ虫様垂ト云其内粘液ヲ分泌スルイム（ホルレ近）嚢ヲ充タス又タ盲腸内ニ於テ小腸ノ終端ヨリ障膜ヲ形成ス此ヲ結腸ノ障膜ト云再ヒ亦タ此結腸ヲ分テ三部トシ以テ上行部ト云ヒ横行部ト云ヒ下行部ト云フ○結腸ニハ自己ノ腸間膜アツテ其実質ハ小腸ノ如ク四襞ノ膜ヨリ成ル其内膜亦タ吸収管口有ト雖モ而レモ小腸ノ如ク小杷子（出前）ヲアルヿ无シ此腸ニ於テモ血脈神経共ニ復行スルヿ甚ダ多ク其内面亦タ腸液ト粘液トヲ分泌ス

（註）大腸ニ於ケル吸収管ハ其数小腸ニ於ケル

モノヨリ甚タ少シ凡ソ大腸ハ唯々食物中不
用ノ残滓ヲ貯蓄スルヿヲ主ル者ニメ栄養ノ
用ヲ助クルハ其主用ニアラス若シ大腸ノヨ
リ大便ヲ貯蓄スルヿ有ルニアラスンハ大便
不断常ニ下利メ其汚穢如何トモス可ラサル
ニ至ル可シ

第百九十四章

直腸ハ結腸ト相連続セルモノニメ其位置脊膜
ノ外ニ出テ其下部ニハ外膜ナク唯其内膜他部
ニ於ケルモノヨリ強ク其下口ニ至テハ二個ノ
括約筋ト二個ノ挙肛筋トヲ備フ坎腸ニ及テモ
腸液ト粘液トハ共ニ高ヲ分泌セラレ尚ヲ且ツ
多クノ吸収管アルヲ見ル而メ其下端口ハ即肛
ニメ其諸膜ミナ其部ノ外被内ニ終ル

第百九十五章

食物残滓ノ小腸ヲ通過シ終ル中結腸ノ障膜出前
ヲ穿チ盲腸ニ入ル○此障膜ノ用ハ其残滓進輸
ノ節スルト其逆行ヲ索クフヲ主ルモノニメ実
様垂ヨリ分泌シ出スル所ノ粘液ハ盲膜ヨリ結腸
ニ進行スル残滓ノ動ヲ、メ軽ナラシムルフヲ主
ルモノナリ

第百九十六章

其殘滓ハ盲腸ニ於テモ結腸ニ於テモ吸收管ニ由テ其液ヲ棄ルヽ了此部ヨリ滲出スル腸液ノ量ヨリ多シ故ニ此部ニ於テハ其殘滓著ク凝固ス○此部ヨリ滲出スル粘液ハ其表面ヲ滑沢ニメ以テ蠕動機ニ進輸セラルヽ屎糞通過ヲ便ニス

第百九十七章

凡ソ屎糞ハ腸ノ下部ニ來ル了愈〻深ケレハ其変メ敗汚穢ノ者トナル了愈〻甚シ

第百九十八章

直腸ニ於テハ屎糞中ノ水液ヲ吸收スル了最モ強リ腸液粘液ノ此ヲ滋潤スル了ヨモ亦タ多シ

第百九十九章

屎糞直腸ノ下端ニ來タル中ハ其重力ト酷厲性直腸表面ヲ刺戟スルニ由テ催利ノ感ヲ発シ此時ニ当テ肛ノ括約筋意ニ隨テ弛閑シ横肩膜ト股筋ト俱ニ意ニ隨テ此ヲ壓迫シ以テ直腸ニ於ケル横纖維（ドワルスヘーゼル）運動ヲ催起シ回テ以テ屎糞ヲ外ニ排出スル了ヲ得ル其排出セラルヽニ当テヤ直腸ノ共ニ欲出セラルヽ力故ニ肛門ヨク緊縮メ以テ坎ヲ引収ス○凡ソ腸ノ蠕動機ハ固ヨリ不隨意ナリト雖モ其動復タ神至ニ関

係スルヿ亦タ尚ヲ他ノ不隨意動ナル動筋ニ差ワス

第六回　論乳糜吸収及諸吸収之機動

第二百章

小腸内ニ於テ糜汁ヨリ分離スル養液（即乳糜ト）ハ其色白メ乳汁ノ如ク其味甘鹹ナリ是レ食物ト消化液（按ニ津唾胃液膵液ノ總称也）トノ混和ヨリ成ル

第二百一章

此液ハ小腸裏面ニ於ケル小把子（前出）ヨリ乳糜脈ニ吸収セラル乳糜脈ハ諸吸収脈（按ニ即水脈ト）中ニ於ル最大緊要ノモノタリ

第二百二章

凡ソ吸収脈ハ其質薄膜ヲ以テ成リ其膜内障膜ヲ備フルモノニメ体中諸部ニ弥蔓レ其原ヲ各々部ニ資テ枝椏漸ク合レ幹トナリ究モ静脈ノ状ノ如レ其用タル各部ノ空際及ヒ表面ニ分離セラルヽ液ヲ吸入メ此ヲ幹ニ送リ血中ニ輸スルヿヲ主ル其微乳糜脈ニ於テハ固ヨリ著リ其他各部ヲ不断分離スル液ノ常ニ増減ヲ為サルモノ浴湯及塗擦質薬ノ吸収其脈内ニ於ケル障膜製造形状及ヒ試ニ坎脈ヲ結止スルニ其部ヨリ枝梢ノ方ハ膨脹レ幹ノ方ハ萎縮スル等ミナ

以テ明カニ此ヲ證スルニ足ル○尚且ツ吸収脈ハ凝体ヲ吸収スルモノ也其微茴草ヲ以テスル
ノ試験及ヒ乳歯メルキドノ根株自ラ消散スルモ
ノ老人ノ骨ノ瘦テ細クナルモノ等以テ此ヲ證
スヲ可シ

(註)吸収脈ハ亦タ此ヲ水脈ト名クル者ニメ其
血脈ト違フ所ハ枝桠血脈ノ如ク草行セス通
例ニナ[illegible]ンテル区ヲ以テ相合接シ且ツ其寛
狭定リナリ屢々一管ニメ他枝ノ分合ナク独
リ著ク寛ソトナル處アリ著ク狭トナル所ア
リ○水脈ハ諸部ニ於テ他ノ水脈枝ト互ニ相
合接スルモノ甚タ多シ故ニ一部ノ液ヲ吸収
メ此ヲ血中ニ輸スルアリ直ニ他部轉輸スル
ヲ得ルモノ有リ以テ病轉移ノ甚タ成リ易キ
真理ヲ知ル可シ○水脈ノ実質ハ至薄透亮ニ
メ甚タ軟弱ナルニ襲ノ膜ヨリ成ル者ニメ其
内膜ハ殊ニ最モ薄ク裏面ニ粉末ノ障膜ヲ形
成ス

第二百三章

凡ソ吸収脈内ヲ流通スル所ノ液ハ通例澄明透
亮ニメ白黄色也而レ氏其脈ノ起ル部ノ種々殊
ナルニ従テ種々百般ナルモノ也今茲ニ言フ所

ノモノハ即飲食消化ノ腸間ヨリ出テ其吸収管脈ヲ通スル所ノモノニシテ即乳糜也

第二百四章

乳糜ノ吸収ト進輸ニ於ケル運動ハ一ニハ吸収脈ノ触動性ニ由テ一ニハ器械性亦タ諸筋ノ運動動脈ノ搏動横膈膜ノ低昂大ニ其運動ヲ補助スル者ナリ

(註)古来未タ曾テ水脈管中ニ神至アルヿヲ見ズト雖モ而レモ其感覚性ノ最大ナルヿハ予輩曾テ屢々実験シ知ル所ナリ其験生活セル軟類ニ於テ一部ノ水脈ニ触レテ此ヲ刺戟スレハ瞬時間乍チ率箱ノ動ヲ起シ其内チ流通スル所ノ液ヲシテ流動迅速ナラシムル如験殊ニ乳糜脈ニ於テ最著大也○此ノ如ク感覚性甚タ強シト雖モ其液進輸ノ運動自然ノ状態ニ在テハ甚タ緩徐ナル者也(此ノ感覚性ハ即チセシ所ノ隠的ノ感覚性ニ属ス十二章ニ於テ命説)

第二百六章

吸収脈内ノ液ハ其幹ニ来ルノ前必ス水家里兒ヲ通過ス此家里兒乳糜脈ニ於テハ腸間膜内ニ在ルカ故ニ如チ腸間膜家里兒ト名ク是其形チ扇ニシテ円其中較著ノ動脈在テ水脈ハ許多ニ

分レテ網状ヲナシ(分泌)ヲ此ニ資ル○此網里見内ニ在テハ其液ノ運動大ニ遅渋セラレテ其動脈末稍ヨリ滲出スル液ト混合シ以テ血液同種ノ性ヲ得ルニ至ル

## 第二百七章

全身各部ノ吸収脈ニナ前章ニ云ルカ如キ復行ヲ以テ多クハ其大幹ニ渓ル大幹ハ即チ所謂ル胸管ニメ是レ腹腔内ニ於ケル諸吸収脈ノ渓會ノ一管トナリ胸腔ノ後部ヲ上リ左ノ鎖骨下静脈ニ終ル所ノモノ也(梅ニ是ハ謂乳糜管ナリ)其静脈ニ入ル孔ハ一種ノ障膜懸テ以テ血液ノ此管ニ入ルヲ防遮ス唯々上部ノ右体ニ於ケル一二ノ水脈ハ此大幹ニ未ラスメ血ニ右ノ頸静脈ニ終ル

## 第二百八章

吸収脈核能ハ此ヲ總フルニ身体栄養保護ノ為メト過剰液尊泄ノ為メト共ニ最モ大緊要ノ用ヲ成ス者也

# 第七回　論血液製造(ベイリングフュンフテットブルード)

## 第二百九章

凡ソ体中ノ血液ハ不斷凝体ヲ栄養スルト諸液ヲ分泌スルトニ由テ其量ヲ耗失ス故ニ吸収脈其栄養ノ液ヲ吸収シ来テ坎ニ加入以テ常ニ此

ヲ補充ス

第二百十章

此補充ヲナスノ液ハ内外諸部ノ表面及ヒ空隙ヨリ吸収セラルヽ処ノモノニメ其最大ナルモノハ腸ヨリ進輸シ来ル所ノ乳糜也

第二百十一章

体外ニ於ケル異種ノ物質ヲ取テ其原質ノ混和ヲ変セシメ製造ノ以テ血液トナス其拠タル甚ヲシ一ニハ腸管（粘液）内ニ於テ体中固有ノ液（即津唾胃液胆液）ト融和スルニ由リ一ニハ吸収脈ノ各々部ニ於テ或ハ塊節トナリ或ハ曲抗ヲナシ或家

里児ヲナスニ由テ其流通後徐ナルヿヲ得ルニ由リ一ニハ水或里爾（即腸間膜或里児）ニ於テ血水（按ニ即汁乙）ノ動脈末梢ニヨリ加ルニ由テ一ニハ胸管ヲ上ルノ間ニ於テ体中各部ノ液ヲ吸収諸脈ヨリ得ルニヨリ一ニハ血中ニ移ルノ量甚タ至微ノ滴入ニメ徐ツ後徐ナルカ故ニヨリ血液ト相混合スルニ由リ一ニハ血ノ心肺脈管ヲ循環流通スルノ間ヨリ此ト精蜜ノ融和ヲ得ルニ由ル

（註）血中ニ入レル乳糜ノ化成ハ亦タ肺ニ於テ大気ニ暴融シ以テ過度ノ炭質ヲ脱シテ酸化スルニ由ルモノナリ

第八回

## 第二百十二章　論凝体之栄養（ノーチンゲルデル。ステデーレン。イン。フエツト。ベーツンデレン）

凡ソ凝体ハ漸次ニ消耗メ漸次ニ整復スルモノ
也トスノ説古来或ハ是トシ或ハ非トシ毀傷セ
ル部ノ愈復スル実験ニ原イテスフ唯栄養ハ各
部ノ固有ノ栄養性ナルモノ有ルニ由ル者ニメ
敢テ筋触動性（スピパール）（プリツケ）ルル（ヘイド）神至触動性モ
此力ヲ有スルニ非スト諸家紛々定論アルナシ
而レ𪜈体中ニ於テ既ニ老癈セル部ハ常ニ吸収
脉ヨリ取去テレテ再ニ血液ヨリ此ヲ整復スル
ヿハ固ヨリ昭々乎トメ確乎タル而ナリ

（註）凝体ニ於ケル種々ノ膿瘍ニ於テ自然ノ良
能ヨリ其実質ヲメ屢々著ク消耗セシムルヿ
アルノ理ヲ考究セハ誰レカヨク筋神至両カ
ヲ有スルノ部モ不断其栄養アルヿヲ疑フモ
ノアラン

## 第二百十三章

血液ノ凝体ヲ栄養スルヤ全身ニ弥蔓セル動脉
ノ極微末梢ヨリ凝体トナル可キモノ（即繊維質）分泌
ラレテ漸ク凝固シ其水分ハ吸収脉ニ取去ラル
由テ血中ノ酸質大ニ其量ヲ失フ

## 第二百十四章

各部ノ疑体ヨリ各々百用ノ液ヲ血中ヨリ取ル
モノハ憶フニ一ニハ其分析術様ノ交カセミセフルワ
カップニ由リ一ニハ各部ニ於ケル動脈末梢ト
其水脈トニ固有ナル触動性ニ由ル者ナル可シ

## 第二百十五章

凡リ生活ヲ有スル部ハ毀損スルヿ有レハ殆リ
必ス整復スルカヲ得ルモノ也殊ニ不具ノ動物
オンホルコーメンシール ニ在テハ其復スル所ノ部却テ生
机旺盛ナルヿヲ得○既ニ如リト雖モ人ニ在テ
ハ七情ノ栄養ニ感動ヲナスヿヲ着レキヲ以テ
此ヲ見ルニ神至液亦タヨリ此機能ニ関ルモノ
ナリ

## 第九回　論動物之温暖（ジーとーキワルツム）

## 第二百十六章

人身及ヒ具足ノ動物オンホルコーメンシール保有スル所ノ
温暖ハ外気寒暖ニ関係スルモノニ非スシテ其発
動流凝ニ体ノ摩盪ニモ疑体互ヒノ摩盪ニモ共
ニ関係スルヿ甚タ少シ（カラウホル氏説）流家説
ニ云活物ノ温暖ハ唯肺ヨリ発スルモノニシテ是
レ夫気中ノ酸液血液ト結合スルカ為メニ其含
ム所ノ温度自ラ溢散スルヨリ起ルモノ也必説
亦タ全ク偏セサル処无キニ非ス凡リ動物温暖

ノ起原ハ血液混和ノ変ヨリ発スルモノニメ即
諸液分泌及ヒ凝体栄養ノ為メニ温負盛散スル
コヨリ起ルモノナリ故ニ温暖発動ノ域ニ於テ
ハ神経ノ運用最モ大也

(註)吸呼ハ活物温暖起原ノ主一タルコト確乎タ
リ夫吸気ニ由テ酸負ノ結合スル豈多量ノ温
負盛散セシメザランヤ而シテ又呼気ニ由炭
酸負ノ気トナリ散スルヤ其温負ヲ奪フコト亦
タ少カラシム○後栄養モ其起原ヲ成スモノ
タルコト疑ヒナシ何トナレハ全身諸部ニ於テ
血液ノ変メ凝体トナルヤ必ス温負ヲ盛散セシ
ム可ケレハ也而シテ其凝体ノ吸収シ去ラル
ル也変メ流体トナルヤ亦タ其温負ト結合スル
コト少カラス此ノ如クシテ其温負ノ一取一奪アル
カ為メニ体中温暖常ニ其度ノ増減ナキコトヲ
得ル而シテ其盛散スル温負ハ高ヲ多キカ故
ニ若シ高ヲ他ノ低ヲ導去スルモノ有ルニ非
レハ其蓄積終ニ体ヲメ焼滅セシムルニ至ル
可シ是故ニ造物者此害ヲ避ケシメンカ為ニ
別ニ表皮ノ蒸気ナル者ヲ賦與シテ以テ其過
度ノ温負ヲ導キ去ラシム是ヲ以テ今蒸気ハ
体中温暖ヲメ不変ノ常度ヲ得セシムルノ一

掬ナリトス

第十回　論表皮之蒸発気

第二百十七章

蒸発気ハ前ニ言ヘル皮脂メール（ホイトス）ト全ク異ナルモノニメ全身外皮ノ汗孔ヨリ発ス汗孔ハ即皮ニ布蔓セル動脈支梢ノ末端ヨリ他ナルモノニアラス

第二百十八章

健康ニメ静居スル体ニ於テ汗孔ヨリ発スル蒸気ハ気状ノ水ニメ殆ント臭ル可カラス其負水液及ヒ体中ニ於ケル揮発負ヨリナル其揮発負ハ各人各自ニ差ヒ亦タ同一体ニ於テモ時ニ須ヲ大ニ差フ

（註）イユリ子欲チンタレイ（人名）両子ノ実験ニ従フニ皮モ亦タ炭酸気ヲ排泄スルモノ也故ニ肺若シ疾病ニ由テ其用ヲ妨ケラル、ヿアレハ皮ヨク此ニ代テ其機用ヲナスヿヲ得ル

第二百十九章

蒸発気ノ各具則其甚タ闊大ナルカ為メニ発スル所ノ負ノ量甚タ大ナリ然ヒ人々其血中蒸気トナル可キ負ヲ含ムノ多少アルト血行ノ遅速アルト合織ノ後緊アルト且ツ常ニ外表ヨリ吸

収シ取ル所ノモノヲ多キカ故ニ其量ヲ詳密ニ定了スル不能ス（拙ニモシ外表ヨリ吸収シ取ル而ノモノナケレハ飲食ノ量ト大小便ノ量トヲ等計セハ蒸気ノ量自ラ定等スルヲ得ベシ）

## 第二百二十章

蒸発気若シ強ク増加メ皮表ニ滴流スルニ至ル時ハ此ヲ汗ト名ク又タ疾病ニ由テハ此汗孔ヨリ血液ヲ溶崩スルヲ屢々次アリ

## 第二百二十一章

蒸発気ノ主用ハ血中ニ於ケル過度ノ水分ト揮発質トヲ導泄スルニ在リ

（註）手力動物ノ温暖ノ條ニ於テ説ケル所ノ主用ノ外蒸発気尚ヲ皮表ニ復行セル神至ヲ温潤メ軟和タラシムルヲヲ主ル次用亦タ敢テ少シトス可ラス

## 第十一回　命脂肪分離

## 第二百二十二章

體中諸部ニ於テ其蜂巣状組織内ニ脂肪ナル者充塡ス是レ白色ナル油ニメ水質ト少シノ窒気トヨリナル者ニメ不分明ノ核動ヲ以テ動脈末梢ヨリ分泌セラレ漸次ニ吸収管ヨリ取去ラル

（註）脂肪ハ一種ノ活物油ニメ単ニ動脈衣膜ニ於ケル針眼ヨリ滲透シ出ツルモノ也

第二百二十三章

凡ソ脂肪ハ諸空隙ヲ充塡シ諸部ヲ滑沢ニメ壓迫ヲ免レシメ損傷ヲ防禦スルヿヲ主リ骨空内ニ於ケル脂肪（即骨髓）其色ノ帶褐色ナルト稀釈ナルヲ以テ尋常ノ脂肪ト殊也トス其用骨ヲメ軽カラシメ且ツ破碎シ易カラサラシムルヿヲ主ル

（註）脂肪ハ亦タ諸動物ニ於テ其胃腸空虛ナル中ハ吸収脉ヨリ血中ニ輸セラレテ以テ栄養ノ用ヲ補給スルモノ也

第十二回　論小便分離排泄

第二百二十四章

小便分离ノ器ハ両個ノ腎臓ニメ其位置腹腔内腰部ノ脊膜外脊髓ノ両側ニ在テ其形豆ノ状ノ如ク凹縁ト凸縁ト百リ凹縁ニハ腎血脉ト腎盂ト繋着シ其全面蜂巣状組織ヲ以テ被ハレ其蜂巣状組織ハ多量ノ脂肪ヲ含蓄スヌ々別ニ固有膜ナル者有テ其質ヲ固包ス

第二百二十五章

腎ノ実体ハ二種ノ質ヨリ成ル其一凹縁ニ近通スルノ部ハ其色 venous ニメ其質多クハ尿管ノ合織ニナル者内質ト云尿管ハ許多相會聚メ数束トナリ凹縁ニ近ヨルニ迄テ仮々合束

レ終ミ許多ノ微小粒（一名乳頭）ニ終リ其口ヲ腎盂内ニ開ク其ニ凹縁ニ近通スルノ部ハ夫色帯赤ニシテ其質多クハ血脈ノ合織ニナル故ヲ外質ト云其血脈ハ尿管會束ノ間ヨリ来タルモノニシテ尿管ハ其原ヲ故脈梢ヨリ取ル

第二百十六章

両腎ニ入ル処ノ動脈大幹ノ大支ニシテ左腎ニ入ル処ノモノハ右腎ニ入ルモノヨリ短也是動脈大幹ノ位置少ク左ニ偏スルハ也其腎ニ入ルヤ左右共ニ凹縁ノ処ヨリ分テ数支トナリ其内質内ニ入リ尿管會束ノ間ヲ通過シ外質ノ部ニ至リ益々分ヲ至微ノ至細トナリ相錯綜合織シ其終リ微小塊ニ至ルピロロムピルス又タ其剩血ヲ帰流セシムル腎静脈ハ左右共ニ凹縁ヨリ出テ静脈下幹ニ合ス静脈下幹ハ亦タ少ク右ニ偏スルカ故ニ腎静脈ハ左ニ於ケルモノ梢右ニ於ケルモノヨリモ稍々長シ○其他腎神至ナルモノ有リ腎吸収脈ナルモノアリ

第二百二十七章

前章挙ル所ノ微小塊ヨリ無数ノ尿管起ル尿管ハ外質ヨリ内質ニ入リテ漸ク相合束シ終ニ許多ノ小乳頭ヲ形成スルヿ前ニ云ルカ如シ其小乳

頭ハ後タ各々一種ノ渦斗状ナル小膜管ヲ以テ
囲包セラル此膜管此ヲ小盃ト云フ此小盃ミナ
後タ一ツニ大ナル漏斗状ノ膜ヲ以テ囲マル即是
腎盃ナリ

第二百二十八章

両腎上名一個ノ或里兒状ナル褐色ノ小体アリ
即副腎是小児ニ在テハ大人ニ於ケルヨリ大ナリ

第二百二十九章

腎盃ハ軟ク狹窄ト為リ其終リ輸尿管トナル輸
尿管ハ細長ノ脉管ニノ其囲繞有膜神経ト筋織維
トヲ備ヘ其裏面ニ多リ粘液ヲ塗布ス其腎盃ヨ
リ出ルヤ膀胱後部ノ面側ニ向ヒ下リ来テ其膜
ヲ斜メニ貫通ス

第二百三十章

膀胱ハ盃骨内腹膜ノ外ニ位置スル一個ノ膜嚢
ニノ其上部ノ円ナル処ヲ膀胱底ト云其下部ノ
少クメ将ニ尿道トナラントスル処ヲ膀胱頸ト
云フ○其囲有膜ハ厚クノ神経甚タ多キ蜂巣状
組織ヲ以テ成リ其裏面ニ至薄ノ内膜アリ此内
膜ハ粉多ノ粘液ヲ分泌ス又囲有膜ノ外面ニハ
筋アリテ其織維ノ條理ハ縱ナルアリ横ナル有
リ斜ナルアリ○又膀胱頸ノ下部ニハ此ヲ囲繞

スル恥纖維有テ以テ堅カ拮約ヲ成ス

第二百三十一章

尿道ハ膀胱頸下ニ連テ其負神至ヲ尋キ固有膜ト粘液ヲ尋キ内膜トヨリ成ルモノニメ恥骨間ヲ通過シ男子ニ在テハ陰茎ノ端ニ終リ妊人ニ在テハ廷孔下ニ其口ヲ開リ

第二百三十二章

小便ハ腎ノ外負中ニ於テ動脈ヨリ尿管中ニ分泌セラレテ其内負ノ會束ヨリ小乳頭ニ湊リ小盂ヨリ腎盂ニ出テ腎盂ヨリ輸尿管ニ移リ以テ膀胱内ニ進輸セラル

註 凡ソ体中諸分泌ニ於テ其概単一ナルヿ小便分泌ニ勝ルモノナシ唯是レ単一ノ漉過ナルノミ今試ニ腎動脈ヨリ唧筒ヲ以テ水ヲ射入スルニ其水直ニ細絡ヲ通テ尿管ニ来ヿ甚タ容易ニメ少シノ労モ用ユルヿヲ要セス以テ腎製造ノ漉過ニ適当セルモノナルヿ推知スベシ○又タ病症ニ於テ此ヲ見ルニ産幸ノ症ニ在テハ其小便常ニ透澄ニメ魚色殆ント无味也是レ産幸ニ由テ動脈末梢狹窄スルニ由ルモノニメ其相反スル弛緩ノ症ニ在テハ小便濃厚ニメ滓澱甚タ尋シ亦タ以テ其分泌

掛ノ單一ナルヿヲ徵スルニ足ル

第二百三十三章

腎動脈ハ甚タ著大ナルカ故ニ小便分泄ノ量甚タ過多ナレトモ其量常ニ左腎ニ於ケルモノハ右腎ニ於ケルモノヨリ多シ

註 此命又以テ單一ノ漉過ナルヿヲ徵スルニ足ル何トナレハ左腎動脈ハ短リメ動脈大幹ニ近キカ故ニ其力ノヨク達スルヿヲ得テ漉過ノ勢ヒ強ケレハナリ

第二百三十四章

小便ハ腎ニ於テ分泄サルヽノ外亦タ別ニ胃腸ヨリ直チニ膀胱ニ至ルノ隱道アリトスノ説アリト雖トモ未タ確實トシカタク認リ難シ曰ク飲食スル所ノモノ臭色及ヒ血腸ニ水銹ヲ以テ入ルヽ所ノ油等ノ血ニ小便中ニ出ル者另ニ隱道ノ在ルニ非スノ何ソヨクコノ少時間乳糜諸道ヨリ血脈ヲ歷テ未ルヿヲ得ン是レ腸ノ水脈ト腎ノ水脈ト明カニ將合スル処アルニ由ルヿルニ亦タ曾テ生活セル一丈ノ輸尿管ヲ結ヒシ其膀胱ヲ空虛ニナスニ三時間ニノ膀胱内小便ノ瀦溜セラルヽヲ見レヿアリ

註 而レトモ憶フニ又タ胃腸内ニ於ケル一二ノ

液假令真ノ尿ニ非スト雖モ水脉ニ憑テセハ
何ソ直ニ膀胱ニ輸セラレサルノ理アラン

第二百三十五章

膀胱内ニ出ル所ノ小便ハ暫ク其内ニ溜留メ漸
ク充積ス此時輸尿管及ヒ膀胱表面ニ於ケル粘
液ヨリ其酷厉ノ刺戟ヲ防禦シ膀胱頸ニ於ケル
括約筋ヨク其洩泄ヲ拒禁ス

第二百三十六章

其膀胱内ニ充積スル小便適宜ノ量ヲ得ル件ハ
（大人ニ在テハ大抵一ヒヨリニヒニ至）其膜ヲ膨脹メ其頸ヲ壓迫シ
以テ不快ノ感ヲ起シ由テ膜質ニ於ケル筋纖維
ニ随意ノ率縮ヲ発セシメテ尿道ニ絞出セラル
其絞出ハ後タ大ニ横隔膜ト腹筋ノ補助ヲ假ル
者也而メ其既ニ尿道ニ出ル者ハ男子ニ在テハ
後々進尿筋ノ力ニ由テ其排泄ヲ進メラル

第二百三十七章

小便ハ澄明ナル蒲桃酒様ノ液ニメ鹹味固有ノ
臭気トアリ其質纖維質ホスホルヘーセレニトト
尿塩（コレ又ホスホル酸ト揮発ルモノ也）揮発抗塩（原名ヲリフナヘ
ミ子ラレーレラトリウト）ト少シノ食塩トヲゲスケヒ塩ノ
溶化セル水液ヨリナルモノニメ其ノ原質ハ血
ノ原質ト異ナルヿナク唯其合和ノ異ナルノミ

而レモ其合和ハ亦タ各人ト各時ニ從テ大ニ差別アルモノナリ

第二百三十八章

小便分膏ハ体中過剰ノ水液ト土質ト塩質ト燃質トヲ排除スルカ故ニ身体保護ノ用ヲ於ケル甚タ腎要ナル者也

第二百三十九章

副腎ハ其主用未タ詳カナラス欲脳ヘルヒンウーズノ胎児ニ於テハ屢々此副腎ノナキ者ヲ見ル

第十三回

第二百四十章

此機能タル是レ人身機動ノ力二部ニ属スルモノニシテ即是レ人体ノ以テ其始ヲ資ル所ナリ

第二百四十一章

夫レ人身資生ハ男女両性ノ交媾ニ由テ女ヨリ男ニ孕マサレ以テ胎児ヲ女体ニ生スルヨリ成ルモノニシテ爾後其児漸ク生育増長シ能熟スルニ至テ始メテ分娩ス

第二百四十二章

凡リ陰具ハ男女其別大ニ異ナルモノ也偶々一体男女ノ両陰具ヲ兼備スルモノ有ト雖モ唯コレ稀レニ不全成ノ動物ニ在ルノミニシテ全成ノ

動物ニ於テハ是レ有ルヿナシ偶々有ルモ常性ニ非ス殊ニ人身ニ在テハ古未未タ曾テ真ノ半男女アルヲ聞カス

第二百四十三章

陰具ノ外尚ヲ大人ニ在テハ男女別甚タ殊シ即凡ソ男子ハ女子ニ比スルニ尋常其体長ク其蜂巣状組織堅ク其神経大ク其筋實ヲ其皮革強硬ニシテ毛多ハ女子ニ於テハ毛髪長シ其骨大ニシテ粗糙其胸間廣ク其盂即腹骨内狹ク其鎖骨大ニ屈リ其胸骨假肋共ニ長ク其喉頭大ナリ又タ女子ハ其体質ノ弛緩ナルカ為メニ多血トナリ易ク亦タ肥満シ易シ其薄弱ナルカ為メニ能動性甚タ強シ

第十四回　論男子之分種機能

第二百四十四章

男子ノ陰具ハ諸液ヲ製造シ此ヲ貯蓄シ以テ終ニ泄出スルニ適スルモノニシテ其機能タルヿ壯ノ時ヨリ老成ニ至ルマテ間断ナク相續モノナリ而シテ其器械ハ睪丸ト輸精管精系共ニ此ニ係ル精嚢ト攝護腺里兒ト陰莖トヲ是ナリ

第二百四十五章

両個ノ睪丸ハ股腔ノ外陰嚢ノ内ニ在テ其外面通被ノ他血絡腺多ニシテ彈力強キ固有ノ内膜覆

ハル此内膜ハ即チ二個ノ嚢膜ニメ其互ニ相接スルノ処ハ合着メ中隔ヲナス此中隔ハ即陰嚢外面ニ見ル、縫際ナルモノ是ナリ睪丸ハ此両嚢内ニ在テ精系ニ繫レリ精系ハ精動脉精静脉ト輸精管ト神経トヲ以テ成ルモノニメ股腔ヨリ左右ノ股輪ヲ貫キテ陰嚢内ニ垂下シ両ヲ睪丸ト共ニ各一個ノ莢膜ヲ有ス其莢膜嚢ノ蜂巣状組織ハ精系ノ固有膜ト睪丸ノ固有膜トヲ形成シ其莢膜外面ニ睪丸筋ナルモノ囲着セリ

註 睪丸筋ハ別種固有ノ筋ニ非スメ唯股ノ内外横筋ノ展延シ来タルモノヽミ

第二百四十六章

睪丸ニ両種ノ別アリ一ヲ真睪ト云ヒ一ヲ副睪ト云フ睪ハ其質種々ニ幸縮セル至細ノ精液管ヨリ成リ血絡相錯綜シテ織成シ睪副ニ近接スルニ従ヒ其精液管漸ク相聚會合一メ数條ノ細管トナリ出テ副睪ノ実質ニ入リ仮タ種々ニ幸縮メ其質ヲナシ終ニ相會合メ一管トナリ出テ輸精管トナル輸精管ハ上テ精系ニ合シ股輸ヲ貫テ股腔内ニ入リ終ニ精嚢ノ池出管（按ニ即射精管ト）合シ尿道ニ終ル○精嚢ハ膀胱ノ後面下部ニ在

ル膜嚢ニメ膜内区々相分レテ小室ヲナシ三ナ
泄出ニ向テ漸ク狹窄ス其孔ノ尿道ニ終ル處々
ハ小ニメ長ク隆起セリモノアリ此ヲ雞冠ト云
括約ヲ主ルノ鐵維ヲ備フ

第二百四十七章

尿道ノ起ル處ニハ攝護腺里児ナルモノ有テ此
ヲ囲メリ是レ許多ノ小球相攢聚セル腺里爾ニ
メ其泄出管許多ノ口ヲ尿道ノ裏面ニ開ケリ

第二百四十八章

陰莖ハ尿道ト海綿様体トヨリ其実質ヲ成セリ
尿道ハ其本ト攝護腺里児ヲ貫テ恥骨合際ニ入
ルニ従テ漸ク狹窄ト成リ此部ヨリ板々稍寛闊
トナツテ其終リ正面ノ管トナリ其口ヲ陰茎ノ
端ニ開ク而メ其正面トナレルノ部ハ稍液ヲ備
フル丁甚タ居多ク攝護腺里児ヲ貫ク所ノ処ニ
ハ雞冠ト射精管口ト有リ其寛闊トナレルノ部
ハ海綿様ノ莖ヲ以テ囲繞セラルコノ海綿様莖
別ニ両個ノ海綿様体ト合メ以テ陰茎ヲ形成ス
陰茎ノ全体ハ通被ヲ以テ被ハレ亀頭ノ処ニ於
テハ其通被展延ノ囲包ス此ヲ前皮ト云其前皮
下面ニ在テ「トーム」ヒ」即亀頭ノ下ノ軟帯ヲ成スノ処ニ
ハ許多ノ粘液腺里児有テ臭液ヲ分泌ス○陰茎

ニ屬スル諸筋ハ即所謂勃張筋進尿筋及ヒ會陰ノ横筋ナルモノ是也

## 第二百四十九章

胎児ニ在テハ其始メノ睪丸腹腔内ノ腎下ニ位置メ左右ノ腹輪ヨリ腹膜ヲ以テ成ル所ノ一條ノ莢膜上リ出テ其睪ノ下端ニ着ク此莢膜内ニハ蜂巣状組織ト筋纖維ト睪丸ノ「レ」イドバンド有リ

## 第二百五十章

妊娠ノ中頃ニ至テ其睪丸徐々ニ下リ其莢膜内ニ入リ莢膜脱テ其中ニ狹ミ以テ腹輪ニ近通シ第八月ノ頃ニ至テ自ラ腹輪ヲ滑出シテ其脱被セル莢膜即真ノ莢膜トナリ其中ニ在ル所ノ筋纖維ハ睪丸筋トナル

## 第二百五十一章

此ノ睪丸ノ下墜ノ滑出スル技能ハ曾テ古人ノ謂ル力如ク横膜ノ壓迫ニ由テナルモノニ非ス亦タ其重力ニ由テ成ルモノニ非ス唯是筋纖維後睪丸筋トナル所ノモノノ力ラニ由テ成ルモノナリトスルノ説確実ナルニ似タリ

## 第二百五十二章

凡リ男子婚ス可キノ年齢ニ至ル時ハ生未未タ

十分ナラサリシ所ノ陰具始テ長大トナリテモヲ生シ領腋下胸間亦タモヲ生ヲ其聲変更メ全身自ラ男子ノ形成ヲ得ル

第二百五十三章

此時ヨリメ始テ精液ヲ分泌セル者起ル凡ソ精液ハ精動脈ノ末端ヨリ睪丸ノ精液管中ニ分泌サルモノニメ此精液管ヨリ副睪ヨリ輸精管ニ由テ尿道中ニ於ケル其管口ノ処ニ来リ其管口ヲ括約勁ニ閉鎖セラルヽカ為メニ再ヒ精嚢内ニ帰リ来テ其中ニ貯蓄セラル

第二百五十四章

凡ソ諸分離中精液ノ分離ニ於ケルカ如キ微少ノモノハ非ス是レ睪丸位置ノ冷カナルト其動脈及ヒ分泌管狭窄ニメ甚タ細長ナルトニ由ルモノナリ

第二百五十五章

精液ハ一種ノ濃厚白黄ナル流質ニメ甚タ重ク固有ノ臭気アリ其質ハ多質合和ノ鐵性質ニメ憐酸性ノ石炭ヲ含ミ其中許多ノ精虫ナル者有リ

註 ハウタウェリン（人名ノ試験ニ従ハ精液中尚ヲホタ至小ノ坑塩（アルカリミ子ラール）ヲ含メリ

第二百五十六章

精液ノ睾丸ヨリ輸精管中ヲ流通スル運動ハ甚
タ緩徐ナルモノニメ是レ一ニハ更ニ分泌セラ
ルヽ液ノ後流ニ由リ一ニハ睾丸筋及ヒ陰嚢内
膜ノ縮力ニ由ル

第二百五十七章

精嚢内ニ在テハ精液ヨリ貯蓄セラレテ水様部
ヲ吸取サレ以テ漸ク濃厚トナル可ーンヒユン
テルヒ氏曾テ云フ精嚢ハ是精液ノ貯処ニ非スメ
唯々一種固有ノ液ヲ分泌スルヿヲ主ル者ナリ
ト固ヨリ其裏面ヨリ少シノ粘液ヲ分泌スト雖
モ而シテモ未タ確実ノ命説トナシ難キナリ

第二百五十八章

精液ヲ射泄スル毎ニ其出ル所ノ精液ハ微ナリ
ト雖モ其量ノ大ナルモノハ是レ白色濃厚ナル
攝護腺里呪ノ大ニ混スルニ由

第二百五十九章

尿道ノヨリ精液ヲ受テ此ヲ射スルヿヲ得ルハ
陰茎ノ勃張ニ由ル而メ其勃張ノ機ハ固有ノ刺
戟ニ由テ血液ノ壓入増長メ其海綿体ノ蜂巣状
但織内溢出シ由テ又テ静脈壓窄セラレ血液充
満瀦留スルヨリ成ルモノニメ敢テ勃張筋ノ働
ニモ由ラス（勃張筋ハ唯々陰茎ヲメ起立セシムルヿヲ主ルノミ）神経ノ随

意動ニモ由ルモノニ非ス

第二百六十章

精液泄射ハ陰茎ノ起立ニ由テ精嚢ニ搐製様ノ
筋力ヲ発シ其筋力泄出管口ノ括約筋ニ勝ツカ
故ニ精液ノ尿道ニ流出スルニ由ルモノニメ其
同時間亦タ摂護戎里児液モ共ニ溢出ス

第二百六十一章

尿道ノ進速筋スルヒレンハ其卒痛ニ由テヨク精
液ヲメ尿道ヨリ射出セシム

第二百六十二章

精嚢卒痛ハヨク全身ノ神至質ニ劇甚ノ擾乱ヲ
発セシム是故ニ精液泄射ノ甚タ過度ナル唯々
血液ノ精液ヲ費耗スルカ為メノミナラス尚ヲ
亦タ神至ノ擾乱ヲ為スカ為メニ健康ヲ害スル
ヿ最甚シ

第二百六十三章

腟中ニ於テル遺精頁ニ精液ノ嚢中ニ充積スル
ヨリ発スル者甚タ稀ニメヲヿハ毒病刺戟力若
クハ疾病様ノ触動性ヨリ発スル者也尚且ツ常
慣ニ由テハ精嚢稍寛闊トナリ其吸収管ノ力増
進メタシレク交媾ヲ成サスモ敢テ健康ヲ害ルヿ
無キニ至ル故ニ少壮ノ人ニ在テハ宜ク房事ヲ

休止スルヿヲ以テ緊要トス

第二百六十四章

前皮ハヨク亀頭ヲ覆被メ其部ノ薄弱ニメ感強キヲ保禦(キン)シ亀頭ノ縁ノ処々ハ皮脂ヲ分泌メ以テ其皮ノ内面ヲ滑沢ニス

第十五回　命女子分種之撰能

第二百六十五章

○女子ノ陰具ニ属スル部種々アリ

其一子宮是レ盃内ニ在テ腹膜ノ外ニ位置シ其形状長円偏形ノ罎ノ如ク其闊大ナル部ヲ体ト云ヒ狹細ナル部ヲ頸ト云ヒ其体ノ上辺ヲ底ト名ケ其頸ノ下端闊ク所ノ孔ヲ子宮口ト名ク而ノ其子宮ハ横ニ裂開メ後唇前ヨリ短シ又タ其孔ノ子宮頸ヲ貫テ内部ニ開ク所ノ口ヲ内部ノ子宮口ト名ク子宮内ノ空隙ハ妊娠セス月経無キ時ニ於テハ三隅形ニメ其内ニ僅微ノ液アリ子宮ノ実質ハ桐蚕ニメ甚タ厚ク許多ノ巻縮セル血脈ヲ以テ錯綜セル蜂巣状組織ナリ其内面ニハ軟薄ノ粟膜被ハル其粟膜子宮頸ニ在テハ許多ノ細キ皺襞ヲナシテ其皺間粘液数里児ヲ布置スタ其外面ニ於テハ全覆セスト雖モ腹膜此カ外膜トナル子宮ノ廣靭帯ハ即チ此外膜ノ

展延セルモノニメ盃ノ内面ニ固着シ円靱帯ハ
股輪ヲ貫キ出テ蜂巣状組織ノ内ニ散蔓セリ

第二百六十六章

其二喇叭管是レ二個ノ膜管ニメ子宮ノ両側廣
靱帯上辺ノ股間ニ位置シ各其一端子宮ノ側隅
ニ口ヲ開キ他ノ一端口ハ剪絲状ノ縁ヲ以テ股
膜腔内ニ懸在シ其内膜ハ皺襞ヲナシテ粘液ヲ
塗布セリ大獣ニ於テ見ル所ノ如管負ニ於ケル
筋織維ハ亦タ人ニ於テモ必ス見レアルモノ也

第二百六十七章

其三卵巣是子宮ノ両側喇叭管下ノ後ニ在テ靱
巣靱帯（廣靱帯ヨリナル）ニ由テ被包維持セラレ各其形
長円ニメ其負綢密血絡多キ蜂巣状組織ヲ以テ
ナリ其組織中許多ノ小膜胞（其数大抵十二若クハ十五）有テ
其胞中織維負様ノ液ヲ充盈セリ此小胞既ニ懐
胎セル丁百ル所ノ婦人ニ於テハ一二個黄色ニ
変スル者有リ

第二百六十八章

其四膣是一個ノ膜管ニメ子宮頸ヨリ起テ膀胱
ト直腸トノ間ヲ下リ恥骨合際ノ下ニ其口ヲ開キ
陰門ニ終ル所ノモノニメ其上部ノ始メニ於テ
ハ子宮頸其中ニ挺出セリ而メ其実負ハ綢密ニ

メ脉絡ヲ分ク許ヲノ襞積ト粘液腺里児トヲ備フ
ル所膜ニメ其下端ニ個ノ括約筋ヲ具セリ

第二百六十九章

其九陰門是レ種々ノ部分ヨリナル即曰外唇（即大唇）
是レ其上端トニ於テ相合シ殊ニ下端ニ於テ
ハ小靱帯ニ由テ相合有セリ曰内唇（即小唇一名女子茎）
舟形洞（コイツウエ）ヲ曰（スセホルテ）延孔（一名女子茎）ノ尿道口ニ
ハ此延孔後ニアリ○處女ニ於テハ其膣ニハ変
メ膜状ノ小結節ヲ成ス

第二百七十章

妊人ノ附具ハ其撥能ヲ発ス可キノ性ヲ有スル
時間相定レルモノニメ乃チ始メテ婚ス可キノ
時ヨリ四五歳ニ至ルノ間ニ在リ○凡ソ妊人ハ
其陰具ノ撥ノ全成スルニ従テ其乳房漸ク長大
トナルヲ得陰門内ノ膣（血管ノ過多ナルカ故ニヨク勃張スルヲ）
得交媾ト分娩トニ適スルヲ得ル即膣内粘液
数里腺ノ駢多ナルモノハ此両用アルカ為メナ
リ延孔ハヨク勃起スルノ性ヲ有シ○小唇ハ臭気
（多キ皮脂ヲ備フ）尿ヲメ出ルニ適宜ノ向方ヲ得セシム
ルヲ主リ○子宮ハ胎児ノ受孕ト生養ト分娩
ヲナスヲ主ル○再巣内ニ於ケル小胞中含ム
所ノ液ハ即女子ノ資生（ヒ）負ナル者ニメ其ヨリ熟

化スル者交媾ニ由テ破裂シ流出メ喇叭管ヨリ子宮内ニ送輸セラル

第二百七十一章

處女膜ハ未生ノ胎児ニ於テハ胞衣液ノ腔内ニ竄入スルヿヲ防禦スルヿヲ全ルト雖モ既ニ生ルヽノ後ニ至テハ唯々無疵ノ処女タルヿヲ證スルヿ微トナルノミ

第二百七十二章

凡リ婦人婚ス可キノ初ヨリ四五十歳ニ至ルノ間四週毎ニ腔内ヨリ定時ノ出血ヲナス月経ト名ク其出ルノ始メヤ徐々ニメ一二日保続シ其終ルヤ亦タ徐々ナリ其第一行ノ時偶第二行ノ時ニ於テモ然ルヿアリ

第二百七十三章

月経ノ間及ヒ乳養ノ間ハ尋常其月経必ス休止スト雖モ其血ノ出ルヤ子宮内面ニ於ケル蒸発気動脈末端口ノ寛闊スルヨリ溢ルヽモノニ〆偶々自然ニ反スル症ニ於テハ腔内ヨリ溢出スルヿ有リ

第二百七十四章

月経ノ原因ハ月ノ変更ノ感動ニ由ルモノニアラス近人ノ説ノ如ク炭質窒気ノ血中ニ充積ス

ルニ由ルモノニモアラス唯々是レ女子ノ体質ハ其組織弛緩柔弱ニ子宮ノ実質ハ海綿様ニメ血絡過多ナル力為メニ弓処多血ヲ発シ易キニ由ル者也而レ𪜈其時限ノ正ク相定レル理ニ至ハ猶ヲ其他人身ニ於ケル同種ノ諸症（按ニ同歌婆ノ属ヲ伝ト俱ニ未タ十分確乎ノ明解ヲ得ス）

第十六回

第二百七十九章

夫レ人ハ他ノ獣類ト共ニ慾情ニ勧動セラレテ交媾ヲ成スト雖𪜈其受情中亦タ義ノ存スルアリ此義ノ存スルト孳尾時ノ定リ無キトヨリ人ヲシテ此機能ニ於テ他ノ獣類ト分別アルヿヲ得セシム

第二百七十六章

慾情ノ体中ニ働クヤヨク陰具ヲシテ交媾ニ適ス可ク勃脹セシムルナリ

第二百七十七章

交媾ノ時間茎腔内ニ在ルヤ其刺戟ノ漸ク増進スルカ為メニ勃張益々増脹シ精液ヲ射出シテ其出スル所ノ液全クミナ然ルニ非スト雖𪜈少シリ子宮口ヨリ其中ニ送輸セラル子宮直チニ此ニ刺戟セラレテ陰門ノ勃張スル如ク勃張シ其

刺戟尋テ喇叭管ト卵巣トニ及フ由ヲ以テ喇叭管端ノ旁系起張メ乎巣ヲ囲ミ乎巣内ノ小泡一二許自ラ膨脹メ破裂メ其含ム所ノ液溢出ツ喇叭管ニ吸取サレ其管ノ蠕動掻ニ由テ子宮内ニ送輸セラル而シテ其既ニ破裂メ乎巣中ニ残在セル小泡内ニハ黄色ノ海綿系内ヲ形成ス此諸機動ノ発スルヤ唯一頓時ニ在ルニアラスメ寛徐ナルモノナリ

第二百七十八章

偶々受胎ノ乎巣中若クハ喇叭管内ニ在ルヲ見ルヿアルカ為メニ人ヨク女体生産ノ男精ニ為マサル丶ヤ既ニ乎巣内ニ於テアルヿヲ保證ス

第二百七十九章

或人曾テ云真ノ微小ナル乎巣ノ小胞ヨリ出テ刺叭管ヲ通リ子宮内ニ未ルト此説未タ臆タルヿヲ免レス

第二百八十章

夫レ人身ノ始メラ生々スルヤ其機将ニ如何ナル乎ノ論説ニ二流アリ其一流ノ説ニ曰フ凡ソ新タニ発生スル機体ノ原基ハ交媾前既已ニ此アル者ニメ唯交媾ノカヨリ此ヲ発動セシムルモノ有ナリト其説後タニツニ分ル其「ハ此原

甚ヲ男精中微虫ニ在リトシ其一ハ此ヲ女子ノ
卵巣中ニ在リトスル両ナガラ共ニ自然ノ規矩ト
符合セス

第二百八十一章

他ノ一流ノ説ニ云ク凡ソ父母ノ体中ニ於ケル資
生質ハ各俱ニ未全成ノ者ニメ其両質一定時間
ノ始合メテ一種ノ新物ニユーエレメンツ形成ス其形
成スルヤ発動ニ非スメ真ノ発始ニフロレツト
ナル者ナリ○凡ソ此学論ニ於ケル諸説中ブリュ
メンバック人名カ形成力ホルムレツトノ説実未タ明亮
透徹ナラスト雖モ我輩ノ如キ未タ明解ヲ得サ
ル者及ビ前命ノ如キ偏僻ノ説ヲ成スモノニ比
スルニ大ニ超絶セリ

註 憶フニ其人種ハ父母ノ体中ニ於ケル両資
生質ノ妙合ニ生スルトスルノ説甚タ真ニ近キ
ニ似タリ其微種類多キ獣殊ニ犬ニ於テ最モ
明ナリ譬ヘハ〔モフホン〕ト〔ホロク子ー〕ト
ヲメ交媾セシムルニ其産ム所ノ子種々ノ類
ヲナス即チ或ル時美麗魚比ノ〔ホロク子ー〕
ヲ得或ル時ハ其両種間ノ者ヲ得ル尚ヲ其他
普通篇 第二百八十二章ニ挙ルノ命説ヲ比考セヨ

受孕後直ニ子宮ノ内面ニ其部ノ蕚発気管ヨリ
滲出セル織維質ニ由テ取謂ル囘ニンデル人各ノ脱
落膜ウエウ、ハルレンテフリースナル者形成ス

第二百八十三章

受孕ノ後第二週ノ頃ニ至テ子宮内始テ再ヲ生
ス再ハ一個ノ膜胞ニシテ其内水液充塡シ其最外
膜前章ニ云所ノヒユンデ膜ヲ以テ最外膜トス他尚ヲ二襲ノ膜ヨリ
成ル其一襲外部ニ在ルモノハ此ヲ脉膜ト名ク
其外面血絡過多ノ蜂巣状組織ヘ此ヲロッキ膜トス ヲ以テ
被ハレ他ノ一襲内部ニ在ル者ハ此ヲ羊ム亞膜
ト名ク其内充塡スル液ヲラムス膜液ト名ク其

始メ一週間ハ脉膜甚タ大ニシテラムス膜小リ其
膜間玲瓏透明ノ水液充ツ而シテ其後チラムス
膜ノ長育スルヿ甚タ速ニシテ其膜間ノ液漸ク消
散シ終ニ両膜相固着スルニ至ル○再ノヒユンテ
ル膜ト愈着スルヤフロッキフ膜ニ由ルモノニシテ
此合着ヨリ胞衣ヲ生ス胞衣ノ下ニ出ツ

第二百八十四章

羊ム亞膜ハ分娩ノ時ニ至ルマテ断ヘスラムス
膜液ヲ其中ニ含蓄ス此液ハ水様ノ黄色透明ナ
ル液ニシテラムス膜ノ蕚発気管ヨリ分泌サレ胎
児ノ長育スルニ従テ其量漸リ増進ス而シテ其用

タル一ニハ其中ニ漾泳スル胎児ヲ保禦スルヿヲ主リ一ニハ卵及ヒ子宮ノ冊ヲ壓迫スル諸刀ヲ適宜ナラシムルト膜ノ破裂ニ由テ流出シ以テ子宮口及ヒ膣内ヲ滑沢ナラシムルヿヲ主ル

第二百八十五章

受孕ノ後第三週ノ頃ニ至テ始テ胎児ノ其液中ニ漾泳シテ臍帯ニ係ルヲ見ル此時其胎児ノ大サ小豆ノ大ニ過キス甫后漸次ニ長大シ已ニ生ルヽノ時ニ至テハ一尺八寸ヨリ二尺二寸許ニ至リ其重六七匁ト ナルニ至ル○凡リ人ニ在テハ婦人ノ妊娠スル其胎一個ニ過サルヿ定理ナリト雖モ偶々稀胎アリ三胎アリ甚タ稀ニ亦タ四胎五胎六胎ノ者アリ而レモ其孕キ者ハ必弱劣ニシテ生長スルヿ難シ

第二百八十六章

既ニ受孕セル後チ相次テ重孕スルヿハ体質製造ノ善ナル者ニ於テ此アルニアラス

第二百八十七章

胎児ノ母体ト相傳ルヤ臍帯ト胞衣トニ由ル而メ胞衣ハ昂臍帯ノ固着シ終ル所ナリ此両物ト卵ノ膜ト共ニ此ヲ後産ト名ク

第二百八十八章

臍帯ハ其実質一條ノ静脈ト二條ノ動脈ト吸収管トヨリ成ル者ニシテ其諸管ミナ蜂巣状組織ニ由テ合束セサレ引ムスフ膜ノ展延セル者ニ由テ被包セラル

〔註〕臍帯中ニ吸収管アリトスル者ハ臆説ニ似タリ右未タ曾テ此ヲ実験セル者アルヲ聞カス

第二百八十九章

胞衣ハ其実質海綿状ニシテ多血絡錯綜セル蜂巣状組織ナリ即チ是レ卵膜外面ノ一部分其「ヒュン」テ「ピ」膜ト相愈着スル「ミ」ノ「フロッケン」ヨリナル此胞衣ノ子宮ニ着クヤ尋常其底ニ在ト雖モ偶々亦タ其側面若クハ子宮口ノ處ニ固着スル者有リ

第二百九十章

胎児ハ其養ヲ胞衣ト臍帯トヨリ受ル者ニシテ其血液酸質ヲ此部ヨリ得ル其機是レ子宮ノ血脈ト胞衣ノ血脈ト直チニ相接合セスシテ有媒的ニ相接スルヨリナル者ナリ或ハ胎児ノ生養ハ「ムスフ」膜液ノ吸飲ヨリ成ルト云ノ説アリト雖モ確実論ニ非ス

〔註〕夫レ胎児ノ母体ヨリ受ル血液ハ既ニ母体

ヲ循環セルノ血ナルカ故ニ其炭質ト水質ヲ
含ムヿ甚タ過多ニメ實ニ静脈血ト異ナルヿ
无ク胞衣亦タヨク此多害質ヲ按ニ炭質水質ヲ云也除
スル技能ヲ有スル者ニ非ス故ニ自然ノ良能
別ニ一種ノ妙技ヲ備テ此害ヲ免レレム○脐
帯動脉ノ脐ヲ貫キ入ルヤ直ニ肝蔵ニ入ル予
曾テ胆液分泌ノ條ニ於テ云フ肝ハ血液ヲメ
過剰ノ炭質ト水質ヲ離レレメ此両質ヲ取テ
以テ胆液ヲ製造スル一種ノ性ヲ備フル者ナ
リト且ツ今解剖ニ由テ経験スルニ小児ノ肝
蔵ハ甚タ大ナリ之ニ由テ此ヲ観レハ胎児ニ

此章訳誤也
凡ソ脐帯動脉二管静脉一管也
而二管動脉者行於腸骨入
肝自一管静脉帰于母体也尿
道者混于静脉而帰也

在テハ肝蔵ヨリ肺ノ用ヲ兼ネ子血中過剰ノ炭
水二質ヲ除去シ此ヲ動脉血孫ノ性ヲ與テ以
テ栄養ニ適セシムルヿヲ主ル者ナリ又タ其
分離サル、所ノ胆液腸内ニ入テ吸収管ニ其
水様部ヲ吸取サレレ以テ稠凝シ阿片ノ如キ状
トナル

第二百九十一章

此ノ如ク生育セラルヽヿ四十週即二百八十日ニメ九箇ノ月
ナリニメ胎児ノ形成全ク成ル其形成ノ序タル
其初メ第一月ニ於テハ唯頭部ノミ明ニメ其状
恰モ体ト功動セル者ノ如ク第二月ニ至テハ四

肢ヲ生シ第三月ノ末ニ至テハ陰具ヲ生シ第四月ニ至テハ凡ト毛髮ヲ除ノ外其形成殆ント備リ脂肪ト胆液ノ分離ハ第五月ノ項ニ至テ始メテ其撥ヲ発ス

註 胎児ニ於テ人ノヨリ胆液ト脂肪ヲ早ク見ルヿヲ得サル者ハ肝臓ヨリ炭質ト水質ヲ自己ノ実質中ニ吸取スルヿヲケレハ也

第二百九十二章

胎児ノ体質ハ其初メ甚タ軟薄ニメ漸ク栄養ニ因テ其織維質ヲ増加シ以テ徐々ニ筋腱及骨ノ軟骨様基ヲ形成スヿ而メ此軟骨様基ハ大抵第八週ノ頃ヨリ漸ク骨トナルヿヲ始ムヿ而シテ十分全成ノ児ニ於テモ諸骨ハ高ヲ未全成ノ者ヨリ殊ニ頭蓋骨ノ如キハ骨間大ニ開ケル處アリ又歯ノ如キハ基始第五月ニ終ル○凡テ体ノ下部ハ十全全成スルヿ殊ニ最後徐ナリ

第二百九十三章

未生ノ体ト既生ノ体トノ間有スル所ノ別二種有リ其一心臓是レ胎児ノ始メテ見ルヽヿヲ得ルモノニメ体中他部ニ比スルニ甚タ大ニメ触動強ノ其附室(アーセム)間ノ中隔ニハ楕圓孔ナル者アリ此孔ハ血液ヲメ前附室ヨリ直チニ後附室ニ輸

ラシムルヿヲ主ル者ニメ固有ノ障膜ヲ備ヘ以テ其血ノ血流ヲ防キ其児ノ既ニ生レテ前室ノ血液直ニ肺ニ入ルヿヲ得ルニ至テハ此障膜自ラ此孔ト合着ノ此ヲ閉塞セシム○又下幹静脉ノ心藏ニ終ラントスル所ニハ卍ウスタキアーン氏障膜ナル者有テ血行ヲ妨ケ以テ此ヲ再円孔内ニ入ルヽヿヲ得セシムルヿヲ主ル○又タ肺動脉ト動脉大幹トヲメ相繫連セシムル所ノ二種ノ動脉管アリ是レ肺動脉ニ入ル所ノ血ヲメ直ニ動脉大幹ニ輸ルヿヲ主ル者ニメ生後ハ愈着シテ閉塞ス

其二肺藏是レ未タ呼吸ヲナサヾルカ為メニ萎縮シ且游気ノ其中ニ在ルヿ無キカ為メニ既生ノ人ニ比スルニ其量甚タ重シ心ノ前室ヨリ此部ニ来タル可キ所ノ血液既ニ再円孔ヲ通テ後室ニ入ル力故ニ此藏ニ来ラス

其三胸郭里児是白色柔軟血絡過多ノ体ニメ胸腔内ニ位置ス其用萎縮セル肺藏ニ代テ胸腔ヲ横張シ血液ヲ吸取スルヿヲ主リ生後ニ至テハ積耳漸ク相耗ス

其四臍帯ノ血脉其静脉ハ臍ヨリ肝ニ至リ二枝ニ分其右枝ハ門脉ノ左枝ニ合シ（大人ニ比スルニ甚タ大）

テ肝ノ負中ニ散蔓シ血液ヲ肝静脈下幹ニ輸リ
他ノ一枝ハ直ニ静脈大幹ニ合ス脐動脈ハ胯動
脈ヨリ起テ脐ヲ貫キ出テ以テ血液ヲ皮流セシ
ム此諸血脈共ニ三十生後ニ至テハ愈有メ閉塞
ス
其五小腸及ヒ胃共ニ小ニメ窄リ盲腸短クメ其
中チ腸粘液ト胆液トヨリ成レル黒糞アリ
其六腎ハ種々ノ小塊ニ分レ其分泌スル所ノ微
小ノ尿ハ膀胱ヨリ尿系（按ニ即膀胱軟管ヲ以テ）
脐帯ニ送輸セラル
其七男胞ニ於ケル睾丸ハ第七月ニ至ルマテ腹
腔内ニ在テ後チ漸ク下リ出（漸次出ヲ形容スル字）テ
其八眼ノ瞳孔一種ノ薄膜ヲ以テ閉張セサレ才
七月ニ至テ始テ中点ヨリ破レ漸ク開大トナル
其九聽道骨部唯々一個ノ骨輪ナルノミ（按ニ其短ナル）
其十鼻孔及ヒ其洞共ニ未タ全成セス
其十一皮表白色ノ粘脂ヲ塗布シ以テ「ラムス」液
ヲ拒防シ分娩ノ既出ヲ容易ナラシムス又タ其胎
児ノ全成セル者ニ於テハ已ニ毛髪ヲ生ス

第二百九十四章

子宮ハ妊娠ノ間滋潤軟和メ其内面ヒシデ膜

ニ被ワレ胎児ノ生長スルニ從テ漸ク膨脹シ以テ其頸短縮メ至薄トナリ子宮口（席ニ膜裂セリ）圓形ヲ得ル其頂中ニ於ケル蛇形ノ血直行ヲ得ル（按ニ前ニ云子宮頂中ニ菊條セル血脉ハミナ巻縮セリ）此ノ如ク膨脹スト雖モ尚ヲ液ノ其実頂中淦クヿヲキカ故ニ其実体大ニ至薄トナラス此藏第一日中ニ在テハ深ク盃内ニ沉下シ後テ漸ク膨脹スルニ從テ徐々高ク上リ妊娠ノ中項ニ至テハ胎児大ニ増長メ子宮ヲ充塡ス故ニ毋ヨリ児ノ動揺スルヲ知覚スルヿヲ得終週ニ至テハ其重量ヲ以テ子宮盃骨ニ沿テ（此五字ヲ補テ後明ヲ待ツ）少シク下墜ス其他尚ヲ妊娠中ニ発スル凡ノ諸変ヲ亦ヲレト雖モ皆切実ニ妊娠ノ證徴トナシ難シ

## 第十七回　論分娩

### 第二百九十五章

胎児妊娠ノ始メニ在テハ引ムニ液中ニ自在ニ泳泳スト雖モ其終ニ至テハ其頭骨宮ニ向テ偏倚シ顔斜メニ後ニ向ヒ後頭斜メニ前ニ向ヒ稠密ニ其中ヲ充塡ス

### 第二百九十六章

受孕ノ後四十週ニメ子宮自ラ収縮シ以テ分娩ヲナス其収縮一ニハ其頂中ニ於ケル勒織維ニ

由リ一ニハ其彈力ニ由テ発起スルト雖モ其発起スル機未タ尋常ノ触動性ヲ以テ十分ニ明ラムルヿヲ得ス此幸産ヤ固ヨリ不隨意ナリト雖モ亦母ノ努力ニ由テ其力ヲ増スヿヲ得

## 第二百九十七章

此幸産ニ由ルヤ子宮狹窄短縮シ由テ以テ兩中ノ液ト児ト共ニ子宮口ニ向テ搾出セラル

## 第二百九十八章

此幸産ヤ一勢ニ相保続セスメ数々相番替シ以テ堪エ難キノ疼痛発起スル此ヲ真ノ陣痛トナク此時ニ元発スル所ノ下体ニ於ケル他ノ諸疼痛ヲ假陣痛トスフ

## 第二百九十九章

分娩ノ時ニ於ル時限分テ四トス其一ヲ預兆陣痛（ホーレルセヘン テウエーン）ノ時限トス此時ニ於テハ腔内過多ノ粘液湧出シ子宮下墜シテ子宮口稍開ク其ニヲ劇甚増加ノ預兆陣痛（フルムテルクテ、エンフテホールベレメーニスヒュルンテンデーウエーン）時ト云此時ニ於テハ兩膜ノ一部分子宮口ニ壓出セラル其三ヲ分娩ノ陳痛時（ケホールテ ツエーン）トテ云此時ニ於テハ兩膜ノ已ニ子宮口ニ出スル部益々壓出帯張セラレ以テ終ニ破裂シ由テラムス膜液流出シ児頭仍ヲ子宮内

ニ在ト雖モ進出ス其四ヲ至極劇裂陣痛時ハ
レスステルリ
ステウエーン
ト云ヒ此時ニ於テハ子頭子宮口ヨ
リ膣内ニ壓出サレ會陰裂ヲ牽張シ終ニ陰門ノ
大唇間ヨリ外ニ出テ迅テ以テ其他部速カニ
脫出ス

第三百章

小児ノ生レテ臍帶ヲ切斷スル後少時ニシテ子宮
再ヒ収縮シ以テ後産ヲ搾出ス

第三百一章

児及ヒ後産ノ出ル後一二日間相続テ子宮ヨリ
出血ス此ヲ悪露ハ
ルヘリンリ
ムフ
ヤト云フ後チ漸次ニ
白色トナリテ其量減シ終ニ全ク過止ス

第三百二章

出産后ハ子宮膣腹部及下体ノ皮膚甚タ弛緩ス
ト雖トモ収縮ノ終ニ前ニ復ス

第十八回　命乳汁分泌

第三百三章

分娩ノ后母体ノ乳房内ニ乳汁分離ノ機能ナル
モノ起ル

第三百四章

乳房ノ実質ハ数里児ヨリナル者ニシテ其数里間
ハ種々ノ小数里児簇簇シ脂肪ト通被ヲ以テ被

ハレ其毎小数里児ヨリ泄出管ハ許多相聚ノ乳管トナリ其乳管ハ微小ロヲ乳房顕ニ開ケリ

第三百五章

女子ノ乳房ハ已ニ婚ス可キノ時ニ至レハ其大自ラ増長其生育ノ勢身体他部ニ於ケル者ヨリ強シ

第三百六章

陰具ト乳房ト同時ノ全成ヲナスノ外亦タ乳房ハ子宮ト其機能相関應ス即妊娠スレハ乳房起脹シ分娩スレハ乳汁分離ヲ肇ム

第三百七章

分娩后第一若ク若ハ二日三日ノ間乳房内ニ血液ノ衝入スルヿ増進シテ熱病様ノ症ヲ発シ又テ乳汁其数里児内ニ分泌サレ乳管ヨリ乳頭ニ滲出ス

第三百八章

乳汁ハ白色脂様ノ流質ニシテ其味甘ク愛ス可キノ香気アリ此質三種ニ種分ル即一ヲ乳清ト云ヒ（原名ウエイ是レ乳ケルト砂糖ト水液トヲ以テ成ル）一ヲ乳膜ト云ヒ（原名ロームヒ是レ其成分ハ即ホートルナリ）一ヲ乳酪ト云フ（原名カスト）凡ソ人ノ乳汁ハ他ノ諸乳汁（按ニ他ノ諸獣類ニ於ケル者ヲ云）ニ比スルニ其乳酪トホートルヲ含ムヿ最モ少ク殊ニ

始メテ分育シ出ルモノハ甚タ水様ナリ然レ𪜈
分娩ヲ去ルニ迄テ漸ク稠厚ナル

註 乳汁内ニハ乳糖ノ外尚ヲ他ノ塩類ヲ含ム
ヲ見ル即燐性石灰ヲ含メル塩酸性ノ剥-篤-亜
斯ト食塩トアリ○海塩酸性ノ剥-篤-亜-剪ハ血
中ニ於テ見ルヿヲ得スト雖𪜈乳糜中ニ於テ
ハ過度ニ此ヲ含ヲ見ル此ニ由テ此ヲ観ルハ
乳汁ノ製造ニ於ケルヤ水液其用ヲ助クルヿ
必ス多者也○燐酸性石灰ハ乳婦ノ尿中ニ在
テハ甚タ僅微ニノ尋常ノ尿中ニ甚タ多シ此
ニ由テ此ヲ観ルニ自然ノ妙技豈驚セサル可

シヤ夫レ此頁ハ母体ニ害アリト雖𪜈児ニ於
テ骨頁製造ニ缺ク可カラサル者也故ニ乳房
ヲノ胃ノ機用ニ代ラシメテ以テ児ヲ生養ス
ルナリ

第三百九章

夫レ乳汁ト乳糜ノ同性ナル飲食茶剤ノヨク乳
性ヲ変スルト乳汁分離ノ量ノ常ニ飲食ノ量応
スルトニ由テ此ヲ観ルニ乳汁分離ハ唯是レ乳
糜ノ血中ニ入テ未タ血液同性ノ頁トナラサル
者ノ直ニ乳房ニ来ルヨリ他無キ者也

第三百十章

乳汁ノ洩出ハ其乳房内ニ溢満スルト外部ノ壓迫トニヨリ殊ニ哺乳ノ時ハ遊気ノ壓力ニ由ル（按ニ是即吸角ト同理ナル可シ）

第三百十一章

乳艱ノ間ハ通例其月経必ス休止ス

第三百十二章

哺乳ノ止ムル時ハ既ニ其乳房中ニ分泌セラルル所ノ乳汁ハ漸ク吸収シ去ラレテ分泌ノ機漸ク減シ終ニ全ク止ムニ至ル

第十九回

第三百十三章

児ノ子宮内ニ在ル ヤ土様質（即繊維質）ノ栄艱ニ由テ漸ク体質全成シ因テ百ノ生活熟スルニ至テ始テ産出ス其産出スル ヤ直ニ胸腔張横ノ呼吸スルヿヲ始メ心藏ノ卵円孔ト動脈管（共ニ肺ニ出ツ）臍帯ノ血脈トニ ナ愈有閉塞ス

第三百十四章

初生ノ児ハ其未タ薄弱ナルト五神ノ全成セルカ為メニ其状恰モ昏睡ヒル者ノヽ如ク唯栄艱ノ為メニ母乳ヲ哺スル ヤ寤覚ヲナスノミ

第三百十五章

爾後其機能日々ニ漸ク全成其外識徐々ニ発動

レ第八月ノ項ヨリ齒生メ食ヲ齒ムヿヲ得筋肩
断ヘス強固ニ進テ立ツヿヲ學歩ムヿ覺ヘ終ニ
言語ヲ成スニ至ル

第三百十六章

六七八歳ノ齡ニ至テハ乳齒漸ク脫ケテ三十二
枚ノ齒ト代リ体力識力共ニ漸次ニ発動シ殊ニ
此年齡ヨリメ記臆治癒ナルヿヲ得ル

第三百十七章

十四五歳トナルニ至テハ已ニ婚ス可キノ体勢
ヲ得想識力大ニ進ミ体質ノ生長ニ於テハ殆ン
ト全成ス此間ノ年齡ヲ司シゲリングスヤーレ
ントヽ云フ

第三百十八章

是ヨリメ其識進愈々増加シ機力益々全成シ
以テ人身全成ノ極級ニ上リ至ル此年齡ヲ司マン
子レイキフウテルド（男子ノ男子タル年齡トヽ云ホドノ義）即是
思考力（ファールテンスカラクト）ノ最モ熟スル時ナリ

第三百十九章

人身全成ノ極級ニ至リ盡スヤ其機再ヒ減殺セ
サルヿヲ得ス土質漸ク体中ニ増加メ諸器強硬
脆剛トナリ以テ漸次ニ其機能ニ適セサルニ至
リ色慾止テ神識力衰ヘ諸脉漸ク閉塞メ栄養達

セス毛髮燥ノ齒脱落シ全身枯燥羸瘠ノ皮膚皺
襞ヲ生シ量衰耗ノ体ヲ直立セシムルヿ難ク外
識ニ減退ノ稽弊スルニ至ル

第三百二十章

此ノ如ク生活力益々弱ハリ諸器愈々其機能ニ
適セサルニ至ルカ故ニ終ニ死セルヿヲ得ス其
死スルヤ一息ノ長呼氣ヲ以テ終ル

第三百二十一章

然レ𪜈人身ノ性命ハ全器機若クハ生活ニ必用
ノ一器機中ニ防害ノ発スルニヨリ或ハ刺戟ノ
過不及アルニ由テ夭ク常度ニ越テ早ク過絶
スル者アリ凡ソ人ノ死スル其徴ノ確乎ト違
フヿ無キ者ハ唯是レ体中已ニ兆サス所ノ腐敗
ナルノミ

人身窮理小解大尾

文久元辛酉八月吉日

京師於扶陽堂取寫之

坂本亢瑞所持之